
水面の月～The Reverse Of The Girl～

シンイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

水面の月／The Reverse Of The Girl

【Nコード】

N4994W

【作者名】

シンイ

【あらすじ】

突然、中世の日本のような世界に放り出された一人の男子高校生。しかし、異世界での生活は決して楽しいものではなかった。

『水面の月』のもう一つの話。「影映り」の向こう側、“彼”の世界が舞台です。

『水面の月』月下辺のお話になります。

この小説だけでも楽しめるような話作りを心がけていきますが、別連載『水面の月』を読んでいただと、より世界観が分かると思

います。

彼のプロローグ

ザーザーと激しい雨がもう二日も降り続けている。空はどんよりとした重たい雲がかかり、目の前は真っ白とも真っ黒とも言えない曖昧なグレーで煙っていた。激しく打ち付ける雨音が蹲る少年の聴覚を支配している。おかげで、こんなに雨音がうるさいのに彼は静寂に包まれていた。

少年はほとんど崩れかけている空き家の中にいた。戸口の近くで膝を立てて座り、じっと動かない。フーツフーツと息を殺して外の様子を伺っていた。きらっと反射した緑の眼鏡が鋭く光る。ぎらぎらとした荒々しい感情を押し殺すその姿は、まさに手負いの獣のようだった。彼の隠れるぼろい空き家は、天井の板が所々腐り落ちており、雨漏りというのがおこがましいほどの水が入ってくる。しかし、制服の紺のズボンもシャツも濡れて全身に張り付いていれば、そんなことは微塵も気にならなかった。

外の気配を探りながら、少年はこの半月のことを思い出していた。

突然だったのだ。本当に。あつという間に自分の取り巻く景色が変わった。歴史の資料集の中で見た、中世の日本のような町並みに放り出されたのだ。持っているのはジャージの入ったスポーツバッグだけ。周りの人間はまるで映画村から来たような、時代錯誤な奴等であつとも話は通じなかった。言葉は同じ日本語なのに、会話ができない。部活帰りの少年を彼らは化け物が現れたと言って大騒ぎを始めたのだ。その後は一対多勢の鬼ごっこだ。鎌やら鍬やら、物騒なものを掲げられながら鬼の形相で追いかけられる。どっちが化け物だと思いつながら、見慣れない土と木でできた町を、右に左に逃げ回り、くたくたになったところで、老夫婦に匿われた。彼らは、親切に寢床と質素な食事を用意してくれた。疲れきっていたので、明日このわけの分からない事情を話そうと眠りについたが結局それ

は叶わなかった。

ふと物音に眼が覚めると誰かが近寄る気配がする。不審に思って寝たふりのまま様子を見れば、丁度老夫婦が自分に向かって包丁を振り下ろすところだった。間一髪、身体を横に捻りそれをよけると、眼鏡だけ掴んで身一つで外に飛び出した。真っ暗闇の中を必死に駆け抜け、どこに向かっていくのかもわからないまま一晩中走り続けた。

それからは地獄の日々である。

今まではどこにでもいる極普通の高校生だったのに、ここでは近寄るのも怖い化け物だった。新しい集落へ行っても、そんな自分にまともに取り合ってくれる人間はどこにもおらず、ただ、集落の隅のほうでじっとしている他なかった。

そして、問題だったのが食べ物の確保である。荷物も財布もあの老夫婦の家に置いてきてしまったし、どちらにせよ自分の持っていたお金が使えるとは思えなかった。彼らは皆穴の開いた丸い銭で売買をしている。近くで見たこと無いのでいまいち判断つかないが、あれは銅銭というやつではないだろうか。現代の金も、この世界の金もないのでは買い物で食い物を買うことはできない。しょうがないので水とその辺の野草で我慢することにした。しかし、現代っ子に食べられるものと毒草とを見分けられるわけが無い。すぐにはずれを引いて、三日三晩ひどい腹痛に苦しんだ。その時に見た母親に看病される夢は、泣いてしまうほど温かくて優しい悪夢だった。

この半月でいつも思うのは、何故自分がこんな目に遭わなければならぬのかだ。周りから奇異と怖れの目で見られた時。半日近く追いまわされた時。老夫婦に殺されそうになった時。毒草にあたって死ぬ思いをした時。飢えに耐えられず、人様のものに手を出してしまった時。いつも、いつもその言葉が頭の中で激しく暴れだす。今だってそうだ。町中の人間にまた追いかけられている。彼らは本気で自分を追い出しにかかったらしい。何故、何故と思いながら、

ぐつと呻いて脇腹を押さえた。汚れた白いシャツに血が滲んでいる。いくつか物を投げられたから何かが当たっていたのだろう。気が付かなかった。しかし、なんてことはない。これも日常だ。これが日常だ。

もう帰りたいたいなんて思わなかった。帰れなくてもいいから、もつとまっとうな生活がしたかった。

朔の日の終わり 1

春日部千次郎幸望公が第八代当主になられたそうだ。今市中を流れる噂はもっぱらこれであつた。ようやく長かつた跡継ぎ問題のいざこざも終わり、空いたままだった鹿角城城主の席も埋まる。しかし、それを噂する市民たちの声は暗く、表情も落胆の色が隠せなかつた。この新しい殿様は先代の第五子で、母親は正室である。まだ二十代で若く、人柄が良い。ここまでなら、なんの申し分もないのだが、ただ、その人の良さが彼の最大の短所なのだ。彼の領民は、この幸望公が家臣たちのただ傀儡でしかないことを知っていた。家臣が白といえ白に、黒といえ黒という男である。もし、腹違いの第四子や、第六子ならばあの城に巢食う古狸どもと渡り合えただろうに、何故最悪の人選になったのか。領民たちは、ただ涙するばかりである。彼の評判は良くも悪くも近隣諸国に届いている。これからは厳しい時代になる、と誰もが唇をかみ締めた。

なんとか半月持った。今、満尋が思うのはそれだけである。崩れかけた空き家に身を隠しながら、獣のように生きてまだ半月。学校帰りにタイムスリップしてから、小説のようないいことなんて何もない。ただ、命だけがなんとか無事である。血と泥で汚れた制服はボロボロで、さらに雨にも降られたので全身びしょびしょだ。服の破れたところからはいくつもの傷が覗いている。碌に手当てもせず不衛生なままだったので、化膿しているところもあった。

(あいつら、もう行ったか?)

もう何度目になるのか、この間やってきたばかりのこの町でも満尋は追われていた。正直、この連中とは関わりたくないが、山は獣が出るし食べるものがなかった。いや、食べ物はたくさんあるのだろうが、道具も知識もない満尋には手に入れないのだ。だから、何度追いかけられても町から離れることはできなかった。

（くそっ、俺だってホントはこんなことしたくないんだ）

満尋は適当に引っ掴んできた乾物を握り締めた。この盗んだ僅かな干し肉と魚の干物で食い繋いでいくしかないのだ。

ぱしゃり、と雨音に混じって土を踏む音が耳に入ってきた。途端に満尋は緊張し、息を潜めて自身の気配を殺す。満尋は命の危険が迫ると、人間がいかに早く環境に順応するかを体感していた。この半月で、五感は鋭敏になった。もともと近眼なので視力はあまり変わっていないが、暗闇の中でも薄っすらともものを見ることができるようになった。そして、今一番頼りになるのは聴覚だ。ぱしゃ、ぱしゃ、と移動する足音に意識を集中させて自分との距離を測る。大丈夫、まだ遠い。変わったのは五感だけじゃない。あちこち逃げ回ったおかげで、身体もずいぶん軽かった。単純に不摂生で余分な肉が落ちた所為もあるが、体の使い方というものがわかった気がする。肉と魚を結んでいる縄を口にくわえて、できるだけ音を立てないように、地面を這うような低い体勢で崩れた壁まで移動する。野良猫みたいなこの姿が、受験勉強に追われているただの高校生ではなくなってしまったことの証明だ。耳は相手との距離を測り、頭の中では壁に開いた穴から逃げる計画が目まぐるしく展開している。満尋は、確かに自分が変わってしまったことを感じていた。

すぐ近くでピタリと止んだ足音に満尋は警戒を強めた。今身を隠しているところは、ちょっと覗いたくらいでは見えないはずだが、中に入ったられば間違いなく見つかる。この時代の人々が盗人にどんな罰を与えるか分からないが、死ぬ可能性も考えておかなくてはならない。自分は一度、彼らに化け物といわれて追われたこともあるのだ。絶対に捕まるわけにはいかない。

足音はしばらく家の前をうろうろした後遠ざかっていった。

満尋は溜め込んでいた息を吐き出すと、壁に背を預けて脱力した。危なかった、危機一髪である。今まで緊張していた分、開放感は大きい。ゆっくり目を閉じて、このまま今日は寝てしまおうと思っていると、

「やはり、いたか」

壁の穴から男が顔を覗かせて言った。

完全に油断していたため反応が遅れた。すぐに駆け出そうとするが、男が壁から手を伸ばして満尋の腕を掴むのが先だった。今まで出会った町人達と違い、男は鍛えられた締まった身体をしていて、とても振りほどこくことができなかった。

「こら、逃げるな。別に捕まえに来たわけじゃない」

「現に今捕まえてるだろ」

男はそのまま身をかがめて空き家の中へ入ってきた。何とか逃げようとする満尋が言い返すと、笑って「そうだな」と腕を放した。放された腕をさすり男を観察すると、意外と若かった。声が落ち着いていたので結構歳がいつているかと思っていたが、たぶんまだ二十代だろう。もしかしたら、自分と二、三しか違わないかもしれない。小袖に括袴という姿は町人達と変わらないが、袴の上から褐色の帯を巻き、腰には太刀を差している。重心のぶれない真っ直ぐな立ち姿は、剣道をずっと続けていた現代の友人にそっくりだ。もちろん、この男の方がずっと完成されていて、隙がないが。こいつからは逃げない方がいいだろう、と判断した満尋は、警戒態勢を崩さぬまま男と話をしてみることにした。

「捕まえに来たわけじゃないなら、何の用で来たんだ？」

「何、化け物退治を請け負ってきたんだが、どうやら依頼主の勘違いのようだな」

「あんたは、俺が人に見えるのか？」

「違うのか」

まっすぐこちらを射る視線は真剣で、満尋がこちらに来て初めて受けるものだった。

「……違うない」

搾り出した声は、満尋の中にすとん、と落ちてきた。そして、自分はずっとこれが言いたかったんだと悟る。静かになった満尋を見

て、男はまたふつと笑った。ああ、あれは人に向けてする表情だ。
そのままぐらりと体が傾いて、満尋は意識を失った。

朔の日の終わり 2

ヒグラシの鳴く声が頭の中に響いてくる。身体は温かいものに包まれていて、目を閉じたまま無意識に頬擦りした。だんだんはつきりしてくる意識に、それが布団だと分かると、満尋は勢い良く身体を起こした。

夕暮れの時の西日が部屋の中をオレンジ色に染め上げていた。視界がぼやけているが、ここがあのぼろい空き家ではないことは分かる。つるつるの板敷きの床には埃っぽさがなく、天井からは雨漏り一つしていない。布団から抜け出して立ち上がると、自分が制服ではなく白い浴衣を着ているのに気が付いた。そのまま開けっ放しの戸口へ行くと、部屋の外には縁側のような長い廊下があり、その向こうは塀に囲まれた庭だった。隣にも戸は閉まっているが同じような部屋があるようだ。なぜ自分がこんな所にいるのか理解できなくて、満尋は呆然と立ち尽くすことしかできなかった。

しばらくすると、満尋の耳がみしみしと床の鳴る音を拾った。それが複数人の足音で、こちらに近づいていることを悟ると、よく見えない目で音のする方を睨み付けた。角を曲がって現れたのは二人の男だった。顔は判断できないが、彼らは一瞬立ち止まると手前を歩いていた男が声をあげた。

「お、もう起きたのか。調子はどうだ」

その声には聞き覚えがあった。あの空き家で自分を捕まえた人間と同じ声だ。それから、目覚める前の記憶が次々と蘇ってきて、自分が途中で気を失ったことまで思い出す。

「ここは……。俺をどうするつもりだ」

「まあ、待て。悪いようにはせん。部屋の中で話そう」

睨み付ける満尋を軽くいなして、男はそのまま部屋の中に入ってしまった。後ろを付いてきた別の男が、微笑を浮かべて中へ入るよう促したので、満尋はしかたなく二人に従った。さらに男は布団に入

るよう勧め、満尋もまだ体がだるかったので大人しくまた布団に戻った。

「話の前に俺の眼鏡を返せ」

かなりのド近眼なので無いと不便だ。枕元には置かれていなかったから、彼らが持っているのだろう。

「めがね？　なんだそれは」

「……レンズ、じゃない。透明な、とにかく俺が顔に掛けていたものだ」

なるべく外来語を使わないようにしたら、うまく説明できなかった。身振り手振りで伝えたら、

「ああ、あの変わった玻璃細工か」

と思い当たったのか、懷から丁寧に布で包まれたものを取り出した。玻璃が何なのか分からないが、それを受け取り布を開くと、見慣れた細い緑のフレームの眼鏡が出てきた。すぐにそれを掛けるとぼやけた輪郭がはっきりし、自分を捕まえた精悍な顔の男と、見知らぬ狐目の男が目の前に現れた。

「そのへめがね」という精巧な細工をどこで手に入れたのか。いろいろ聞きたいことはあるが、先にお前の名を聞いておこう」

二人の男は布団の横に腰を下ろした。狐目の方は喋らないのか、話せないのか、話はもう一人に任せてにこにこしている。

「人に名前を聞くときは、まず自分から。じゃないのか？」

悠然と構える男たちの態度が気に食わなくて、素直に答えることはしなかった。向こうに話の主導権を握られたくない、というものもある。

あばら家で会った男は、くつと口の端をあげて笑った。

「威勢がいいのは悪くない」

ヒタリ、冷たい何か満尋の首筋に当たる。

「だが、時には従順になることも必要だ」

殺気とでもいうのだろうか。男からびりびりとした鋭利な空気が発せられた。男の横に置かれていた太刀が、いつの間にか抜かれ満

尋に当てられている。項の毛がぞわりと逆立って、冷たい汗が流れた。息を呑むこともできずに固まっていると、刃は満尋のどこを傷つけることなく鞘に収められた。

「お前の名は何だ」

再び尋ねられた問いに、苦さを噛み締めながら自分の名を答えた。空き家であった男は、満尋の様子を見て満足そうにすると、自分は鴻池宇木衛門こうち うえきもんだと名乗った。狐目の男は佐久間六郎というらしい。

「ここはあの町から一里ほど離れたところだ。俺たちは？衆のすりで、俺がその頭だ。ここはその拠点だな。お前を連れてきたのも、仲間になってもらおうと思つてのことだ」

一里。満尋は以前読んだ歴史小説を思い出した。細かい数字は忘れたが、だいたい四キロメートルくらいだった気がする。それが、遠いのか近いのかはいまいち分からないが。それに？衆のすりというのも初めて聞く言葉だ。仲間にしたいと言っているが、一体どんな集団なのだろう。

「まあ、今日はそこら辺にすんべ。あんましうるせーと傷に障っかんな。また明日だべりゃえーべ」

ここで初めて狐目の男、佐久間六郎が口を開いた。優男風の見た目とどこかの訛りが少しミスマッチだった。

傷と言われて改めて自分の体を見ると、ところどころに包帯が巻かれていた。それを知覚すると、今まで忘れていた痛みがぶり返してくる。

「てーした傷はねっけど、化膿してっからな。おめー、てけとーに放つてたろ。明日また薬塗ってやっから、今日はもう寝とけ」

六郎は立ち上がると、宇木衛門とともに部屋を出た。宇木衛門はまだ話したそうだったが、六郎が有無を言わさず連れ出したので「明朝にまた来る」と言つて、部屋を後にした。

遠ざかる足音を聞きながら、このまま逃げ出してしまおうかという考えが頭をよぎったが、久しぶりの柔らかな布団の感触に、自分の意思に反してまた夢の中へと落ちていった。

朔の日の終わり 3

翌朝、宣言どおりに宇木衛門と六郎が朝餉を持ってやってきた。

この時代にやってきて初めて食べるまともな飯である。人に刀を当てるようなやつから食事を貰うものか、と思っていたが、美味そうな匂いに腹の虫が我慢できなかった。膳に乗せられた玄米、貝の味噌汁、煮魚を残さず胃に納めると、なんとも言えない幸福感に満たされた。

食事が終わり膳を下げた後は、六郎から傷の手当てを受けた。古い包帯を取り、新しいものに六郎は持ってきた木箱に入っていた薬を塗って、腕や腹、足などに手馴れた様子で巻きつけた。その薬がまたとても臭くて、宇木衛門も顔をしかめて部屋戸を全開にした。その後、着替えなどの身支度を終えて三人は昨日の続きに入った。二人は、満尋が袴の着方を知らないことに驚いていたが、気さくな六郎が着付けを手伝ってくれた。

「では、？衆の話からか」

部屋に三人座り込んで、宇木衛門が話し出した。

？衆というのは、宇木衛門が集めた自衛集団のことらしい。十代から二十代の若者が中心で、町や村の依頼で見回りや街道に出る賊退治などを請け負っているのだそうだ。その背景には、最近春日部の当主に就いた幸望まつりしとが関係しているらしい。

「あの人は政にはとんと向かない人だからな。おまけに、家臣の多くは戦で領を広げようと謀計をめぐらしている奴らばかりだ」

宇木衛門は新しい領主が領民を守ることに期待はしていない。そればかりか、逆に危険視しているようだった。

「町の人間も同じ考えだ。？衆が強くなれば、俺たちを材料に交渉もできる。俺たちで惣をつくるんだ」

宇木衛門はぐっと拳を握った。そこには、彼の強い決意があるのだろう。「惣」というのは確か、室町時代にできた自治権を持つ

共同体のことだったはずだ。教科書に良く出てきた「惣村」は、村の防衛や年貢の徴収を自分たちで行っていたそうだが、？衆はその自衛を請け負う集団になろうということだ。満尋は話を聞いて窃笑した。「惣」が出てきたということは、今は室町時代ということだ。今まで人と関わらなかつたためにこの世界の情報を得ることができなかつたが、彼らからはいろいろと聞き出せそうだ。

「俺からも一ついいか。今は足利の誰が將軍をしているんだ？」

年号で答えられても分からないので、將軍の名前を聞いてみた。

これなら、おおよその見当はつく。しかし、返ってきた言葉は意外なものだった。

「足利？ 兼定かねさだというものがいたと思うが、あの家は將軍職についてたことはないぞ？」

「おれも聞いたことねえべ。そもそも、將軍なんてーした力はねつからな。今は大名があつちこつちに領国をつくってんべ」

大名が領地を支配しているということは、もう戦国時代に入ったということだろうか。室町幕府の足利家を知らないのは気になるところだが。

「じゃあ、尾張の織田信長は？」

「知らん」

その後も、武田、上杉、今川と名だたる戦国武将たちをあげていったが、誰一人知っていると答えたものはいなかった。さらに、その時に一緒に挙げた尾張や、甲斐といった地名にも聞き覚えはないという。これには満尋もお手上げだった。ここは、過去の日本ではないのだろうか。

「ここは、別幕わくれの国だ。お前くらいの歳なら聞いたことはあるはずだが」

満尋は旧日本の地名もほとんど覚えていない。しかし、別幕なんて国は聞いたことが無い。

「ちなみに別幕は、三静みしず、帖許はけもと、挟河さかわの三国に囲まれている。これも聞いたことが無いか」

「……ない」

どれも初めて聞く国名だ。これは、過去の日本ではないことが確定しそうだ。では、自分は一体どこに来てしまったのだろう。

「おめー、家族はいねーのか？」

「いない。この世界のどこにも」

膝の上に置いた拳を白くなるほど硬く握り締めた。日本史は得意だから、これからはそれでうまく立ち回れると思っていた。しかし、それはできない。

「俺は、？衆の頭としてお前を正式に仲間に入れるつもりで連れてきた。先ほども言ったが、俺は？衆を強くしたい。だが、？衆はまだ駆け出しだ。もっと人が要る」

すっかり威勢を無くした満尋を、宇木衛門は真っ直ぐ真剣な眼差しで見つめた。昨日出会ってから、彼の視線と声は少しも揺らぐことがない。

「俺は、どこの誰かも分からない、盗みを働くようなヤツですよ」

「知っているさ。異国の輸入品よりも珍しいものを身につけて、当たり前常識を知らないひどい世間知らずだ。それに、お前は盗みを働いたことを悔いているようだが、あの程度の盗みならどこでも日常茶飯事だ。皆それぞれ事情を抱えているからな。このご時世どうしても、まともに生きていけない人間は山ほどいる」

彼は何か思い出すものがあるのか、目を瞑り一瞬沈黙した。六郎も静かに彼の言葉を聴いている。

「それでも、根の腐っていない奴ならば信じようと思う。お前は誰より手はかかるが使えるさうだ。まあ、この辺は俺の勘だがな」

そう言って宇木衛門は笑った。それは、自信に溢れた気持ちのいいものだった。

「カリスマってあんたみたいなやつのことだろうな」

きつと意味は分からないだろうが、それでも口に出していた。今まで、ずっと細い綱の上を渡っていたようなものだったが、今ようやく地に足が着いた気がする。

満尋は、今まで楽にしていた胡坐を正座に正し、宇木衛門の方を向いた。そのまま手を突いて床に頭を擦りつけ、

「よろしく願います」

と、一言だけ口にした。

上弦に問う 1

？衆のすりに加わってから五日ばかりが過ぎた。あれから満尋は何度か体調を崩したが、今はほとんど回復し、新しい生活に少しずつ慣らしているところである。

太陽が昇る頃にはすでに身支度を整え、井戸へ向かう。

満尋は六畳一間の部屋に移り、そこで二人の若者と同室になった。一人あたりの空間がかなり狭くなるが仕方が無い。二人とも満尋と同じ新入りで、初めは気まずいものだったが、二日、三日と経つうちにだんだんと打ち解けることができた。

井戸に行くと先に部屋を出ていた同室の二人が顔を洗っていた。軽く挨拶を交わして釣瓶を落とす。井戸で水を汲むというのは中々大変で、一日使っただけで手の皮がずる剥けてしまった。それを見て、同室の二人には貴族の女みたいだと笑われたが。

「おはようさん、満尋。今日は庭の掃き掃除だってよ。かったるいよなー」

顔を洗い終わっても、まだ大あくびをしているのは同室の一人、勘吉だ。

「しょうがないですよ。当番なんですから。あたしだって本当は嫌なんですよ」

そう返すのは十壺といち。彼も同室だ。勘吉はあっちこっち跳ねた髪を手櫛で適当に一括りにし、ぱんつと頬を叩いた。反対に十壺は丁寧に髪を梳いている。腰ほどまである黒髪は、梳くだけでも大変そう
だ。

「毎朝ご苦労だな」

「まあ、あたしの家は男も女も髪を大事にしましたからねえ。あなたも伸ばしたらどうです？」

満尋は男が髪をだらだら伸ばすのに違和感があったが、ここでは短い方が少ない。どんなに短くても紐で結べるほどには長いのだ。

十壺はたいして苦とは思っていないようだが、満尋には面倒に思えて仕方が無い。

「いつも思うけど、そうしてつとまんま女みてえだな」

勘吉が呆れたように言った。十壺は体の線も細くてどこか中性的だ。さらに、柔らかな物腰がそれを助長させている。対して勘吉は身体を動かすのが大好きで、この三人の中では一番体格がしっかりしている。見た目通りの性格は良くも悪くもおおらかで、たいていのことはごり押しで通そうとするのは、この数日間でも良く身に沁みだ。これで自分より歳が一個上なのだから驚きだ。

「さあさ、朝餉の時間に間に合いませんよ。今日の朝餉当番には京太郎さんがいますからね。遅れたら抜かれてしまいます」

身支度を終えた十壺が、満尋と勘吉の背を押して歩き出す。十壺は満尋の一つ年下なのだが、この中で一番しっかりしている。勘吉が、そりゃ大変だといち早く駆け出して食堂へ向かった。

この？衆が拠点としている所は、もともとは寺だったそうではほとんど縁を歩いて移動する。まだ夏の終わりだからかまわないが、これから秋が来て冬になれば外を歩くのが厳しそうだと、建物を見ながら思った。しかし、建物自体は立派なものだ。屋根を支える垂木の並びに、格子窓のついた板壁、敷地を囲む塀は白漆喰が美しい。煌びやかではないが、質素な佇まいを満尋はほんの少し気に入っていた。宇木衛門は古くなった寺を改装したから大した事ないというが、文化遺産に住んでいるような気分だ。

「おおーい、こっちこっち。おめーらおっそい。どんだけ待たせんだよ」

食堂に行くほとんどの衆徒が集まっており、その中で満尋たちに気付いた隣室の二之助が大きく腕を振っていた。二之助は？衆の中では一番年下で、今年で十三になるのだそうだ。二十歳前後が多い？衆の中でも物怖じすることなく振舞い、みんなからは弟として可愛がられているようだ。満尋とは部屋が隣同士ということもあり、

勘吉、十壺と四人で一緒にいることが多い。

奥の厨からお盆を受け取り、食事当番の者からご飯とおかず、汁物をそれぞれ受け取る。二之助が空けてくれた場所に腰を下ろして、食事を始めた。テーブルも椅子もないので皆思い思いの場所に座り、床の上に直接盆を置いて食べる。日本の食事の作法では碗を持って食べるのが許されているが、確かにこれは手に持たないと具合が悪い。テーブルに慣れた身としては、少し不便に感じてしまうが。

「満尋たちは今日何するんだ？」

かつかつと飯を忙しそうに掻き込む合間に二之助が問う。お行儀が悪いと十壺に注意されると、食べる方に集中した。？衆では基本的に部屋ごとで仕事や訓練を行うので、日中は隣室の二之助と別行動になるのだ。

「今日は庭掃除をして……、その後は馬術を教えてもらう」

「ん？ お前馬乗れねえのか？」

山盛りの玄米を食べていた勘吉が満尋を見た。その驚きの視線を受け、満尋は勘吉を少し睨み付けた。馬なんて乗ったことも無ければ、近くで見たことも無いのだ。

「あたしも乗れませんよ。そもそも、あたしらの身分で馬を操れるあなたが特別なんです」

十壺の言葉に二之助も箸を持ったまましきりに頷いている。どうやら、馬に乗れないのは二人も一緒らしい。何故勘吉が馬に乗れるのかと聞いたら、村に馬借を営んでいた家があったのだと言った。馬借は現代でいう運送業のような仕事だ。

「ガキの頃よく乗せてもらってたからな。俺が教えてやろうか？」

懐かしそうに笑う勘吉を、満尋は少し複雑な気持ちでみていた。？衆は自分のように宇木衛門に拾われた人間がほとんどだ。きつと明るく笑う彼にも、村に居られなくなってしまった事情があるのだろう。だからだろう。この人間は皆、人との距離の取り方が絶妙だ。触れられたくないことには踏み込んでこないが、だからといって他人に無関心でもない。満尋が上手くここに馴染めたのも、そう

いう人間ばかりだからだ。

「止めといた方がいいって。勘にいが教えたら、絶対習うより慣れるで散々な目に遭うに決まってるさ」

「あたしも同感です。基本は大事ですからね。別の方をお願いします」

なんだとお前ら！ と立ち上がる勘吉に、うるせえと別の場所から野次が飛ぶ。勘吉はしぶしぶまた座ったが、完全に拗ねてしまった。黙々と飯を口に運んでいる。その様子を十壺と顔を見合わせて苦笑すると、満尋は静かに食事を再開させた。

上弦に問う 2

敷地内の一角にある厩では、十数頭の様々な毛色の馬が飼育されている。小屋から首を出している馬はどれも人の背丈ほどしかなくて、思い描いていたものよりも随分と小さかった。勘吉は馬に慣れているだけあって、一頭一頭馬の鼻面を慈しむように撫でていた。十壺は邪魔にならないよう、長い髪の毛をくるくるとまとめている。

馬術の訓練といっても専門の人間がついて教えるわけではない。世話をしているものはいるが、馬に乗れる者が、乗れない者に指導をしているようだ。

今日満尋たちに指導をしてくれるのは、初日に会った六郎だ。

「おー、おめーら待ってたべ。おれが教えっからなー」

いつもの方言で迎えてくれた六郎は、にこにこしながら満尋たちを待っていた。頭の宇木衛門と一緒にいただけあって、彼もなかなか忙しいらしい。六郎とはあれ以来会っていないので五日振りに顔を合わせる。見知った人間に安堵した満尋とは反対に、勘吉と十壺は身体を固くさせた。

「勘吉は随分と達者みてーだかな、おれが教えんでもいーべ。きいいたのみつけて、飛ばしていーだーよ」

「はあ、では失礼します」

一緒にいて数日経つが、初めて聞く勘吉の敬語はかなり違和感がある。ぎこちなく身体を動かして、勘吉はすぐに馬を選びにかかった。その様子を不審に思いつつ、乗馬初心者 of 満尋と十壺は軽く六郎から説明を受け、自分達も馬を選びにかかった。

満尋が選んだのは灰色をした葦毛の馬で、十壺は黄色っぽい河原毛を選んだ。勘吉はこげ茶の黒鹿毛を選んだようだ。どの馬も大人しく、優しそうな目をしている。しばらく馬と戯れた後、六郎から馬の背に乗る指導を受けた。

鞍をつけていない裸馬なので、乗るときは飛び乗るといった感じだ。ポニーほどの大きなのでなんとか跨ることができたが、サラブレッドのような大型馬では無理だったかもしれない。とりあえず、乗り降りだけを何回か練習していたところで、衆徒が一人六郎に走りよってきて何事かを伝えた。どうやら、緊急の用で六郎はそちらに行かなくてはならないらしい。

「すまんねーけど、ちいっと行ってくんべ。外出て左ん方行ったら、丁度いいところかな」

六郎は慌しく厩を出て行くと、残されたのは呆けた表情の三人だけだ。いち早く立ち直ったのは勘吉で、黒鹿毛を引きながら喜色満面の笑みを浮かべると、

「お？　これは俺の出番か？」

と言った。嫌な予感しかない。隣の十壱も顔を引きつらせている。勘吉はひらり、と馬に跨ると、満尋たちにもさっそく乗るように指示した。

「じゃあ、さっそく行くか！　走らせっぞ、ちゃんとして来いよ」

「ちょ、ちよっと待て！」

「あ、あたし達はまだ騎乗しか習っていないんですよ。先生でしよ。ちゃんと教えて下さい」

ともすれば今にも走り出しそうな勘吉を何とか止めて、馬の扱いを請うてみた。馬の背に跨り、まずは歩かせ方からと十壱が言うと、

「大丈夫、大丈夫。馬は賢いからな。歩けーって思えば歩くし、止まれーって思えば止まるって」

などと言い出した。そんなわけあるか？と突っ込みたかったが、馬を驚かせるようなことはしてはいけない、と六郎に言われていたので黙らざるを得ない。勘吉はそのままポカポカと門へ向かって移動を始めたので、追いかかねばと慌てると、驚いたことに満尋の葦毛もそれに倣って歩き始めた。

「あの人の言った通りでしたけど……。複雑です」

「……ああ」

門の外に出ると、左の方と言われたのでそちらへ向かうことにした。馬は手綱を行きたい方向に軽く引つ張るだけで、ちゃんとそちらへ曲がってくれる。満尋は揺れる馬の背から落ちないことだけに気をつけて、馬を歩かせていた。

六郎が教えてくれた道は、かなり険しい山道だったが馬はでこぼこの道も、急な斜面もなんなく登っていく。15分ほど登っていくと、道が開けてなだらかな平原に出た。

「おおー、ここなら走らせても大丈夫そうだな」

勘吉の言うとおりで、そこでは何人かの衆徒たちが気持ちよさそうに馬を走らせていた。元気の有り余っている勘吉はともかく、満尋も十壺も慣れない乗馬であちこちが痛い。とくに尻が。うずうずしている勘吉に、「休憩してるから、好きに走って来い」と言うと、勢い良く飛び出していった。

馬から降りて、十壺と適当な木陰に並んで座る。馬はすぐ側で草を食んでいる。さらさらと涼しい風が汗ばんだ顔に当たって気持ちよい。天気も良いし、このまま寝転んだら最高だろうと思っていると、十壺がそういえば、と話しかけてきた。

「満尋は六郎殿と知り合いなのですか？ 随分と親しそうでしたが」「ん？ ああ、ここに来たときにいろいろと良くしてもらった。怪我の手当でもしてくれたし、それがどうかしたか？」

十壺は少し苦笑して、

「いえ、ただ六郎殿は？ 衆の補佐役ですからねえ。少し珍しくて。それにいろいろとお噂のあるお人ですし」

と言った。なるほど、確かに頭やその補佐についている人間と馴れ馴れしく話せるものはそういないだろう。それにしても、噂とは何だろうか。

「おや、知らないんですか？ なんでも仕えていた主を切り捨てたとか何とか。まあ、あたしも聞いた話ですけど有名ですよ」

この世界のことはまだ良く分からないが、主を切り捨てる、とは大変なことではないだろうか。あのいつもにこにことした明るい六

郎に、そんな噂があるとは驚いた。

「あの言葉訛りは、東の方にある反馬たんまの訛りでしよう。七、八年前に領主が若い家臣に殺されていますが、まさか、ねえ」

六郎の歳を聞いたことはないが、見た感じだと二十五、六くらいだろう。噂が真実味を帯びてきたが、本当に殺していたらその家臣の命はすぐに奪われているはずだ。

「六郎の歳と出身国を結びつけて、誰かが適当に流したんじゃないか？」

「ですよねえ」

勘吉がものすごいスピードで衆徒五人抜きをしているのを見ながら、そう言うしかなかった。

上弦に問う 3

いつまで座ってんだとやってきた勘吉により、再び馬の背に跨ることとなった満尋は、流されるまま勘吉主催の乗馬レースに参加することになった。

「だから、俺今日が初めてなんだって、聞いてるか？」

うんざりしている満尋を他所に、着々と準備は進んでいる。男ばかりで競争といえば燃えるもの。他の衆徒たちも巻き込んで、総勢十四人によるレースが始まろうとしていた。

「では、ここを一周して山道を一回りし、一番先にここへ戻ってきたものが勝ちです。山道は三又のところを左に折れれば一本道ですから、間違えないようにー」

十壺は真っ先に審判役を買って出て、このレースから離脱した。なんとも要領のいい奴だ。スタート地点に馬を並べて、合図がなるのを待つ。馬たちもなんとなく乗り手の意気込みが伝わっているのか、しきりに鼻を鳴らしたり、足踏みをしている。

「では、よーい……」

ぴー、と十壺の指笛が高らかに鳴る。「はっ」と言うと同時に、どどどと土煙をあげて一斉に馬が走り出す。満尋も遅れまいと手綱を握り締めた。

結局満尋は下から数えた方が早い順位に終わった。まあ、初めてだし完走したことに意義がある、とマラソンのようなことを思う。一位は当然ながら勘吉だった。子どもの頃から乗り回していたというのは伊達でなく、二位とは圧倒的に差をつけてのゴールだったと十壺が言っていた。

そして驚くことに、このレースは頭の宇木衛門にまで伝わっていた。夕餉の席で、

「お前たち、今日は随分と面白いことをしていたようだな。今度は

俺も混ぜろ」

と、口元を緩めて言われたときは、皆で固まった。

風呂に入った後はもうすることがない。明かりを灯す油は貴重なため、暗くなればさっさと寝てしまうのが、この世界の常識だ。部屋の前縁に腰掛けて、ぼーと月を見ながら火照った身体を冷やしている、勘吉が隣に座り込んできた。

「いやー、今日は楽しかったな。競馬なんて久しぶりだ」
くらべうま

「あんた、あつという間に見えなくなったな。昔から一番だったのか？」

馬の出来が一頭だけ違うのではないかと思うほど速かった。そう言くと勘吉は、豪快に笑った。

「んなわけないだろー。俺はいつも二番だったさ。幼馴染に滅法速いのがいてな。そいつには結局勝てず仕舞いさ」

今なら負ける気はしないんだけどなー、と言う勘吉はやはり何か事情があるのかもしれない。今でなくとも、いつか聞けるだろうか。「そういうお前は、どんなこととしていたんだ？」

子どもの頃を聞いているのだろう。すぐに思いつくのがテレビゲームなのだが、上手く説明できないし、それだと少し寂しい。

「学校で野球……とか？」

口に出して、あつと思う。学校も野球も分からないに決まっている。首を捻っている勘吉に慌てて、学校は同じ歳の子どもが勉強したり遊んだりするところ。野球は棒と小さな鞠を使って遊ぶものだと伝えた。

「ふーん、羽子板みたいなもんか。じゃあ、今度そのやきゅうやろう」

「……遊んでる暇なんてないだろ」

明日はまた別の当番もあるし、剣術、槍術、後々は鉄砲も使えなくてはならないらしい。そして、その合間合間に簡単な仕事も貰うそうだから、遊んでいる時間なんてほとんどないのだ。それでも勘吉は諦めきれないのか、できる、できないと問答を交わしていると、

すつと戸が開いて十壺が顔を出した。

「二人とも煩いですよ。明日も早いんですから、もう寝てください」
それだけ言ってまた静かに戸が閉まる。

「お前は俺の母ちゃんか」

そう勘吉が呟いたが否定はできない。満尋も同じことを思った。
すると中から「外で寝たいのですね。どうぞどうぞ」という声が聞
こえたので、慌てて部屋に入り頭を下げた。まだ夏の終わりとはい
え夜は冷える。締め出されてはたまらない。

自分の布団を広げて横になると、久しぶりに現代のことを思い出
した。家族はどうしているだろう。学校は。友達は心配してくれて
いるのだろうか。いくら考えても答えは出てこない。こちらから向
こうの様子など知る術はないのだ。いつか勘吉のように、現代のこ
とを懐かしいと思いながら語る日がくるのだろうか。そうならなけ
れば良い。湯冷めしたのか、布団の中でぶるりと体が震えた。

十五夜逢瀬 1

連日続く厳しい鍛錬に、満尋を含めた新米？衆はくたくただった。新入りの初仕事が近づいてきた為に、鍛錬のレベルが一気に上がったのだ。さらに、最近は読み書き算盤など勉強の方も加わって、身体だけでなく頭も酷使している。同じ言葉を話しているとはいえ、書き方には大分現代と違いがあるのは分かっていたから、一人遅れてしまうことが不安だった。しかし、筆を持ったことの無い者は以外にも多く、満尋一人が悪目立ちすることはなかった。基本的に農家出身の者はその生活からか、読み書きが苦手という者が多かった。

現代で受験生だった満尋には、勉強をするということ自体はあまり苦ではない。何に使うのか分からない三角比や虚数の計算に比べれば、くずれた草書体や旧漢字、算盤の使い方を覚えるなんてよっぽど有意義で容易いことである。十壱も商家出身だというので、この辺りは得意らしい。よく部屋で満尋の復習と一緒に付き合ってくれる。問題は勘吉と二之助だ。二之助は単純に勉強が嫌いなだけでちゃんと教えればできるのだが、勘吉に至っては問題外である。とことん相性が悪いらしく、机に向かえばすぐに夢の世界へ旅立ってしまう。勉強を教えているのは？衆でも上の方にいる京太郎という男なのだが、何度彼の雷が落ちたことか。？衆では時間に厳しいことで有名な彼は、豊富な知識を見込まれて新米の教育も任されている。理性的な人間なのでそうそう感情に走ることはないのだが、勘吉が生徒だと違うらしい。毎夕彼の特別スパルタ補習を受け夕餉の席に現れた勘吉は、稀に見るやつれ具合だった。

「俺もうダメかも。頭の中で算盤の珠を弾く音がする。京太郎さんこえーよ」

大の男がぐすぐすと飯を運ぶ姿は、なんとも鬱陶しいものである。当然それに対する皆の反応も冷ややかなものだ。

「すぐに寝てしまうあなたが悪いんですよ？　むしろ、ご自分の時

間を削ってまであなたに教えている京太郎さんに感謝なさい」

「そーそー、おれだってちゃんとして聞いてりゃ分かるのに。脳みそ筋肉なんじゃないの？」

「算盤も結構、新鮮で面白いぞ」

3対1。当然軍配が上がるのは満尋たちだ。ぐぬぬぬ、と憤りを飲み込んだ後、勘吉はすばやい動作で二之助の魚をかつぱらった。

「あ！　おい！！」

「脳みそ筋肉だからなー。人より腹が減るんだよ」

奪ったししゃもを頭から豪快にぱりぱりと食う。大人気ないぞ、という満尋の言葉にも耳をかさず、そのまま二之助とじゃれあって騒がしい夕食が終わった。

今日は満月ということで、満尋は夜着のままお座り岩に腰掛けて書を開いていた。本は京太郎に一番簡単な書物を、と言って借りたものだ。武士の子どもが読み書きに使う手習い本らしいが、なかなか面白い。もともと歴史小説や昔を舞台にした大河ドラマが好きだったから、こういうものと触れ合えるのは心が躍る。ちなみにお座り岩というのは、井戸の傍に植えられた芙蓉の木の下にある岩のことだ。座るのに手頃な事から皆にお座り岩と呼ばれている。

空には煌々と輝く満月が浮かんでおり、その光は日が落ちれば真っ暗になるこの世界の貴重な光源となっている。その明るさたるや、本が読めるほどであるから驚きだ。月明かりの下で本を読もうなどと、夜も騒がしい満尋の世界では考えもしなかったことだ。

半分ほど読んだところで満尋は本を閉じた。こんなことをしていると、自分にも随分余裕が出てきたように思えて一人自嘲する。今はただ、半月前までのぼろぼろな日常で手に入れた感覚と身体能力を只管磨き続けている毎日だ。体育や部活動とは違う厳しい鍛錬と学校では決して習わない知識と教養、そして賑やかな仲間に囲まれてあつという間に日々が過ぎていく。本当に自分が高校生なのを忘れそうだ。この世界に來たのはほんの一ヶ月前のことなのに。

満尋は感傷的になりつつある思考を止めるために軽く首を振ると、お座り岩に本を預けて井戸へ向かった。水でも飲んで頭を冷やさない、このままでは眠れそうに無い。

井戸の中になるべく静かに桶を落として引き上げる。この作業も随分と楽になった。井桁の部分に桶を置いて、直接手で掬って水を飲む。ひんやりとした水が喉を潤し、少し気分も晴れやかになる。もう一口、と桶を見たところで満尋は信じられないものを見た。

桶の中から女の子がこちらをじっと見ている。なんのホラーだろうか。水面に影が映りこむように、女の子の顔が水面に揺らめいているのだ。それも随分はつきりと。靈感なんてないから幽霊なんて生まれてこの方初めて見る。じっと目をそらせないまま見ていると、あまりその幽霊が幽霊らしくないことに気が付いた。好奇心旺盛な瞳は生気に満ち溢れてとても死者とは思えないし、顔だって健康的なものだ。緩く一つにまとめた長い髪の毛を前に垂らして、前髪には年頃の娘らしくピンクのヘアピンでおしゃれをしている。

(は？ ヘアピン？)

それはこの世界ではありえないものだ。夢でも見ている気がしてその鮮やかなピンクから目を離せないでいると、水面の少女は満尋の視線に気付いたのか誘導されるように自分の前髪へ手を持っていた、ああこれか、という表情をした。

視線を満尋に戻した彼女の顔が、瞬間切なそうに歪められる。

自分は今、一体どんな顔をしているのだろう。笑っているのか、泣いているのか、はたまた怒っているのか。彼女の表情からでは分からない。

少女がすっとこちらに手を伸ばすと、ひとりでに桶の水が揺れて彼女は消えてしまった。もう少しだけ見ていたかったと思うのは、さっきまで現代のことを想っていたからだろうか。

十五夜逢瀬 2

翌朝、眠い目をこすりつつ顔を洗いに井戸へ向かうと、手にした桶に昨夜のことを思い出した。手に持ったまま桶をじいとしていると、勘吉たちが不思議そうに満尋を観察する。

「満尋？ 水汲まないんですか？」

「ああ」

尚も生返事で桶を見続ける満尋に、痺れを切らしたのか勘吉が桶を奪い取り井戸に放り込んだ。ばしゃん、と派手な音を立てて桶は勘吉の手により引き上げられていく。

「どうしたんだ？ なんか悪い夢でもみたのか？」

二之助が心配そうに顔を覗きこむ。悪い夢。そうかもしれない。自分は知らないうちに眠っていて、その上現代のことを考えていたからあんな夢をみたのだ。

「話してみろよ。変な夢なんてこの二之助様が笑い飛ばしてやるぜ！ ほーら！」

二之助が準備万端とばかりに胸を張る。確かに、このまま思い悩んでもしょうがないし、一度彼らに笑い飛ばしてもらってすっきりした方がいいだろう。

「……女の子が出た」

間。

どぼんっ、と先ほどよりも重たい音が井戸の中に響く。

せっかく引き上げた桶を再び井戸の底へと落とした張本人は、にやにや笑いながら満尋の背中をばんばんと力任せに叩いた。

「なーんだよ！ そういう夢？ で、やったか？」

「……？ ——違う！」

「まあ、男ばかりですから不満が溜まるのも分かりますよ？ 恥ずかしがらずとも……」

「だから違う！！」

「それは笑い飛ばせねーな。どんな子？ 可愛かった？」

「まあ、普通に可愛いんじゃないか？ ってだから違うんだ！！！」
息を荒げて叫ぶ満尋に三人はわははと大笑いした。何故朝からこんなに血圧が上がる思いをしなくてはならないのか。口にするんじゃないかと後悔していると、十壺が申し訳なさそうに宥めてきた。「すみません。珍しいから、つい遊んでしまいました。本当はもっと真剣な話なのでしょう？」

そういうと勘吉や二之助もぴたっと笑うのを止め、「悪い悪い、つい」と謝ってきた。その一体感はどこで手に入れてきたのか。人をつい、で遊ばないでほしい。満尋はがしがしと頭を掻く勘吉を恨めしげに見つめると、夢かもしれないけど、と前置きをして昨夜の話をしてみせた。

「うーん、それは幽霊でも夢でもなく『影映り』ですねえ。望月の夜はよくあることです」

話を聞いた面々は特に驚く様子も無く、さも日常的なことのように言った。雨が降ったら雷も鳴る、みたいな感覚なのだろうか。

「いーよなー、俺なんて『影映り』で可愛い子が出たことなんて一度も無いぜ？」

二之助が心底羨ましそうに言った。そもそも『影映り』とはなんなのか。満尋には怪奇現象にしか思えないのだが、怖いものではないような素振りだ。勘吉や十壺も経験があるようだし、一体何なのだろう。

「その『影映り』って何なんだ？」

考え込んでいた満尋を他所に、俺はこんなものを見たことがある、だの各々口になっている三人に聞くと皆目を見開いて驚きを隠せないようだった。

「おいおい、本当か？ どんだけお前は世間知らずなんだよ。どんな偏狭の地から出てきたらそんなことが言えんだ」

勘吉は満尋に呆れた視線を送り、二之助は「信じらんねえ」と呟いた。十壺ですらその形のいい口をぽかんと開けている。微妙な空

気に居心地が悪くなつてくると、満尋は視線を彷徨わせて上手い誤魔化し方を考えていた。

「えーと、『影映り』というのは、まあ水面に幻が映ることです。あたしらはその幻の国を『月夜里』やましたと呼んでいます」

十壺は戸惑いながらも簡単に説明してくれた。

「望月の日はとくにその『影映り』が良く起きるので、月見よりもこちらを楽しむ方々が多いんですよ」

「ま、大体は『月夜里』の景色だけで終わるけどな。人が映ることなんて滅多にない」

勘吉がつまらなそうにそれに続けた。それで女の子が映ったと言ったら騒いでいたのか。ビギナーズラックではないが、図らずもレアな体験をしてしまったらしい。

「『影映り』ってそれだけじゃないぜ」

井戸に寄りかかって言う二之助の言葉に十壺が頷いた。

「移ろうと書いて『影移り』と言う場合もあります。いろんなものが無くなったり、反対に現れたりするんです。無くなった物はきつと『月夜里』にあるんでしょうねえ」

あたしの氣に入りの櫛も一つ無くなってしまったんですよ、と十壺は溜息をついた。切なそうなその横顔から察するに、本当に大事だったのだろう。

すると、いくつもの足音が近づいてきて後からぞくぞくと衆徒たちが出てきた。

「おっと、せっかく混む前に来たのにこれじゃあ意味ねえな。お前ら急ぐぞ」

それを見て勘吉が破顔した。この勘吉のくしゃつとした笑い顔を見ると、いつも難しいことはどうでも良くなってくる。それは満尋だけではないようで、「いけねえ、いけねえ」と四人慌てて顔を洗った。やってくる顔見知りの衆徒たちに朝の挨拶を交わして、朝餉を食べに食堂へ急いだ。

寄る居待月 1

右肩に激しい痛みがはしって、満尋は思わず膝をついた。腕にびりびりと伝わる衝撃が、持っていた木刀を下へと落とす。

「どうした？ もう終わりか」

目の前で余裕な笑みを浮かべているのは宇木衛門だ。彼はほとんど、と軽く地面をつま先で叩いて、かかって来いと満尋を挑発する。ぐっと歯を食いしばって、まだ震えの残る手で木刀を握ると、満尋はわあっと宇木衛門に向かっていった。

そもそもの事の始まりは本堂での剣術の稽古中であった。新入りは全員参加。早くから？ 衆に入っている先輩が一人監修について、それは行われた。満尋は同じ新入り仲間の与市と八弥丸と組んで、一対二の形式で手合わせをする。与市は満尋とおそらく同年代の、鉄砲が得意な若者だ。滅多に人と話さない変わり者であるらしいが、その見事な鉄砲の腕前は逆に皆を黙らせるほどである。もう一人の男八弥丸は与市と同室の男で、二十二歳と新入りの中では一番年嵩だ。質朴な男とは正に彼のこと、真っ直ぐなその性格は得意な剣術にも表れている。そんな二人と木刀での模擬試合をしていると、先輩全員を連れた宇木衛門がやってきたのだ。

「全員いるな。急だがお前たちの初仕事が二日後に早まった。その為、今日明日ぐらいいは俺たちが一人ずつ付いて、一対一の指導を行う。お前たちにはまだ死んでほしくないからな」

そう言う、新入りのうち数名に新たな木刀が配られた。満尋にも渡されたそれは手に持つとずしりとくる。今までの物よりもはるかに重い。

「これは……？」

「真剣とほぼ同じ重さに詭えてある。初めて剣術を扱う奴は、それを肌身離さず持ち歩け。もちろん真剣を持ったことのある奴は、そ

れを使う必要はない」

つまり、いよいよ実践を強く意識した稽古に移るということか。満尋は渡された木刀を強く握る。本堂の中は静まり返っていた。隣の方でぐくりと、唾を飲み込む音が聞こえる。新入りの三分の二くらいが緊張した面持ちで、宇木衛門の言葉を聞いていた。残りは普段通りか、楽しそうな顔をしているか。その違いは真剣、もしくはそれ以外の武器で人と対峙したことがあるかどうかだろう。前の方にいる与市はあまり興味の無さそうな、ぼーとした表情をしているし、八弥丸は使命感に燃えてはいるものの、特に緊張しているという感じはしない。きつと二人は三分の一の人間なのだ。

「では、それぞれ誰がつくかは籤で決める」

そうして籤引きの結果、満尋には？衆の頭 宇木衛門がつくことになったのだ。

それからは指導者に付いて各々解散した。満尋だけは宇木衛門が動かないので、そのまま本堂に残っていたが。

「俺たちはどうするんですか？」

「そうだな。……では鬼ごとでもするか」

「は？」と満尋は聞き返した。皆が一人一人訓練をつけてもらっているのに、何故自分は鬼ごとなどで遊ばなくてはならないのか。宇木衛門は木刀を手にして、「これから俺は明鵠寺を適当に歩く」と言った。明鵠寺というのは、この？衆が拠点としている古寺の寺名だ。随分昔に寺としての役目は終えているのだが、今でも町の間を含めてここをそう呼んでいる。

「お前は俺から一本取れば良しとしよう。好きに討って来い」

「十数えたら動いていいぞ」と宇木衛門は本堂を後にした。つまり鬼役は自分がやるというわけか。本当の遊びでなくて良かったと、一息ついて十数える。頭なんてやっている人間だからめっちゃくちゃに強いに決まっている。初めて宇木衛門に会った時を思い出して、満尋は身震いした。一本取れるだろうか。

——八、九、十！

本堂を駆け出して外に出ると、当然だが宇木衛門の姿は無かった。敷地内のあちこちで稽古をしている衆徒を見ながら、どこへ向かったかを考える。本堂から出て正面は、正門まで何も無いので隠れるところも無い。となると、裏へ回ったかとそちらへ行くと、意外と早くにその姿を見つけることができた。

隠れるでもなく走るでもなく、本当にただ歩いている。警戒している様子もなく、満尋以外のものが見ればただの散歩に見えるだろう。満尋は木刀を構えて彼に向かって駆けていくと、「何してんの？ 満尋」と声がかけられた。

どうやら稽古中の衆徒が気になって声を掛けたようだが、その所為で宇木衛門は気付いたようだ。満尋を見てふっと笑うと駆け出して見えなくなってしまった。ちっと舌打ちして後を追いかけるが見失う。そこで満尋は気付いた。どうやら、隠れなければならないのは鬼の方らしい。

庭の植え込みに身を潜めながら、満尋はじっと宇木衛門の様子を窺った。立てば腰ほどまである植物たちは、低く伏せた満尋をすっぽりと覆い隠してくれる。宇木衛門はかつて僧房と呼ばれていた、衆徒が寝泊りしている長屋風の建物の階に座^{あぐら}って、稽古中の衆徒の様子を見ているようだ。はっきり言って、正面から向かっていったところで宇木衛門から一本取れるわけが無い。こちらはまだ剣術を始めて十日も経っていないのだ。少々卑怯でも不意をつくぐらいしないところの鬼ごとには勝てないのだから、ハンデと思ってもいいだろう。ただ、こっそり近づくには他の衆徒に見つかってはいけない。先程の二の舞になるからだ。

できるだけ足音を忍ばせて背後にまわる。まだ距離が開いているので油断はできない。植え込みから離れて縁の側に移動し、静かに上がると、誰にも気付かれないように気配を殺して徐々に距離を詰めていった。こうして気配を殺していると、あの町人から逃げ回っていた日々を思い出す。あの頃自分は何を考えていたか。

——絶対に見つからないように。殺されてしまうから。もつと、もつともつと野生になれ。

肩を狙って振り上げた木刀は、素早い動作で横に薙ぎ伏せられ、腕、肩と続いて鈍い衝撃がやってくる。

「くっ……」

カラン、と木刀を落とすまで、満尋は自分に何をされたか分からなかった。

寄る居待月 2

時刻を告げる鐘が七回鳴る。昼七つ、現代では午後四時過ぎぐらいだろう。今日が夕食当番でなくて良かった、と心底思っていると冷やりとしたものが腕に当てられた。

「……っつ!？」

「はーでにやられたんべなあ。ちいっと我慢しろー」

六郎が湿布のようなものを貼り付けたのだ。初めて会った時のように、六郎が手早く手当てしていく。本堂には多くの衆徒たちが集まり、それぞれ治療されていた。

結局最後まで一本も取ることができなかった満尋は、宇木衛門にこてんぱんに伸された。それにしてもまったく歯が立たなかった。本当に人間だろうかと疑うほどだ。

「おめーも運がわりいなあ。宇木衛門もちっと加減しねえか」

六郎は満尋の後ろにいた宇木衛門に小言を漏らすと、これで最後と腹に湿布を貼って軽く叩いた。

「ん？ なかなか良い気配の殺しっぷりだったからな。やはり、連れてきた甲斐があった」

宇木衛門は反省の様子もなく、一人満足そうだ。こちらは体中木刀で思い切り打たれて、打ち身だらけだというのに。治療のために脱いだ上半身を整えて「どういうことですか？」と聞くと、後ろで胡坐をかいていた宇木衛門は、口元に手をやり可笑しそうに笑った。彼は時々このような笑い方をする。それは見るものをぞっとさせるが、同時に人を引きこんでいくのだ。眼球の僅かな動きですら見逃すまいと、目を逸らせなくなってしまう。

「なに、あの時のお前は正に飢えた獣のようだな。まだまだ未熟だが、?衆に入れてみるのもいいだろう、と。型通りの剣術ばかりではつまらんからな」

そう抜け抜けと言う宇木衛門を六郎は呆れた目で見ていた。いつ

ものことなのだろう。一見彼は実直な男に見えるが、それは違ふと満尋は感じていた。先程彼は自分を飢えた獣と称したが、獣のようなのは宇木衛門の方だ。狡猾な思考と鍛え抜かれた身体。行動は慎重かつ大胆に。群れを率いるその姿は、差し詰め狼といったところか。つい忘れがちだが、彼は力でもって自分たちを制する雄^{リーダー}なのだ。「あのぎらぎらした目は良かったぞ。仲間には大事にすべきだが、あまり丸くなってくれるな」

彼は満尋の頭をがしがしと掻き撫ぜると、「明日もしごくからな」と本堂を後にした。その姿を見送りながら、満尋は撫ぜられた頭を手櫛で直した。一体彼は自分に何を期待しているのだろうか。

いつもはあちこちで明かりの点いている衆徒の長屋も、今日ばかりはすぐに真っ暗になり、そこかしこで鼾が聞こえた。散々しごかれたのは自分だけではないらしい。部屋の戸をそつと開けると、衝立の向こうから十壺が声をかけた。

「まだ寝ないのです？」

「ああ、目が冴えてるみたいだ。本でも読んでくるよ」

衣擦れの音がして、十壺が起き上がったのが分かる。手に持った本を見せると十壺は「熱心ですね」と笑った。

「部屋でどうぞ」

「いや、明かりをつけたら寝にくいだろう。……外の方が静かだし」と、まるで満尋に抗議するかのように、勘吉は「と、掃除機のような鼾を立てた。それを聞いていた十壺は「あまり遅くならないように」と、一言添えて布団に戻った。

しかし、満尋は本当に読書をするつもりで外に出たわけではない。ただの口実だ。今日は彼女との約束があるから。

満尋は『影映り』のことを聞いた後、気になってずっと向こうに呼びかけていたのだ。今までの満尋だったらそんなものは信じないし、試したりもしないのだが、実際にこの目で桶に映る少女を見て

いる。『月夜里』^{やました}がどんな所かは分からないが、とにかくあの女の子にもう一度会ってみたい。そして今度は話もしてみたかった。少なくとも、あの子は現代となんらかの繋がりがあるような気がするのだ。

満尋は桶の水ではなく、もっと大きな水のある場所を選んだ。丁度、長屋の裏に手入れの行き届いていない荒れた場所がある。そこには隠れるように2m四方に収まる小さな池があるのだ。満尋は暇さえあればその池に呼びかけていた。

そして、『月夜里』の「ヘアピンの彼女」には意外にも早く会うことができた。昨日の夕方、薪割りの仕事が早く終わったので池に呼びかけたところ、返事があったのだ。

「はい、ここにいます」

と、応えた彼女は満月の少女と同じ子だった。落ち着いた色の小袖に、前掛けを掛けている。そして前髪にはピンクのヘアピンが咲いていた。向こうで同じくこちらの影を見たであろう彼女は、柔らかに満尋に微笑んでいた。

会いたいと思っではいたものの、何を話すかはまったく考えていなかった。満尋はしまった、と思いつつも何か話題が無いか考えていると、突然彼女は、自分は伊月だと名乗り、なんのケーキが好きかと聞いてきた。は？　と思うが満尋も自分の名前を教えて「甘いものは好きじゃない」と答えていた。ちなみに彼女はガトーショコラが好きらしい。なんの意味もないような会話だが、これで彼女が自分と同じ現代人であることが判明した。

一度会話が始めると、その後は途切れることがなかった。お互いに気持ちが高揚していたのだろう。彼女は頬を染めてなにやら一生懸命だった。

さらに質問していくと、彼女は平成生まれの高校生で、二つ年下であること。ひと月前『月夜里』にやってきたという彼女は、おそらく自分と同じような状況であることも分かった。ただ、話を詰めていくと、どうも彼女はあまり自分の周りのことに無頓着だったら

しい。どこの国にいるのか、今何年なのか、誰が領主なのか答えられなかった。領主といえば、彼女はこちらのことを『春日部』と呼んでいたのが少し気になるが。とはいえ、この三つは『月夜里』とこちらの関係を知る重要な手がかりになる。「宿題」という形で、彼女に調べてもらうようお願いした。

それから、同時に時鐘が鳴ったことで時間の流れが同じだったということも分かった。少々興奮してそのことを告げると、伊月は「満尋ってすごいね」と、素直な、きらきらとした尊敬の目を向けてきた。あまりに真っ直ぐ見つめるものだから、つい目を逸らしてしまった。絶対顔が紅くなっているに違いない。実際、水面の向こうで笑われた。

今日は、昨日自分が出した「宿題」を彼女は持ってきてくれるはずだ。急がなくてもいいのだが、申し訳なさそうにしていた彼女のことだ。きつとすぐに調べてきて自分に持ってくるだろう。池の縁で膝を立てて座ると、満尋はまだかまだかと『影映り』の兆候を待った。

寄る居待月 3

立膝をついたままうつらうつらとしていると、池の水面が揺らめいた。昨日も見た『影映り』の兆候だ。夜五つを少し過ぎた頃だろう。八時くらいだろうか。「こんばんは」と現れた伊月にこちらも「こんばんは」と返した。

「さっそくだけど、国のこととか聞いてきたよ」

ほら、やっぱり。伊月が予想通りに話を持ってきたので、思わず口元が緩んだ。本当に素直な子だ。こんな子がよくこの世界でやっていったな、と思う。

「聞かせてくれ」

「えっと、まず私のいるところは『わくれ』っていう国」

『別暮』。つまり、同じ国ににいるということか。すると彼女は「でもね」と話を続けた。

「満尋の所と漢字が違うの。私の国は、山に支えるっていう字と、呉服とかの呉の字で『？呉』っていうの。それで、満尋の国は無いって言われた」

同じ音でも漢字が違う、か。確かに自分も主だった国は調べてみたが、そのような国は無かった。ふむ、と手を唇にあてて考えるが、これだけでは何も分からない。

「それで、他には？」

「領主の名前は『やました きよひろ よしたか』」

出た。ここでも同じ音の名前。たぶん、これも漢字が違うとかそんな感じだろう。満尋たちは彼女のいる所を『月夜里^{やました}』と呼び、領主の家名が『やました』。伊月は昨日こちらの世界を『かすかべ』か、と聞いてきたが、こちらも領主の家名が『春日部』である。偶然と片付けるには出来過ぎている様な気がする。

「最後に、今は天輝四年の八月十八日だよ」

こちらも八月十八日なのは同じだが、元号は元呈五年だ。これは

違うようだなど、自分の思考に耽っていると、水面の向こうの伊月が不安そうにこちらを見つめていた。

「満尋は普段何をしてるの？」

おそろおそろ、といった様子で伊月は尋ねる。少しばかり自分の世界に入りすぎてしまったようだ。向こうにばかり話させるのは悪い。

「俺は？ 衆っていうところに入れてもらってる。傭兵集団っていったら分かるか？ そんな感じだ」

「危なくないの？」

心配そうに伊月が言う。それはまだ分からない。なにしろ稽古しかしてないのだから。でも、何れは戦に駆り出されるようになるだろう。宇木衛門が？ 衆を惣として強くしたいのなら。とりあえず「今のところは」と答えるしかない。

「まだ、仕事はもらってないけど。今は剣術や馬術……の基本を教えてもらってる」

馬術か……。馬で思い出すのは勘吉しかない。もう、あんな適当な指導も突発レースもごめんだ。あれからも、馬術では彼のめちやくちゃんな行動に振り回されているのだ。ついこの間のことを思い出していたら、伊月がなにやら慌てて話題を変えてきた。

「わ、私はね、こっちに來て扇子屋さんに拾ってもらったんだ。売るだけじゃなくて、最後の仕上げもしてるんだよ」

そういうと伊月は扇子作りの話や、そこでお世話になっている人たちのことを話し出した。こちらは男ばかりでほとんど明鵠寺を離れないから、職人や町の人たちの話は新鮮だ。

「その息子さんね、まだ十歳なんだけどすごく大人びてるの。絶対会ったら満尋もびっくりするから、しっかりしてて。でも、私妹みたいに思われてて……」

年上の威厳が、と落ち込む伊月には思わずははっと笑いが零れた。伊月じゃ、まず年上の威厳なんてものは出せないだろう。だいたい、二十歳まで子どもとして扱われる現代人と、幼い頃から親の仕事を

手伝い、十五にはほとんど元服するこちらの人間とではしつかり度は違うに決まっている。そう言えば、「それはわかってるけど……悔しいじゃん！」と伊月は口を尖らせた。

他にも続く伊月の話に満尋は自然と微笑んでいた。

「伊月は、いい人たちに出会えて良かったな」

心からそう思う。自分はここの生活に来るまでいろいろあった。高校生という自分を手放して、物を盗んで、人から追われて毎日を過ごした。いい人になんて出会わなかった。

伊月は「うん」と笑顔で頷くと、「満尋もそうでしょう？」と尋ねてきた。その言葉を聞いて、満尋は自分の笑顔が凍りついたのを感じた。

きつと彼女はすぐにその「扇子屋」に世話になれたのだろう。あんな地獄のような日々は知らないのだ。満尋が「そうじゃない」とは思ってもいないのだろう。でも、それで良かったとも思う。正直、嫉ましくはある。羨ましい。自分もそうだったらどんなに良かったか。でも、「そうじゃない」自分はここで新しい生活を手に入れることができた。辛いだけの日々は、あの日宇木衛門に遇った時に終わったのだ。だから、伊月が自分はすぐに？衆に世話になったのだと思っっているのなら、それでいいと思う。自分がどんな目に遭ってきたかなんて、言う必要はないのだ。

この女の子が酷い目に遭わなくて、本当に良かった。

「？衆の人たちは違うの？」

満尋の表情が変わったのを、伊月は？衆の人たちが原因と勘違いしたようだ。それは違う。彼らにはとても救われているのだ。

「？衆の人達は、本当にいい人ばかりだ。あの人達がいるから今の俺がいる、と思う。男ばかりだし、莫迦で変な奴も多いけど」

「……そっか」

そう言うと伊月は安心したようだった。それから会話が途切れてしまう。その隙間を通るように風が吹いて、茫茫に伸びた草が満尋の腕や足をくすぐった。もし、自分がクラスのムードメーカーみた

いに話し上手であれば、上手く話を繋げる事ができただろうに。すると、伊月が新しい話を持ち出してきた。少々無理やりな話題転換にも渡りに舟と乗っかれれば、彼女は次第に嬉しそうに日常の話を始めた。そういえば、昨日から話の切欠はいつも彼女からくれる気がする。

ほとんど聞き役にまわっていると、彼女を映している水面が少し暗くなった。それに気付いた伊月は、あ、と後ろの方を見る。明かりか何かを置いていたのだろう。どこで『影映り』をしているのか知らないが、あまり遅くまで外にいさせるのは危険だ。

「もうそろそろ寝た方がいいな」

と言うと、とても残念そうにしたのを内心嬉しく思いながら、「ほら、お開きにするぞ」と促した。

「明日も『影映り』できるか？　ちょっと実験したい」

少し気になることがある。昨日今日と同じ場所で『影映り』をしたが、はたして場所が変わっても同じように伊月と話せるのか。

「明日は俺が別の場所から『影映り』をしてみる。ただ、上手いのかは分からないから、明後日も同じ時間に会おう。その時は今居る所からするから、伊月もそうしてくれ」

「わかった」

「よし。じゃあ、また明日。……上手くいけばな」

小さくそう付け足せば、伊月はふふふ、と笑った。

「うん、またね。おやすみなさい」

「……おやすみ」

今日は伊月にばかり話させてしまった。ころころ変わる表情と語る話が面白くて、つい聞き役になりっぱなしだったのだ。明日はこちらも何か話題を用意しておこうと心に決めて、『影映り』を終わらせるべく水面に触れた。

更待月の陰 1

満尋は、今日も宇木衛門に散々扱かれた重たい体を引きずって、食堂の裏口から厨に入って行った。今は夜五つ。日のあるうちは、衆徒たちが当番制で飯を作り賑わう厨も、今は誰にも利用されることなく、辺りはひっそりと静まり返っている。器用に高く積み上げられた、大量の皿や盆に触れないように気をつけて、奥の竈の方へ移動した。火を点けた灯明皿を竈の上に置いて、甕の蓋を開けると、中には井戸の水がたっぷり張られていた。

ここへ来たのは、昨日伊月に話した実験をするためだ。伊月はいつと同じ場所、自分は池を離れてここから『影映り』をする。それで、どうなるのか調べるのだ。一度目は桶の水に映ったのだから、甕の中の水でも大丈夫だろう。満尋は暗い水に向かって呼びかけた。「おい、誰かいるか？ 伊月？」

しかし、水面はゆらりもしない。何度か呼びかけながら、息を吹きかけてみたり、指を突っ込んでみたりしたが変化は起きず、伊月の影は映らなかった。

「駄目か。……場所を変えてみるか」

それから、満尋は思いつく限りの水場を訪れた。井戸、裏山から流れてくる小川、はたまた風呂場まで。しかし、どの場所でも『影映り』の兆候は一向に表れず、最後の井戸を試し終えてお座り岩に腰を下ろした。今からいつもの場所で『影映り』を試みようか。そう考えていたら、じじ、と皿の火が大きく揺らめき、明かりが一気に小さくなった。皿の中にたっぷりと入れてきた魚油が、すっかり無くなっている。これは、一時間半から二時間は経っている。両手を後ろについて、流石にもう待っていないだろうな、と諦めると僅かな火を頼りに部屋へ戻った。明日はとうとう初仕事だ。昼からなので午前中は自由なのだが、夜更かしするほど胆は大きくない。二人を起こさないように、細心の注意を払って布団に入った。

昼九つの鐘が鳴る。少し早めの昼食を町で済ませた満尋たちは、町の西側の街道に集まっていた。集まったのは九人。皆ほぼ同じ時期に入った新入りだ。

「ひい、ふう、みいっと。……よし、全員いるな」

九人の中では一番利発な孫太夫が場を仕切る。八弥丸より一つ年下の彼は、この中で二番目に年長だ。八弥丸はリーダータイプではないし、まとめるのは得意ではないと本人が言っていたので、孫太夫がまとめ役を引き受けたのだ。彼は皆をゆっくりと見渡すと、緊張した面持ちで口を開いた。

「頭から頂いた仕事は、私たちでこの辺りに出沒する賊を退治することだ。奴らは、最近この街道を通る商人や旅人を襲っている。ここは真田町しんたと隣の太木町、仲主村なかすが繋がる重要な街道だ。心して掛かろう」

孫太夫はきりっとした太い眉毛を真一文字にしてそう言った。「おう」と皆が頷くと、少し緊張が解れたのか表情を緩め、荷物の中から褐色の帯を差し出した。

「なんだい？ それ」

満尋と同じ年だという主膳しゅぜんが尋ねた。開いているのか閉じているのか、いまいち良く分からない目が、何に使うんだと訴えている。

「うわっ、お前起きてたのか」

「酷いなあ、勘吉さん。貴方だって珍しく静かだったじゃないですか。てっきり偽者が紛れ込んだのかと思いましたよ？」

主膳の隣にいた勘吉が大げさに驚いてみせると、主膳は心外だとばかりに眉をひそめた。しかし、勘吉が驚いたのも分かるのだ。彼は黙っていると本当に寝ているように見える。

「ん？ ただの帯じゃん。これホントにどうすんの？」

二之助の隣にいた新左衛門が、褐色の帯を持ちひらひらと振っている。「あっ」と孫太夫が手の帯を確認して、いつのまに、と呟いた。まだ大人になりきっていない、細い体をした新左衛門は、くく、

と笑って「おいら掬^するの得意だし、朝飯前。あ、もう昼餉が済んでるから夕飯前？」と軽口をたたいた。何言っているんだ、と周りが笑い出すので満尋が、

「で、本当にどうするんだ。それは」

と、口を挟んだ。話を進めてくれ。

「こほん。これは？衆の証、だそうだ。袴の上から巻いてくれ。今後も仕事の時はこれを巻くように」

孫太夫は、新左衛門以外の全員に帯を渡して回る。皆言われたとおりには袴の上から腰に巻きつけると、一同妙な一体感が生まれた。

「なるほど、確かにこれは？みたいですねえ」

腹の帯を撫でてしみじみと十壺が言った。どういう意味だ、と聞いてみると、褐色の帯が鳥の？を思わせるのだそうだ。

「見たことねーの？ 田んぼの上とか飛んでんぜ。鳶に似てるけど、腹にこんな感じで帯模様があるんだ」

二之助が腹の上で手を動かし、帯を示すジェスチャーをする。

「へえ、それで？衆か。面白いな」

「おれも今知った。この帯からだったんだな」

生憎、本物の？という鳥を見たことは無いが、鳶に似ているなら猛禽類の一種だろう。この辺りは一面田んぼだから、空に注意していれば見つけられるかもしれない。

すると、ばんばんと二拍手の鳴る音がして、孫太夫が皆の注意を自分に戻した。そろそろ出発のようだ。

満尋の腰には、初めて持つ本物の刀が差してある。宇木衛門は、けして稽古中は本物を使わせてくれなかった。ただ、抜き差しの方だけ教えてもらう時に、ほんの少しだけ持たせてくれた程度だ。勘吉などに聞いてもそれは同じらしく、八弥丸のように始めから剣術を身に付けていた者意外は、皆真剣を差すのは初めてのようだった。

歩き出す皆の後ろで、満尋はそっと左手で柄の頭を撫でた。そこから、冷やりとした温度が手に伝わって、ごくりと唾を飲む。

（これが、人を殺す道具……）

以前、自分の首筋に宇木衛門が当てた鋭い刃。あの時の冷たさを思い出して体が震える。満尋は、きっと自分はこれを抜けないだろうと感じていた。

更待月の陰 2 (前書き)

※グロテスクな描写があります。
苦手な方はご注意ください。

更待月の陰 2

賊を追って満尋たちは街道から外れ、山の中へと入っていた。好き勝手に生えた枝や蔦を棒で払いながら進んでいく。

「頭の話だと、この辺りだな」

孫太夫が地図を広げて辺りを見渡した。木々が鬱蒼と茂り、まだ昼間だというのに薄暗い。宇木衛門たちが先に下調べを済ませているらしく、この辺りに賊が潜む拠点があるとのこと。孫太夫の提案で、三人一組で分かれて搜索することになり、満尋は気心の知れた勘吉、十壺と組んだ。

「なあ、俺たちだけで、何とかなれると思うか？」

皆と十分離れた所で満尋はそう口にした。自分を入れて九人。相手が何人いるかしろれないが、こちらには素人も混ざっている。対峙しても無事でいられるだろうか。

「そうですねえ、あたしも言ってみれば今日が初陣ですから何とも……。ただ、宇木衛門殿はしっかりと調べてあたし達に回してくれたのですから、何とかなると信じるほかありません」

「ま、今日までいろいろ俺たちも鍛錬してきたんだし、すぐにやられたりしねえよ。そう思っとけ」

十壺と勘吉が心配するな、と満尋に言う。確かに、ここで怖気づいて帰るわけにはいかないのだから、勘吉ぐらい気楽に考えた方がいいのかもしれない。悩んでいないで、自分も何か賊の手がかりを掴もうと、満尋は首を巡らした

しかし、薄暗い山の中はほとんど視界がきかない。ただでさえ自分は眼鏡に頼っているのだから、ここは他の器官を使った方が良さそうだと満尋は判断した。すう、と意識を切り替えて耳と鼻に集中する。頭の遥か上の枝では鳥の囀りが、少し離れた所では小さな獣が草を踏む音が聞こえてくる。どんな異変も見逃すまいとしていると、煙の臭いが鼻を衝いた。上を見上げると、細い煙が天に伸びて

いる。狼煙だ。

「お、なんか見つけたか。あっちは誰だろうな、八弥丸たちか？」
三人で狼煙の昇った方へ向かうと、孫太夫と八弥丸、与市がそこに居た。しかし、満尋は近づくたびに煙とは違う不快な臭いを感じていた。それは、二人も同じだったようで、顔をしかめている。すぐ後から残りの三人も追いつき、全員が揃った所で与市がおもむろに持っていた棒で藪を開いた。

「うっ」

むわっ、と辺りに強烈な臭いが広がる。何かが腐っているような、とにかく酷い臭いだ。与市は鼻と口を袖で覆い、この臭いの中眉一つピクリとも動かさずに、顎で棒の先を見るよう促した。皆嫌な予感しかないが、それでも近づいて藪の中を覗き込む。

その瞬間、満尋は己の口を手できつく押さえた。そうしないと、悲鳴も、胃の中の物も、全部出てきてしまいそうだったから。

そこには、腐乱した死体が転がっていた。体つきからおそらく女のもののだろう。衣も何も身に纏っておらず、髪の毛は根元からぱさり切られていた。そんな死体が、一つ二つ、全部で六体ある。ぱっくりと開いた傷口には、何かの卵が産み付けられ、そこから孵化した幼虫が這い出し蠢いている。顔は無残にも鳥か何かに啄ばまれたのか、ただ目鼻の位置が分かるのみ。五体が揃っている者はいなかった。

「この向こうに賊が使っているらしい獣道を見つけた。おそらく、その先に拠点としている場所があるはずだ」

八弥丸が厳しい顔をして言った。信じられない。同じものを見たはずなのに、八弥丸は少しも顔色を変えてはいない。満尋は目線を逸らし、ふらふらと後退すると、後ろにいた勘吉にぶつかった。「悪い」と血の気の失せた顔で見ると、勘吉は顔をしかめながらも、その無残な死体を真っ直ぐに見ていた。

「ああ、大丈夫だ。って、お前が大丈夫じゃないな。あっちで吐いとくか？」

少し離れたところを指差して、勘吉が控えめに肩を支えた。首を横に振って返事とすると、「無理するな」とそのまま後ろに回される。嫌な汗が噴出するのが止まらない。気合で吐くのは何とか堪えると、揺れる視線で他の人間にも目を向けた。一番年下の二之助や、新左衛門でさえ、青い顔をしながらもしっかりと立っている。自分は、肩を支えてもらってやっと立っていられる状態だというのに。この違いは一体なんだ。

「私たちはもう少し奥へ行ってみるが、満尋はどうする？」

孫太夫が心配そうに満尋に尋ねた。この先もつと過酷な状況になるかもしれないと、死体を見ただけで蒼白になる満尋を案じての質問だろう。

「いや、大丈夫だ。行くよ」

肩を支える勘吉の手をやりわりと押しやって一人で立つ。まだ気分が最悪なのに変わりはないが、ここで一人残るような情けない真似はごめんだ。ほとんど意地だけで立っていると、くん、と袖を引かれた。与市だ。

「……駄目なら帰った方がいい。この先は戻れなくなるかもしれない」

「戻れない？」

与市はそれだけ言うと、八弥丸の後について死体の向こうの獣道へ入っていった。彼は支給された刀ではなく、自前の火縄銃を一丁抱えている。腕前が達者だというそれは、遊びでもなく、見世物でもなく、道具本来の目的の為に使われる。彼とは同じ年らしいと聞いていたが、その十八年はきっと自分とはまったく違う年月だろう。初めて耳にした彼の声は、流水のように満尋の中に入ってきて、脳に染み渡った。それでも、忠告は聞けない。どこに戻れないのかは分からないけれど、一度「行く」と口にしたから帰るつもりはなかった。戻りたくないのは、あの最初の半月だけなのだから、進んでも後悔はしない。結局はこのまま、一人駄目になりたくないのだ。

更待月の陰 3

崖の下には自然にできたのか、大きな横穴がぽっかりと口を開いていた。随分と深そうな洞だ。皆でばらばらになり、洞を取り囲むようにして50mほど離れた藪の中に身を隠す。身を低くしてそつと中の様子を窺うが、人が中にいる気配はない。

「全員で出ている？ そんなはずは……」

「誰かが中に入る必要があるな」

孫太夫が僅かに驚きの色を言葉に滲ませると、八弥丸はすぐに次の行動を示した。孫太夫はそれに頷くと、「二、三人誰か行けるか？」と皆に呼びかけた。しかし、洞の中は何が飛び出すか分からない。堂々と松明などは点けられないから、皆及び腰だ。満尋は与市ならすぐに行くと言いつつ思っていたが、右向こうで待機している彼は我関せずの様子で銃を弄っていた。満尋の怪訝な視線に十壺が、

「洞の中は、彼の得意な火縄は向きませんからね」

と、苦笑した。確かにそれはそうだ。的がはつきりしない、暗くて狭い場所で鉄砲を撃つ馬鹿はいないだろう。では誰が適任か、と考えていると、満尋から一番離れた所に居た主膳が名乗り出た。

「孫さん、僕が見てきましょう。気配には敏い方ですから、様子見くらいなら大丈夫でしょう」

「じゃあ、おいらも行こつかな。小悪党の考えならちよつとは分かるしね」

それに乗乗するように新左衛門も前に出た。彼と歳の近い二之助と一緒に行くと言いつつ出たが、十壺と勘吉に止められしぶしぶ待機組みにまわった。満尋はその様子を見ながら、腰の刀に手を当てた。まだ、さっきの衝撃はある。あの暗い洞の中にはもっと醜く、惨い現実が待ち構えているかもしれない。それでも、自分はこの？衆で居場所を手に入れなくてはならないのだ。

「俺も行く」

満尋はそう言って主膳の傍についた。皆の表情が言外に大丈夫かと言っているが、引く気はなかった。勘吉が馬鹿言うな、と怒っているが無視を決め込む。

「満尋が……？　でも君はさつき——」

「いいんじゃない？」

戸惑う孫太夫の言葉を遮って与市が言った。その後ろで、日に二度も喋るなんて、と二之助が感動している。

「頭から、気配を読むのも消すのも新入りじゃ一番と言われたんだ。やる気もあるんだし、行かせたらいいじゃない」

至極どうでも良さにそう言うのと、与市はまた愛銃弄りに戻った。これ以上喋るつもりはないらしい。

宇木衛門から、「新入りの中では一番」と言われたのは昨日の稽古中だ。「鬼ごと」の続きをしている時である。一昨日同様、不意打ち戦法で向かっていった満尋だが、結局一本も取れずに終わった。宇木衛門から五回目の返り討ちに遭った時、彼は倒れた満尋に言ったのだ。「剣術はさっぱりだが、気配を隠すのは上手い。読むのも得意だろう？　今回入れた新入りの中では一番だろうな」と。出し抜けに褒められ目を丸くする満尋に、「町人くらいなら闇討ちもできるな」と、最後に嬉しくない言葉を付け加えてくれたが。

そんなやり取りを見ていたか、人伝に聞いたかしたのだろう。与市がそう押してくれたおかげで、満尋も洞の中へ入れることになった。

主膳が先頭、間に新左衛門、殿を満尋という並びで洞の中を進んでいく。入り口は四人横に並んでも余裕がある幅だったが、進むにつれ次第に狭くなり、二人並ぶと窮屈に感じるほどになった。足元には木片や、壺の破片が転がっており、気をつけねば音を立ててしまう。入り口からの光がほとんど届かなくなったところで、主膳が立ち止まった。視線を向けられ、満尋は頷く。奥からは何の物音も

気配もしない。

先に進むとどうやら開けた空間に出たようだった。主膳は火打石で棒切れに明かりを点けると、そこには賊の居住していた残骸が散らばっていた。火を分けてもらい、三人で辺りを隅無く探索する。二十畳ほどの空間には、ムシロや汚れた着物、割れた陶器、何かの獣の骨が至る所に散乱していた。

「どうやら無人だったみたいだねえ」

「ああ」

主膳がのんびりと辺りを見渡す。満尋もぐるりと一周歩いてみたが、誰かが隠れるような場所は無いし、先に続く道もない。ここで行き止まりだ。

「なあんか、緊張して損した。おいら、外に誰もいないって伝えてくる」

新左衛門はぐっと伸びをすると、韋駄天の如く外へ駆け出していた。確かに拍子抜けだ。いや、賊と鉢合わせしても困るが。

「こういう洞穴のアジトって、普通トラップとかあるよな」

「へえ？」

「あ、いや。……罠とかあるかも、とか？」

狭い空間の中では、小声で溢した独り言も拾われてしまうらしい。慌てて言い直すと主膳は小首を傾げた。

「満尋は面白いことを考えるなあ。罠、罠……。落とし穴くらいはあるかもね？ でも、話を聞く限り、そんなに頭の働く奴らには思えないけど」

さらり、と毒を吐いた主膳に満尋は乾いた笑いを返す。まあ、トラップ云々もゲームとか漫画の話だ。本気で言ったわけじゃない。もう出るか、と主膳と二人来た道を引き返し、外で待っていた者たち合流して中の様子を話して聞かせた。

「うむ、もうここは使わないかもしれないな。？ 衆が調べていることに気付いたのかもしれない。今日は一旦帰って、指示を仰ごう」

孫太夫の言うことに賛成し、赤みの増した山中を急いで明鶴寺へ

と戻る。途中、あの名も知らぬ女たちの骸の前を通った。十壺だけは彼女たちの前で、短く手を合わせ拝んでいたが、他の者は軽く見遣るだけでそのまま素通りして行った。その後を視界に入れないように早足で駆け抜けると、引いたはずの汗と気持ちの悪さがどつと戻ってきた。皆は顔色の優れない満尋を、気にかけてつつ見ない振りをしてくれる。満尋はそれありがたいと思いながら、宇木衛門の前に立つまで終始無言でいた。

更待月の陰 4

「そうか、ご苦労だったな。一応今回のことは紙に認めておいてくれ」したた

宇木衛門は孫太夫の報告を聞くと、まず皆に労いの言葉を掛けた。初めて入る宇木衛門の自室は、満尋が三人で使っている六畳一間よりも少し広々としている。離れにある彼の部屋は、元は住職が住んでいた方丈庵という建物だ。四畳半の建物ということから付いた名だが、それは元がという話である。実際この方丈は八畳と六畳の二間の構成だ。流石に全員は入る必要がないので、まとめ役の孫太夫と洞に入った満尋、主膳、新左衛門が部屋に入る。整理の行き届いた室内には、難しそうな兵法書や、どこかの地図など戦関連のものが積まれていたが、机の隅には小さな紫色の実が鈴なりについた枝を、一輪挿しに飾っていたりもする。花や実を愛でるような人だとは思っていなかったのも、満尋にはそれが少し以外だった。

報告が終わり四人で退室すると、宇木衛門は満尋を引きとめた。三人には先に帰ってもらい、一人残る。何事かを書き留めていた宇木衛門は、筆を置くと満尋にもう一度座るよう促し、本人は楽な体勢になり机に頬杖をついた。

「どうだ、満尋。初めての仕事は。……顔色が随分と悪いな。六郎を呼ぶか？」

「……いえ。どこが悪いというわけではないので、大丈夫です」

「仏でも見たか？」

宇木衛門は口元をにやり、と持ち上げる。満尋は正座した膝の上で、両手を固く握り締めた。満尋にはまだ、あの異臭を放つ無残な骸達が人間の成れの果てには思えなかった。人は、死んだら丁重に弔われて、燃えて、灰となって、消えて逝くものではないのか。では、自分が見たあれはなんだ。

宇木衛門は膝を立てて満尋へ向き直ると、「どうする？」と問う

てきた。質問の意味が分からず宇木衛門の顔を見ると、彼は笑いもせずただ無表情で満尋を見ていた。

「どうする。まだこの程度は温い方だ。お前はその先にいけるか？」射るような視線に、満尋は瞬きもできずに固まった。似たような質問を与市にもされた。与市には「いく」と答えたが、何故か宇木衛門にそう答えるのは躊躇われた。

「お前は俺が無理やり連れてきて、強引に入れたに等しいが、ここで立ち止まった人間を抱えるほどの余裕は？衆には無い。お前は付いてこられるか。この先に」

宇木衛門の静かな気迫は、満尋を圧倒した。彼の言っていることはつまり、死体で怖気づくくらいなら？衆を出て行け、ということだろうか。

「俺はこれから六郎と話すことがある。悪いがもう出るぞ」

机の上の書類をいくつか手にして、宇木衛門は部屋を出て行った。満尋は、先ほどもで宇木衛門の座っていた所に目を向けたまま、動けなかった。ここを出て自分に一体なにが出来る。まだ知らないことも沢山あって、ここには満尋を守ってくれる法律も無い。大人もいない。？衆を出て一体どう生きるのだ、自分は。

机の上に飾られていた紫の実が一粒ぽとり、と落ちた。

満尋は弾かれたように立ち上がると、部屋を出て宇木衛門の背中に叫んだ。

「俺は！　ここで頑張ります！　何があっても、付いていきます！　」

宇木衛門は一寸立ち止まったが、振り返ることなくすぐに歩き出した。

「消去法で決めると後悔するぞ」

そう呟いた彼の声は、満尋には届かなかった。

ほとんど手付かずの夕餉を終えて、満尋は早めに池の辺に来ていた。昨日は会えなかったが、今日は伊月と話せるはずだ。約束の時

間までは、話の話題を考えることに充ててみたが、あまりいいネタは思いつかなかった。時折ちらつく今日の出来事が、ほのぼのとした話題を考える邪魔をした。

そうこうしていると、水面が揺らめき伊月の影が現れる。伊月は満尋の顔を見るなり、「昨日はごめん!」と猛烈な勢いで謝ってきた。なんのことが、心当たりの無い満尋が目丸くすると、伊月は訳を話し始めた。

「私昨日途中で寝ちゃって……。『影映り』気付かなかったかも。本当にごめん」

「寝た……って、外だろ? 馬鹿かお前!! 現代だって危ないぞ。……何も無かったな?」

満尋が今度は別の意味で目を丸くし声を荒げると、伊月は首を竦めて「大丈夫でした」と答えた。現代もこの世界も、どんな人間がいるか分からないのは一緒だ。まったく無用心すぎる。

「……昨日だけど、結局『影映り』は失敗だ。なんの予兆も起きなかった。付き合わせて悪かったな」

「そっか。私も満尋も、今居る所からじゃないとできないんだね。了解」

そう笑う伊月の顔に、昼間の女の骸が重なった。息を吞んでたじろぐと、水面の向こうからこちらを案ずる声がする。

「満尋? 大丈夫? 顔、真っ青だよ……? 具合悪いなら、今日はどう終わりにしよう?」

「だ、いじょうぶだ。光の加減だろ。……何の話だったっけ?」
自分でもこれは無理がある、と思いつながら誤魔化されてくれ、という気持ちで話を続けた。このまま布団に戻ったって、どうせ眠れやしない。伊月は不安げな顔はしつつも、「昨日の『影映り』は上手くいかなかったって話」と、流してくれた。

それからは、いつものように何気ない会話が始まった。会話といっても、話すのはほとんど伊月だが。今夜はまるで、自分の口が他人のもののように感じる。重たくて、無理に開こうとする言葉が

出ない。それでも、彼女が話すたわい無い話を聞いていると、少しずつ気持ちが落ち着いてくるのだから不思議だ。

「そういえば、学校とかどうなってるかなあ？ 搜索願とか出てたりして」

「さあな」

「テストが溜まってたらやだな。満尋は頭良かった？」

「それなりに勉強はしてたからな。というか、俺はテストどころか受験だぞ？」

テストぐらいがなんだ、と苦笑すると伊月も声をあげて笑った。こうして、二人で現代の話をしていると、昼間の出来事が夢のように思えてくる。向き合わなくてはならない現実だと理解しながらも、今だけは目を逸らして無かった事にしたかった。

曙光はまだ 1

満尋は門前の堀に寄りかかって、勘吉、十壺を待っていた。三人で町の見回りに行くためである。肩透かしのような初仕事の後は、ずっと安全な仕事が続き、賊の洞を三人ずつで見張るローテーションを回しながら、近場の町の依頼で、見回りや門番などをこなすことが日課となっていた。

宇木衛門が懸念したとおり、春日部幸望公が領主となってから領内の政治は悪い方へと傾き、町の防衛のために駐在していた兵は城下へと集められた。彼らを呼び戻すには、莫大な金を役人に渡さねばならず、それができない町や村はたちまち悪党の餌食となった。そんな中現れた？衆は、彼らにとつてまさに救いの光である。もちろん金は払ってもらうが、役所に渡す額に比べればとても良心的だろう。

今日行く町は、満尋が初めて宇木衛門に会った真田町だ。内心複雑ではあるが、仕事だと割り切って見回りに専念することにする。

後は、町の人が自分のことを忘れているよう願うばかりだ。

「お、満尋。良かった、いつも通りだな。心配したんだぞ」

門のところで、およそ四日ぶりに会う先輩衆徒が声を掛けてきた。馬から降りた彼は、手綱を引きながら満尋を見て相好を崩した。四日前、初めて見る人間の死体に、真っ青になって返ってきた満尋をひどく心配してくれたのだ。次の日の早朝、彼は仕事で明鶴寺を離れてしまったが、その間もずっと気に掛けてくれていたようだ。「おかげさまで」と笑顔で返すと、「そうか、そうか」と満尋の背中を叩いて厩の方へ向かっていった。

正直、こんなに早く気持ちを切り替えられたのは、伊月のお陰である。きっと、あの時『影映り』をしないまま布団に入っていたら、間違いなく自分は悪夢に侵されていただろう。あの夜、上手く気持ちを紛らわせることができたお陰で、満尋はなんとか立ち直ること

ができていた。

しかし、昨日の『影映り』は少し伊月にきついことを言ってしまったかもしれない。というのも、彼女が元の世界へ帰れると簡単に言い出したからだ。帰りたい、という気持ちは分かる。自分だってそうだ。もし？衆に出会う前に帰る方法があると云われたら、間違いない満尋はその方法で現代に帰っただろう。でも、実際はそんなこと言われなかったのだ。これをしたら帰れるだとか、何か役目を果たせば戻れる、なんて条件は自分たちには無かった。そんな自分たちが帰る方法を見つける、という行為は、暗闇の中を手探りするようなものだ。何を探せばいいのか、何処を探せばいいのか、まったく検討がつかない。

伊月は帰る方法は絶対にある、と言った。ここに来ることができたのだから、帰ることも可能だ、というのが彼女の言い分だ。だが、いつ帰れるかも分からない、そもそも帰る方法があるのかすら分からない。そんなものに、伊月は自分の一生を全て捧げるつもりなのだろうか。

ギリシャ神話のパンドラの箱。あらゆる災厄を閉じ込めた箱の、最も奥にしまわれていたのは「希望」だった。多くの本では、希望があるから安心して、というニュアンスで書かれていたが、満尋は以前から別の解釈の方が自然だと思っている。

「無いことの証明は不可能だ」と自分は彼女に言った。どこかで区切りを付けなければ、疲れきって、そして壊れてしまう。箱の中には災厄しか入っていないのだ。それに気付いて欲しくて、多少強く言ってしまったけれど、彼女は分かってくれただろうか。

『影映り』は月の満ち欠けに左右される。欠け始めた月の影響で、伊月の顔は今までのようにはつきりとは映らなかった。もしかしたら、ノイズ交じりの水面の向こうで、泣いていたかもしれない。

「——悪いな、遅くなった。……なんだ、また湿気たツラして。腹でも下したのか？」

「……違う。なんでもない、ちよつとした考え事だ」

無意識に表情が暗くなっていたのだろう。走ってやって来た勘吉が満尋の顔を覗きこんできたが、大丈夫だ、と微笑む。大丈夫だ。自分も、きつと伊月も。

「真田町かあ、俺はまだ行ったことねえんだよな。結構大きかったら三人で回るの大変だよな。――あ、おおい！！ 遅えぞ十壺い！！」

誰かが走りよってくる音がしたな、と思ったら十壺だったようだ。まだ、こちらと少し距離のある十壺は「すみませーん」と、言いながら走ってくる。近づくにつれ、彼の長い髪の毛が、動きに合わせて右に左に大きく揺れるのが見えた。やはり、髪は短い方がいいのではないだろうか。

「遅くなつてすみません。……行きましようか」

三人揃ったところで、腹に褐色の帯を巻く。これで良し、と皆で領いて門の外に出た。山の中にある明鶴寺は、一步外へ出たら延々と坂道である。傾斜はきつ過ぎず緩過ぎず。落下防止の柵も何も無い山道を下っていく。少し道端に目を向ければ、白や黄色、紫といった秋の花々が、控えめながらも美しく咲いている。あまり花には興味が無かった所為で、名前が分からないのが残念だ。

「そうだ、勘吉。町の規模だけど、たぶん中くらいじゃないか？
三人で回るなら、丁度良いと思うぞ」

？衆に入る前は、いろんな町や村を転々としながら、その中を走り回っていたのだ。真田町も、だいたいの所は回ったことがあるはずだ。少し記憶を遡って、町内の地図を頭に描いていると、その隣で勘吉と十壺は目を丸くしていた。なぜ、そんな顔をされたのだろうと、訝しげに見ると、二人はばつが悪そうに苦笑した。

「悪い悪い、ここでも世間知らずを発揮するかと思つてよ」

「もしかして、以前住んでいたのですか？」

勘吉の言うとおり、あまり説明する側に居なかったので気持ちは分かるが、はっきり言ってくれる。そろそろ世間知らずではなくな

っている筈だ。そして、十壺の質問にはなんと答えればよいか。確かに住んではいたが、明らか歓迎はされていなかったし、それ以前に定住していた訳ではない。とりあえず、「立ち寄ったことがあるだけだ」ということにしておいた。

「じゃあ、案内はお前に任せるな」

その言葉にこくと頷いて、町がどんな様子だったかを思い浮かべる。町人たちの般若のような顔を記憶から追い出して、町の地理を思い出すことだけに専念した。

曙光はまだ 2

町での見回りは、満尋の緊張と心配を他所にすんなりと終わった。念のために眼鏡を外していたこともあるだろうが、町人たちは、約一ヶ月前に追い回した満尋の顔などすっかり忘れているようで、三人に「ご苦労さん」等と、にこやかに声をかけてくる者もいた。市では乾物売りを中心に盗みを働いていただけに、満尋は心中複雑だったが、また追い掛け回されなくて良かった、と安堵の気持ちも大きかった。二人は、町に着くなり眼鏡を外した満尋に疑問を抱いていたが、有事の際に壊したくないからと適当なことを言っておまかした。日がある内に夜間担当の者と交代をして町を出ると、街道に入るなり即座に眼鏡をかけた満尋を、二人は呆れた顔で見た。

「その“めがね”とやらが無いと、あまりものが見えないのでしょうか？ 見回りの時も付けていれば良かったじゃないですか」

「確かにぼやけるけど、歩けないほどじゃないし……。何があるかぐらいは分かる。町でも問題なかっただろ？」

今回は何事も無く見回りは終了したが、諍いに遭って本当に壊れてしまったら大問題だ。フレームが壊れるくらいなら何とかかなりそうだが、レンズはもうどうにもならない。新しく作り直すことも不可能だろう。今までもうっかり壊してしまうのが怖くて、馬術と鉄砲術以外の稽古では時々外していたくらいだ。？衆は荒事が多いから、今度暇な時に眼鏡ケースでも作った方がいいかもしれない。

日が沈む前に明鵜寺に戻ると、二之助が門前で三人を待っていた。地面には暇だったのか、たくさんの落書きが描かれている。あの、カブにかまぼこを二つくっつけて、笑っているのはもしかして自分の顔だろうか。隣に満尋と書いてある。

「やっと帰ってきた！ そろそろかと思って待ってたのに、待ちくたびれたぜー」

「悪かったな……って、なんだこりゃ？ これ俺の顔か？ 名前無

かったら絶対わからねえな」

勘吉は足元の似顔絵を見ながら、へたくそめ、と大笑した。九人分の似顔絵は、確かに上手ではないが、見ていると段々本人に似てくるから不思議だ。

「それでも無い。良く似ている」

「ええ、本当に。あたしの顔もあるんですか？ 嬉しいですねえ」

満尋と十壺が褒めると、「そうだろ？ 分かる奴には分かんだよ」と、二之助は勘吉を睥睨した。「それで、二之助はどうして待っていたんでしょか？」と、十壺が口争いを始めた二人をやりわりと窘め、話を変える。

「あ、そうそう。孫太夫がさあ、夕餉の前にちよっと集まろうって。三人とも外に出てたから、ここに居た方がすぐ会えると思ってさ」集まるのは長屋の空き部屋だそうで、もう他の皆はそこに居るらしい。満尋たちはまず足を洗ってから、二之助と共にその空き部屋へ向かうと、狭い一間に神妙な顔をした皆がぎゅうぎゅうと詰まっていた。

「ああ、お帰り。適当に座ってくれ」

孫太夫が一番奥の位置に座り、あとの者たちは車座になって胡坐をかいている。しかし、一部屋に大の男が九人も集まると、単純に狭いというだけでは無い気がする。部屋の敷居を跨ぐと、なんだか空気が変わったような感じがした。要するに、むさ苦しいのだ。少し詰めてもらって入り口側に座ると、孫太夫が話を始めた。

「実は、この間の賊がまた現れたらしい」

今日見張りに向かっていた新左衛門たちが行きの途中、街道を通る商人たちから聞いた話らしい。なんでも、今度は少し離れた所の山道に出るのだそうだ。おそらく、あの洞を根城としていた賊だろうと、もう一度自分達が彼らと対峙することになったというわけだ。しかし、こちらが動いているのに気付いていながら、こんなに早く姿を見せるとは。話を聞いていた面々も、どこか呆れ顔だ。確かに、以前主膳が言っていたとおり、彼らはあまり頭が良くないのかもしれない

れない。

「そういうわけだから、明日から賊退治を優先に仕事を組むことになった。それでここからなんだが、この間のようにまた雲隠れされても困る。確実に捕らえる方法をとりたい」

孫太夫が皆を見渡す。集まったのは、それを決めるためのようだ。皆それぞれどうするべきか考えているのか、一斉に黙り込む。満尋も顎に手をやり考えると、孫太夫が気まずげに手を挙げて、「一応方法は考えてみたんだ」と、口にした。

「商人のふりして、わざと襲わせるという手なんだが……」

その言葉に誰もがやっぱり、という顔をした。皆同じ考えに辿り着いたのだろう。現行犯で捕まえるなら、やはりおとり捜査が一番手っ取り早い。もちろん、必ず賊に襲われるとも限らないし、おとり役の人が危険に晒されるというデメリットはある。しかし、また場所を変えられてイタチごっこになるよりましだ。確実に、というなら、これが現状一番いい方法だろう。問題は。

「商人を誰がやるか、だな」

ぽつり、と八弥丸が溢し、皆に緊張がはしる。正直誰もそんな役はやりたくない。ほとんどのものが、刀を持ってやり合ったことの無い素人なのだ。こと満尋に至っては、殴り合いの喧嘩すらしたことが無いのである。勘吉が顔の前で激しく手を振り、僅かに上ずった声をあげた

「こ、ここはやっぱり、襲われそうな人選んだ方がいいんじゃないのか？ それだと、俺は向いてないだろ？ ……例えば、十壺とか、二之助とか」

すると、勘吉を挟んで座っていた十壺と二之助が鋭い目つきで睨みを利かせた。突然白羽の矢を立てられた二人が、黙っているはずも無い。

「勘にい、ふざけんな！！ ぜえったい、おれはやらないからな！！」

「あたしもやりませんよ。こういうのは、襲われても大丈夫な人が

引き受けるものです」

それからは、あいつだこいつだと役の押し付け合いが始まった。参加していないのは、なんとかまとめようとしている孫太夫と、やはりこういうことに興味がないのか、ぽけっとしている与市くらいのものだ。一人八弥丸が、自分が引き受けても良い、と自ら名乗り出たが、がたいも良く、とても商人とは思えない風貌の彼は、皆から却下を貰っていた。

結局、ぎゃーぎゃーと煩く騒ぐ面々に、「もう皆で商人やればいいんじゃないか？」と、投げやりに呟いた満尋の案が採用された。「全員でどうするんだ」という声を全て無視して集まりを解散すると、満尋は孫太夫、与市と一緒に食堂へ向かった。これ以上長くなると、食いつぶぐれてしまう。とりあえず後の采配は、孫太夫が上手くやってくれるそうなので彼に任せることにして、今日はいつもと違う面子で静かな夕餉を取った。

曙光はまだ 3

少しずつ色づき始めた原生林の山道を、荷車を引いた一行がえっちら、おっちらと登っていく。高く伸びた樹齢数百年という木々は、昼間の日光を見事に遮り、切り開かれた山道以外を薄暗く演出していた。まるで、人間はこちら側に入ってくるな、と山そのものが言っているようである。枯れた落ち葉を踏み鳴らしながら、烏帽子を被った五人の商人は、やたらと重たい荷車に息を切らしていた。

「な、んで、全員商人って、こういうことかよ」

後ろで荷車を押していた二之助が、愚痴を溢す。前で満尋と一緒に車を引いていた新左衛門が、「おいら疲れたー、交代だー」と音をあげる。

「しっ。新左衛門、気付かれる。疲れているのは、皆一緒だから、頑張ってくれ」

「満、尋の、言うとおりで。もうすぐ、朱泪の滝が、あるから、そこまで……」

隣の新左衛門に静かにするよう声をかけると、満尋と一緒に彼を挟んでいた孫太夫も励ましにかかった。かくいう孫太夫も、息絶え絶えである。道のすぐ下方には溪流がさらさらと流れており、その流れに轟々と水の落ちる音が混ざりこんでいる。滝が近いというのは本当のようだ。

「そこまで、って言います、けどねえ。交代なんて、ありやしない、でしょうに」

二之助の隣で顔を赤くした主膳が、憎憎しげに恨み言を漏らす。すると、車に被せられた布がもぞもぞと動き、僅かに捲りあげられた隙間から陽気な声が飛び出してきた。

「いやー、悪いな。俺たちだけ快適でさ」

布に隠れているのは、勘吉、十壺、八弥丸、与市の四人である。採用された満尋の「全員商人」作戦は、荷物役を新たに加えること

で実行に移された。実際、荷物のある方が、商人らしくなり目も付けられやすく、こちらも物騒な武器の類を隠せるので中々良案であった。そして、二日の準備期間を経て、ようやく今日決行日を迎えたのである。

とても商人には見えない八弥丸は、強制的に布の中で待機してもらい、気配に敏い満尋と主膳は外で荷を引く役目を任された。一応指揮をとる立場にある孫太夫も、同様に外の配置である。そして、残った五人で分かれてもらったのだが、これが失敗だった。公平に決めようというので、満尋が教えたジャンケンでメンバーを決める。しかし、勘吉と与市が、荷役に回ったのは間違いだと気付いたのは、山道に入ってからだった。まず、勘吉は八弥丸に次いで体格がいい。太ってはいないが、筋肉があるためかなり重量があるのだ。そして、与市は着痩せする見た目の割りに結構力がある。彼の小筒は重さが約一貫と三斤。だいたい5, 6キログラムもあるのだ。それをいつも持ち歩いているのだから、九人の中でも力自慢の人間に入る。二之助か新左衛門の変わりに与市が商人側に来てくれれば、この道中も少し楽だったかもしれない。

「替わってやりたいけど、ここで俺たちが出てっても怪しいだけだろ？ 頑張れ、頑張れ」

「煩い、荷物は黙ってろ」

元気の有り余っている声を聞くと、どうも苛苛してくる。とても笑顔で「応援有り難う」と言う気にはなれない。

黙々と山道を進んでいくと、ようやく朱泪の滝に辿り着いた。ここまでではなんの問題も無く来ることができたが、気は抜けない。万一、賊と鉢合わせしたときに、商人役が満身創痍では大変なので、五人のためにここで充分休憩を取ることになった。

白い一本の糸のような水が、滝壺へと流れ落ちていく。腹に響く滝の音に心地よさを感じていると、年少組みの二人が水辺へ駆け出して行った。危ないからと、道中外していた眼鏡をかけると、見事な自然の雄姿が目に入る。満尋は厳かな滝の姿に思わず溜息をつく

と、隣に主膳と孫太夫がやってきた。

「清らかなんですね。先までの荒れた心が洗われるようです」
本当に、煩くてやたらと重たい荷物のことなど、どうでも良くなる素晴らしさだ。白い流水、苔むした緑の岩。そこに、まだ青々とした葉が紅や黄の紅葉に変わればもう言葉は出まい。乾いた岩に腰を下ろして、水でも飲もうかと水筒を探ると、筒袖の衣のどこにも見当たらない。満尋はどこかで落としてきたか、と慌てるが二人も同じだったようで、三人揃って首をひねる。すると、滝壺へ一直線の年少組みが、五つの竹筒を手に戻ってきた。

「ああ、新左衛門か」

掬^すりが得意だと言った彼は、おそらく気を利かしたつもりなのだろう。しかし、いつの間に持っていかれていたのやら。仲間なのだから、せめて一声かけてほしい。「水汲んできたぜ」と竹筒を差し出した新左衛門に、苦笑して礼を言うと、そのまま栓を抜いて水を飲む。汲まれたばかりの水は、ひんやりと喉を潤し満尋の疲れを癒していく。この水が、あの滝から汲まれたものだと思うと、なんだか少し恐れ多いような感慨深い気持ちになる。

「滝壺には何かあったかい？」

「ヤマメがいたくらいかな。仕事じゃなかったら、釣りでもしたんだけど」

「もう少し時期が遅ければ、散った紅葉が川を流れて、見事な錦が見れたんだが」

紅葉はまだまだ始まったばかり。緑の多い枝を少し残念に思いながら、満尋は辺りを見渡した。滝の周りだけ木々が開けているので、まるでここだけスポットライトを浴びているように明るい。満尋は、なんとなく嫌な予感がした。滝の音が激しいので、音が拾えない。もう少しこの景色を堪能していたいが、なるべく早く離れた方がいいだろう。

「孫太夫、そろそろ……」

「うわああああっ」

突然、満尋の声を遮って誰かの悲鳴があがった。見ると、ぼろぼろの男が覚束無い足取りでこちらへやってくる。何事かと皆で近寄ると、その男は二之助にしがみついて汚い顔を涙で濡らした。孫太夫が小さく手で合図をし、荷に隠れている四人にまだ待機しているように指示を出す。男は切れ切れの息をなんとか整えて、涙ながらに訴えた。

「助けてくれ。この先で、ぞ、賊が出たんだ！ み、皆殺されっちまってよお。頼む。俺は死にたくねえ！ 助けてくれ！」

ものすごい力で縋られ、二之助がたたらを踏んだ。満尋がなんとかその男を引き剥がすと、今度はこちらに取り付いてきた。どうにか宥めようとするが、恐慌しているのかちっとも落ち着いてくれない。このままでは、賊に騒ぎを聞きつけられてしまう。

「あの、もしもし？ 少し落ち着いてもらえないか」

孫太夫が満尋と共に男を取り押さえにかかるが、なりふり構わない男の力はすさまじく、二人掛かりでも難しい。すると、新左衛門がひゅっと息を呑んだ。

車の周りを十数人の男たちが囲んでいる。皆、毛皮の衣を身に纏い、手にはぎらぎらと光る刃が握られている。賊だ。彼らは、こちらを警戒しながら徐々に近づき、その内の一人が車の荷に手を出した。

「――みんな――！」

「八弥丸！！ 賊だ！！！！」

満尋と孫太夫が叫ぶと、布が大きく捲りあがった。そして、一閃。手を伸ばした賊が一人、血飛沫をあげて地面に倒れた。

曙光はまだ 4

車の上に立ち上がった八弥丸が、そのまま刀を横に薙ぎ、目の前にいた賊の男を倒した。それを皮切りに、一斉に賊が襲い掛かってくる。勘吉と十壺、八弥丸は車から飛び降りると、賊の中へ突っ込んでいった。

「すみません、俺も行かないと。離してもらえますか？」

満尋は、未だ自分にくっ付いている男に、手を離すように促した。仲間と賊、入り乱れての乱戦は、満尋に焦りを感じさせるばかりだ。男はそれでも尚、手を離さない。焦りが苛立ちに変わり、満尋は男を睨み付けると、白い光が目の前を過ぎ去った。

上手く身体を捻って一撃を避けたが、短刀の柄が満尋の頬を直撃した。湿った土の上に叩きつけられ、頬にじんじんとした痛みが広がっていく。視界が悪くなったことで、眼鏡がどこかへ飛んだのだと頭で理解すると同時に、輪郭のぼやけた男の下卑た笑いが耳につき、満尋はこの男も賊の仲間なのだと気がついた。

二撃、三撃と襲い掛かる凶刃を、満尋は転がりつつ躲けていき、なんとか体勢を膝立ちの状態へ持っていく。しかし、良く見れば賊の太刀筋は、ただ刀を振り回しているだけ、という感じた。宇木衛門の稽古に比べれば、随分とお粗末なものである。

「満尋!!!」

勘吉の叫びと同時に、黒石目の鞘がこちらに飛んできた。なんとか左手で刀をキャッチすると、そのまま居合いの要領で襲い来る賊を横に払った。

つぶれた蛙のような声をあげて、目の前の男が倒れていく。満尋の顔に何か温かいものがかかり、それはぬるりと頬を伝っていった。周りの喧騒が一切聞こえなくなり、満尋は頭が真っ白になる。倒れた男が動かない。――動かない。自分が何をしたのか、気付いてしまったらどうなるのか分からなかった。一瞬で体の芯まで氷の様に

冷え切って、全ての感覚が凍結していく。赤いものが足元に広がっていくのを呆然と見ていると、花火のような爆音が空気を振るわせ鳴り響いた。

はっと意識が呼び戻されて、景色は朱泪の滝の辺に戻る。見ると、白い煙が荷車から立ち昇っていた。今の爆音は銃声だろうか。

満尋の目の前では皆が戦っていた。八弥丸を筆頭に、勘吉や十壺、主膳、孫太夫、新左衛門や二之助まで。ぐっと右手の刀を握り締めると、鞘を放り投げて荷車へ向かっていく。与市は次の発砲準備ができるまで無防備になるはずだ。刀を両手でしっかり持ち直すと、車に近づき背を見せた賊の一人を袈裟斬りにした。

静まり返った朱泪の滝では、九人の荒い息遣いが聞こえるだけであつた。先ほどは一気に体が冷えたと思つたのに、今はとにかく全身が熱い。体中の血液が沸騰しているような、そんな感じだ。ようやく息が整ってくると、視界には自分達が屠つた賊の屍が映りこんできた。

「終わったな、戻るか。孫太夫。――孫太夫？」

八弥丸が刀の血を払い納刀する。しかし、孫太夫は放心状態なのか、血の付いた刀をだらりと下げたまま、ただ立ち尽くしているだけである。八弥丸が呼びかけると、何度目かできるようやく正気になつたのか、刀を振って鞘に納めた。

満尋も震える手で納刀しようと腰に手を当てたが、そこには何も差さっていない。そういえば、どこかにほっぽってしまったことを思い出し、鞘を取りに行く。一番初めに斬つた男の向こうに、黒い鞘が転がっていた。おそらく、もう息はしてしまい。男の亡骸から目を背けて、その向こうの鞘を拾った。すると、すぐ側の岩に引つかった何かがきらりと光る。刀を納めてからその場所へ行ってみると、見慣れた緑の眼鏡が光を反射していた。手に取ってみると奇跡的にどこも傷は無く、少し土で汚れた程度だった。満尋は眼鏡をかけようとしたが、鼻の辺りに持っていたところでゆっくりと

下ろした。まだ、視界はぼやけていた方がいい。懷に眼鏡をしまうと、皆がいる荷車の方へ向かった。

皆目立った大きな怪我は無く、無事だったのは幸いだ。満尋も頬の腫れ以外は、小さな切り傷、擦り傷ばかりで大事無い。それぞれ、顔に付いた返り血を綺麗に拭うと、今度は全員で車を押して山道を下った。

帰りは下り坂だというのに、皆の顔は暗く、足取りも重かった。さすがに血塗れの着物のまま帰ることはできないので、上着を一枚脱いで下着に袴という井出たちで帰路についた。通りかかる人々が満尋たちを見て、葬式行列か何かかと勘違いするほど、陰鬱な空気を醸し出していたらしい。八弥丸と珍しく与市が、氣遣わしげに皆を窺っている。結局、帰り道は誰一人言葉を発することなく、日がどっぷりと沈んだ頃に明鵠寺へ帰り着いた。

機械的に宇木衛門への報告を終えると、彼は前回同様九人の仕事に良くやった、と労いの言葉をかけた。それから、二日ほど仕事は休みにして良いとも。それ以外に何も言わなかったが、きつとじつくり考える時間をくれたのだろう。とにかく、皆疲れていた。真っ先に風呂場へ直行し、いつも以上に念入りに身体を洗う。無意識に身体を擦り過ぎていたらしく、お湯に浸かると真っ赤になった皮膚に滲みて、全身にひりひりとした痛みが襲ってきた。その後は誰も夕餉を取らないのか、皆直ぐに部屋へ入っていった。

布団に入ってしまったら、隣の二之助の部屋からすすり泣く声が聞こえてくる。勘吉や十壺も中々寝付けないのだろう。何度も寝返りを打つ音が聞こえる。満尋もなんとか瞼を閉じようとするが、ちらちらと脳裏をちらつく紅い影に、眠ることができないでいた。

黒い何かが満尋の体中を這い回っていた。気持ちの悪いその感触を振り払い、一目散に駆け出すと、今度は足が纏れてばしゃんと水溜りの中に倒れる。生温かいその水は、どろっとしていて鉄の味が

した。満尋は己の手をぼんやりと見遣った。掌にべつとりと付いたそれは、指の付け根から滴り落ちて、足元の水溜りへ還っていく。その雫が落ちる度に、どこからともなく声が聞こえてくるのだ。

「おお、お前、もう戻れないぞ」

「そんな穢れた身で、一体どこへ帰るのかい？」

「この業を置いて、逃げられると思うなよ」

男なのか、女なのか。あらゆる声が満尋を責め立てる。強い負の怨念が満尋に纏わり付いて、耳元で、正面で、背後で語りかけてくるのだ。それらは、皆口々に「帰れない、戻れない」と、言い続ける。

膝から崩れ落ちて耳を塞ぎ、目を閉じていると、

「満尋」

と、聞きなれた声が聞こえてきた。ここに来る前は毎日のように呼ばれていたその声に、固く閉じた目を開くと、靴を履いた何人かの足が目の前にあった。その足を辿るようにして顔を上げていくと、懐かしい顔ぶれが微笑んでいる。

「満尋」

「もう帰ってこなくていいよ」

曙光はまだ 5

はっと目を開けると、暗い室内が目に入る。あがった息を整えることもできずに、胸元の夜着を掴む。しばらくして、呼吸が落ち着いて、今度は涙腺の方が馬鹿になったみたいだ。はらはらと流れる涙を拭いもせずに、満尋は外へ出た。

虫の音すら聞こえない明鶴寺の静かな庭園は、どこか現ではない様な不思議な場所が変わっていた。部屋の中よりも少し明るいと感じて顔を上げると、東の空には細い暁月が昇り始めている。その形がどこことなく刃のように思えて、満尋は空を見上げるのを止めた。どうしようもない不安感が満尋を襲い、また呼吸が荒くなる。今、満尋は何かを求めている。霧がかかったような頭では、それが何なのか考えることもできないが、身体は知っているようだ。満尋の足は勝手に歩き始め、もう何度も通ったあの池へと向かっていた。

「伊月、伊月」

「――満尋？ 満尋だ。良かったあ、心配したんだよ。もう来ないかと思った」

正直、返事は来ないものと思っていた。なぜ、彼女の声が水面からするのだろうか。自分は、まだ夢の中にいるのだろうか。そう言うのと、伊月は不思議そうに「今日は『影映り』しようって言ってなかったっけ」と、言い出した。数日前の記憶を辿ると、確かにそう約束していたような気がする。時計が無いので定かでは無いが、おそらく夜半はとうに過ぎているはずだ。まさかこんな時間まで待っているなんて、誰が思うだろうか。普段の満尋であれば、怒ってすぐに伊月を帰しただろうが、今だけはそれができなかった。

「こんな時間まで、待っていたのか？」

「……あ、うん。そうだ、私この間のことやっぱり謝りたくて。態度悪かったと思う。ごめ――」

「いや、あれは俺が悪かった。言い方が悪かったのは俺だ。……ごめんな」

前回の話は、たぶんどちらも悪くはなかった。伊月は帰るために頑張りたいだけだし、満尋はそれがいかに難しいかを説きたかっただけだ。だが、それを伊月に謝らせてしまうと、きっと彼女はしみりしてしまう。いつものように、明るく話してほしいのだ。

「……伊月？ いるのか？ 黙られちゃ分からないだろう」

今日の『影映り』は声しか届かない。水面は真っ黒な水を湛えたまま、そこに彼女の姿は無い。おそらく伊月の方もそうになっているはずだ。後、三日四日で新月になる。もしかしたら、また月が満ち始めるまで、『影映り』は今日が最後になるかもしれない。そうになると、次はいつ会えるだろうか。間が開きそうだから、ちゃんと次を決めておかないとすれ違いになってしまう。

「伊月？ 返事がないと居るのか分からないだろう？ 声だけなんだから」

「……居るよ。ねえ、何かあった？ 私じゃ力不足かもしれないけど、相談にのるよ？」

「いや、何もない。何も」

人を殺してきました、なんて言えるわけがない。もし、伊月が『^{やました}月夜里』生粋の住人だったら、まだ打ち明けられたかもしれない。でも、満尋と同じ現代から来た伊月には、とても殺人を犯したなんて言えないのだ。怖がられて、二度と『影映り』をしてくれなくなったら、自分はどうすればいい。

「声だけってつまらないな。いつもみたいに顔が見たい」

悟られないよう努めて明るく言った。でも、これは本当だ。いつも喜怒哀楽豊かな表情を見てきただけに、声だけでは少し物足りない。伊月の顔は見たい。けれど、自分の顔は見られたくない。満尋はそんなことを考えると、これは不公平だな、と自嘲した。

「……そうだね。電話みたいだなんて思ったけど、ちょっと違うよね。なんでだろ？」

「電話か……。確かに。ただ、電話と違って『影映り』は、繋がってるって思い難いのかもな。声だけだと特に」

電話では話の途中に「ちゃんと居ますか？」なんて心配したことがない。長い沈黙が無かった所為もあるが、それでも同じ声のみのコミュニケーションなのに、大きな違いがあるような気がしてしまう。

「今日の満尋は良く喋るね」

「そうか？ 声だけだからな。黙ってたなら伊月が寂しいだろう？」

どの口が言うんだ、と頭の中で別の自分が呆れる。寂しいのは自分のくせに。彼女の所為にして誤魔化して、素直に不安なんだと言えればいいのに。池の方に意識を戻すと、伊月が満尋の言葉になにやら文句を言っている。それを聞いて心から安心しているなんて、自分は相当参っているらしい。

「――ねえ、聞いている？ 返事してって言ったの満尋じゃん。自分の時だけ黙っちゃってさ。ずるいでしょ、それ」

「聞ってる、聞ってる」

「すごい生返事。……。ごめん。もう、帰って平気？ 眠くなってきた」

先ほど鐘が鳴ったので、はっきりとした時間が分かった。今は丑三つ時と呼ばれる時間帯だ。ずっと寝ずに待っていてくれたのだから、眠いのは分かっている。時々むにゃむにゃと舌足らずになるのも、眠気を堪えているからだろう。一生懸命起きようとしてくれている伊月には悪いが、もう少しだけ付き合ってはもらえないだろうか。

「まだ、もう少し。駄目か？」

また布団へ戻っても、見たくもない悪夢に魘されるような気がする。だから一緒に起きてくれ、なんて小さな子どもみたいな言い分だが、伊月なら「いいよ」と、言ってくれると確信していた。

「……しょうがないなあ。今回だけね」

長い沈黙の後、苦笑交じりの返事が返ってきた。やはり、声だけ

というのはつまらない。顔が見たい。きっと彼女は微笑んでいるだろうから。呆れ混じりの言葉は、少しだけ震えていた。

明日、というか今日はもう休みになる満尋と違って、伊月は朝からきつと忙しいだろう。商人の一日がどんなものか、満尋は想像することしかできないが、以前に聞いた伊月の話では、家事をして、商品を作って、また家事をして、と随分大変だったように思う。それでも付き合ってくれる伊月の優しさに感謝しながら、満尋は話を続けた。

そして、数時間後。真っ暗だった夜の終わりがやってくる。次第に空が白み始めて、紺から青のグラデーションを作り上げる。眩しい白い光が明鵜寺に差しこみ、どこかで鳴いた鶏が夜明けを告げた。太陽が東の山から顔を出した時、ようやく満尋は伊月を開放したのである。

朔夜艶宴 1

賊と斬り合ってから五日が経った。翌日は皆かなり参っていて、食事でも喉を通らない者がほとんどであった。特に二之介、新左衛門は突然嘔吐を繰り返したり、不眠が続くなど体力的にも消耗が激しく、宇木衛門が暫く九人の仕事と稽古を休みにする、と言ったことは適切な判断であった。満尋も二、三日は何度か食事を戻すことがあったが、今は大分元通りの生活に戻りつつある。他の者たちも、二之介と新左衛門以外は精神的にも落ち着きを取り戻し、それぞれ鍛錬や稽古に励んでいた。ただ、皆どこか表情に翳があり、稽古に励む姿も、まるで何かを振り払うような盲目さがある。それは満尋も同じで、素振りに打ち込むことで自分が奪った男の死に顔を忘れるようにしていた。

こんな時、伊月に会って、ただの高校生だった頃に戻りたくなるのだが、五日前の声だけの『影映り』を最後に、『月夜里』と繋がることはできなくなった。今日は新月。また月が満ち始めるまで、伊月とはしばしのお別れだ。早く早くと思うほど、ゆるやかに漆黒へ溶け込む月が恨めしい。何千と輝く星空よりも、たった一輪、月が顔を見せることを満尋は待ち望んでいた。

どっと流れる汗を手拭いで拭き取り素振りを終えると、そのまま風呂場へ直行する。風呂を焚く日は決められているので、なるべく逃さないようにしているのだ。現代にいた頃は、ほぼ毎日風呂に入っていた満尋にとって、布で体を拭く日が続くのはきつい事である。脱衣所の戸を開けると、中にはすでに何人かの先輩が入っているように、畳まれた衣服がいくつか見える。風呂場へ続く戸の向こう側から、談笑する声が聞こえてきた。

「あ、すみません。俺後でいいんで、ゆっくりどうぞ」

先輩の一人は袴の後紐を解いているところだった。伝内というこの男は、以前満尋に剣術指南をつけてくれた先輩だ。満尋が慌てて

戸を閉めようとする、

「おう、満尋じゃねえか。遠慮しねえで、一緒に入れよ」

と、そのまま中へ入るよう勧めた。癖の強い髪を後ろで括り、無精ひげを生やした伝内は、躯体の逞しい？衆の中でも抜きん出て男臭い。萎縮しながら中へ入ると、伝内は豪快に衣を脱ぎ去った。

同性だからこそ体が気になったりもする。ちら、と横目で伝内を盗み見ると、しっかりと筋肉のついた鋼のような肉体には、腕に腹にとあちこちに古傷が刻まれていた。その傷痕から痛ましさを醜さは感じられない。それよりも、たくさんの修羅場を潜り抜けてきたという伝内の屈強さを示していた。満尋がその傷に圧倒されていると、

「そんなにじいっと見るんじゃないよ。自慢の体に穴が開いたらどうしてくれんだ」

と、伝内は視線に気付いたのか少し照れくさそうに笑った。満尋は「すみません」と目を逸らすと、自分も袴と小袖を脱いで手拭いを腰に巻いた。あんなものを見た後だと、自分の体が情けなくなってくる。？衆に入って多少筋肉は付いたものの、まだまだ細身の満尋は伝内と比べればモヤシのようなものだ。

風呂場に入るとまずかけ湯をしてから、熱い湯船にどっぷりと浸かる。満尋は反射的にほう、と溜息を零すと、疲れた体が一気に弛緩してリラックスした気分になった。

この明鶴寺の風呂は大きな木桶風呂だ。桶の直径は五尺八寸。約170センチメートルもあり、大人六人くらいなら楽々入れる大きさだ。

満尋はこの風呂を見るまで、てっきり風呂は無いか、あっても蒸し風呂だろうと思っていた。湯船に浸かるのは割りと最近のこと、この世界もそうだろうと思っていたのだ。しかし、嬉しいことにもここでも風呂は、お湯を張って浸かるのが主流のようだ。風呂がある家は少ないが、大きな町には『御湯屋』という銭湯のような所があるらしい。安価で入れる『御湯屋』は庶民に大人気らしく、

金が無くても営業時間後の残り湯ならタダで入れるのだそうだ。

「おおーい、ちいと熱過ぎっぞ!」

湯船に浸かっていた先輩の一人が、壁に開けられた小さな虫籠窓むしこに呼びかけた。風呂のすぐ隣にあるその小さな窓の下には、今日の風呂当番の者が控えていて、湯加減の調節をしていてくれるのだ。すると、窓の向こうから「我慢しろよー」という声が返ってくる。

満尋が赤い顔でそれに苦笑すると、「てめえは後輩を茹で上げる気かー」と更に返した。その小気味好い応酬に笑いが零れてくると、突如湯の量が一気に上がった。伝内が風呂桶に足を入れてきたのだ。彼が胸まで浸かると、桶のお湯が勢いよく溢れ出る。

「おい、伝内。お湯がもったいねえでしょーが」

「あ? じゃあ、お前が出るや。女みてえに長湯してんじゃねえ」
どっかと湯に浸かった伝内は悪びれもせず知らん顔だ。先に入っていた先輩は、胡乱な目で伝内を見ると、

「へいへい、じゃあもう出ますよっと」

と、風呂桶から出て身体を洗い始めた。

「そうだ満尋。お前この後暇だろう。俺ら町へ出るんだが、一緒にくるか?」

「え、町?」

「おう、この間隣国の挟河さかわと帖許はけもとに行っていた連中が帰ってきたから、皆で騒ごうってな。美味しい酒が飲めるぞ」

伝内は楽しそうに破顔して満尋を誘った。しかし、先輩らで楽しもうという席に、満尋が混ざってもいいものか。しばし逡巡した後、やはり断ろうかと口を開くと、話を聞いていた別の男が話しに入ってきた。

「それなら、新しく入った奴等皆連れて来いよ。どうせ、あいつ等と顔合わせたこと無いだろ? その方があんたも出やすいよなあ?」

「え? ええ、まあ」

「よっし。じゃあ、そうすっか。満尋、お前全員に声かけてこいよ。後で店の場所教えるから」

伝内はそう言うや否や、風呂から上がって出て行ってしまった。話に入ってきた先輩の一人が、「そういう訳だから、早めに声かけに言った方がいいぞ」と失笑する。その言葉に、満尋は体を洗うのもそこそこに風呂を出ると、慌てて皆の部屋へまわっていった。

全員に先ほどの話をして、なんとか出席してもらおうよう頼み込んだ。顔合わせと言ってくれたのに、出席率が悪いと申し訳ない。皆そんな気分ではないようだったが、満尋の立場も酌んで参加すると言ってくれた。体調がまだ優れない二之介と新左衛門は留守番だ。二人とも調子が良くないのは自覚しているので、生気の薄れた顔で「楽しんできて」と、弱弱しい笑顔で送り出してくれた。

そして日が落ちた頃、伝内に指示され七人で訪れた場所は、町の隅にある一軒の飯屋だった。この辺りでは珍しい二層建ての店は、満尋が初めて見るタイプの店だ。『春宵一刻堂』と掲げられた店からは、明るい光が漏れ、賑やかな声が聞こえてくる。ひっそりと静まり返った町の中で、ここだけが別世界のように浮き出ていた。

朔夜艶宴 2

『春宵一刻堂』。真田町の東の隅にある飯屋である。昼間は町の人間が昼餉を食いに、夜は仕事を終えた男たちが集まり、酒を飲みにくる場所である。繁盛した店の中には仕事を終えた男たちが赤い顔で騒いでおり、給仕の女たちが側で酌をしている。草履を脱ぎ板間へあがると、奥で伝内や見知った先輩たちが手招きをしている。満尋たちは、広い一部屋を衝立で仕切っただけの店内を縫うようにして彼らの所へ向かう。途中酔っ払いたちに絡まれもしたが、でかい八弥丸や勘吉が睨みを聞かせると大人しくなった。

「おお、来た来た。先に飲んでたぞ。全員か？」

「いえ、二人ほど体調が優れないので置いてきました。今夜はお招き有り難う存じます」

すっかり新入り代表が板についた孫太夫が礼をすると、「堅苦しいのはいから座れ座れ」と、十人ほど居る先輩たちの間に、新入りが間に入るような形で座らされる。満尋の隣には初めて見る男が座っていた。すっきりとした顔立ちで、随分と細身の男だ。寡黙な性質なのか、男は一人静々と酒を飲む。不思議な男である。若いのか歳を取っているのか分からない。満尋がその独特の雰囲気になまれていると、顔見知りの先輩から猪口を渡され、並々と酒を酌まれた。

「ほら、飲め飲め。伝内の奢りじゃあ」

呵呵と笑うと満尋をじいとする。向かいの方に居た伝内から、「莫迦言うんじゃねえ、てめえも払うんだよ!」と、喝が飛ぶ。満尋は猪口に注がれた白く濁った酒を見つめると、ぐいとい気に飲み干した。「おおー!!」とどよめきが走り、これを皮切りに新人らに酒がまわされる。彼らも満尋に習って勢い良く飲み干した。

満尋が猪口を床に置くと、くら、と一瞬目が回り、すぐに体がぼかぼかと熱を発する。父親に付き合っ少し酒を飲んだことはある

が、もう少し弱いお酒だった。この世界に来て初めて飲んだ酒は辛く、満尋の空っぽの胃には堪える。すると、横から、す、と味噌を差し出された。細身の男からだ。満尋は有り難くそれを頂戴した。ここを出されたのは、味噌汁に入れるような滑らかな味噌ではない。豆やゴボウなどの野菜がふんだんに入っているオカズ味噌で、酒の肴にはぴったりだった。

「そうそう、こいつはなあ。源助っちゅうんじゃあ」

酒臭い顔を近づけて、男が笑う。細身の男は源助という名らしい。「満尋です」と挨拶すると、こくん、と頷いて肴を口へ運んでいた。「のう、こにゃーだ挟河へ行ってきたんじゃろ？ どうじゃ？ 戦になりそうかの？」

「資材の調達と徴兵が行われていた。間違はなく戦の準備だろう」初めて源助が言葉を発した。飲んだ酒の量の割にしっかりとした、低い落ち着いた声が重苦しく響く。

「そうかあ。久しく平和じゃったが、残念じゃのう。ま、戦が起きんと金が入らんから、一概に悪しとは言えんが……」

そう言って先輩はぐい、と酒を飲み干すと席を離れて別の者の所へ向かった。彼を目で追っていると、自然と他の者たちも視界に入ってくる。十壺はすでに真っ赤な顔をして、ぼんやりしているし、与市は酒に興味が無いのか黙々と料理に箸を伸ばしていた。孫太夫は教養を教えていた京太郎と、何やら熱い議論を交わしている。主膳は近くの先輩と談笑していた。皆それなりに先輩方と打ち解けているようである。満尋も源助と何か話してみようかと顔を見るが、彼はこちらをちらりとも見ずに、ただ酒を流し込んでいるだけだった。

「お待ち遠様。ささの追加ですよ」

鈴の音のような声がかけられ、給仕の女が追加の酒を持ってくる。男たちはそれを、待ってましたとばかりに受け取ると、

「ようし、俺と飲み比べようって気概のあるやつあいねえのかい？」と、伝内が声を張り上げた。新入り代表として、酒に強かった勘吉

と八弥丸が飲まされることになり、並々と注がれた酒が二人に渡される。それから、やんややんやと大騒ぎが始まった。何時の間にか、他の客たちや給仕の女も集まって皆で大宴会が繰り広げられたのである。

場が盛り上がるにつれ、満尋も飲む酒の量が増えていく。先輩からの酌を断れなかったというのもあるが、飲めば飲むほど気分が高揚していく所為だろう。賊退治の一件から、どこか暗い雰囲気が入りたちの中に漂っていた。今夜は久しぶりに気分が明るい。ふわふわとした気持ちの良い感覚を満尋は楽しんでいた。

「ねええ？ 暫くの間がいい男が増えてるじゃないかい。あたいらにも紹介しておくれよ？」

ふわり、と好い香の香りが漂ったと思うと、満尋の肩に回された手が滑らかに首元を滑る。白く艶かしい女の腕が、するすると満尋の顔を撫でた。

「おう、集真藍^{あつさい}か。新入りが何人か来たんでな。なんだ、そいつが気に入ったのか？」

先ほどから水のように酒を煽る伝内が、集真藍と呼ばれた女に問いかける。そいつ、とは満尋のことか。振り向いて女を見ようにも、背中にしな垂れられては顔が見えない。柔らかな女の体と、艶やかな香りにくらくらしてくると、女は耳元で「かわいいねえ」と囁いた。

「この子ちよいとおくれよ。うちにも新しく入った子がいるんだよ。初めての客が、あんたらみたいな野太い熊じゃあ、可哀想だろう？」

「熊だあ？ その熊の相手をしてるあんたは何なんだい？ まあ、いいけどな。満尋、金はこっちで出してやるから行って来い」

一体何の話か。満尋にしな垂れかかった女は、ようやく腕を離して隣に腰掛けた。三十路過ぎくらいの女が蠱惑的な笑みを浮かべている。若くも無く、取り立てて美人でも無いが、集真藍の強い生命力と完成された女の色が、彼女に壮絶な美しさを与えていた。

「俺たちの相手はしてくれねえのかい？」

他の男たちが不満を露にすると、店に居た何人かの女が擦り寄って甘えてくる。特に、飲み比べで勇姿を見せた勘吉と八弥丸は大人気だ。まさか、この店は色も売っているのだろうか。満尋は己の膝に載せられた集真藍の手を払おうとしたが、酔って力の入らない体ではそれも敵わず、逆に手を取られてしまった。

「お前らも気に入ったの連れてっていいぞ」

先輩が女を連れて二階に上がるのを見てみると、伝内がそう口にした。勘吉などは、「いいんですか!？」と鼻の下を伸ばしている。孫太夫が「しかし……」と、渋る様子を見せた。顔が赤いのは酒の所為だけでは無いだろう。

「金の心配か？ お前ら新入りには、好きなだけ飲ませて食わせて、遊ばせて来いと頭の仰せだ。気にするこたあねえよ」

伝内がそう言うのと、勘吉が「っしやあ!」と歓喜の声をあげた。近くに居た主膳が「お頭は太っ腹だねえ」と、満尋に話しかける。こちららも嬉しそうだ。向かいでは、八弥丸がなんとか十壺を起こそうとしていたが、彼は完全に酔いつぶれ寝入っているようだった。

「じゃあ、もう憂いも無いことだし、この子連れてっていいね」

集真藍は満尋の腕を取ってそのまま階段を昇らされる。満尋は霞がかかったような頭でこの先のことを考えてみるが、思いつくものはあるのにはつきりと出てこない。そうこうしている内に、階段を全て上がり終えて二階へ辿り着く。薄そうな壁で仕切られた小さな部屋が幾つか有り、そこから女の艶かしい嬌声が響いていた。それを聞いて、満尋の体が一気に熱くなる。

「この部屋でお待ちさ。さっきも言ったけど、初めての子だから、優しくしておくれよ？」

集真藍は満尋の肩に手を置いて、真っ赤な紅の鮮やかな口元を寄せる。そのまま戸を開けて満尋を部屋の中に押し込むと、ぴしやりと閉めて「ごゆっくり」と言った。

薄暗い小部屋の中には布団が一枚。その横に小さな黒い影が佇ん

でいる。薄い夜着を一枚纏っただけの少女が、ゆつくりと顔を上げて満尋を見た。小さな灯明皿に照らされた顔は、不安げな色を浮かべていた。

朔夜艶宴 3

満尋が目を覚ますと、いつもと違う天井が目に入り、一瞬ここはどこだったかと考える。まだ真夜中らしく、小さな窓からは暗い夜空が見える。そこから入ってくる冷えた空気に身震いすると、自分が糸纏わぬ姿で布団にいることに気がついた。暗い室内を手探りで探ると、すぐ隣に温かい滑らかなものが満尋に擦り寄っている。そこで、満尋は昨夜のことを明瞭に思い出したのである。

完全に酒が抜けた体で布団から抜け出すと、なんとか床に転がっていた眼鏡と火打石を見つけ出して、灯明皿に火をつける。その僅かな光に照らされた室内に、脱ぎ散らかされた二人分の着物と、満尋と同じく全裸の少女が映し出された。

なるべく少女から視線を外して己の衣を手繰り寄せ、いそいそと身に着ける。何が起こったかは、頭よりも気だるさが残る身体で理解していた。

酒の力と性に対する興味とで、満尋はこの娘を抱いたのだ。

薄っすら化粧をしていても、まだまだ幼さが残る少女は一体いくつくらいだろうか。もしかしたら、十五に満たない可能性もある。初めてというだけあって、彼女は始終緊張と不安で震えていた。集真藍には初めてだから優しくしろ、と言われたような気がするが、果たしてそのように扱えていただろうか。何しろ、満尋にとっても初めての女である。おまけに酒で思考が働いていなかったのだから、彼女には酷くしてしまったかもしれない。はあ、と深い溜息が零れる。今下に戻っても誰もいないだろう。同じように女と一緒にいるか、そうでないものは帰っているに違いない。再び溜息が零れ落ちた。その時は夢中であつたが、この後味の、ばつの悪さはなんだろう。心に残るものが何も無い、あれはただの作業であつたと、満尋は三度目の溜息をついたのである。

満尋の心情とは裏腹に、彼女はすやすやと安らかな眠りについて

いる。女にとって、初めてというのは特別なことだと聞いたことがあるが、この少女は自分で良かったのだろうか。少女の顔から視線を逸らすと、床の上に袋から飛び出した何かが、炎の光を反射して光っている。先の尖ったそれを拾い上げると、それは割れた何かの破片のようだった。

「なんだ？ 鏡、か？」

裏に表に引っくり返して観察すると、1センチもない厚みのそれは、光を反射したつるりとした面と、手の込んだ模様の施された面がある。手のひらにすっぽりと収まるそれは、もったいないことに割れた鏡の一部のようだった。

規則正しい寝息が途切れて、布団の中の少女がもぞりと起き上がる気配がする。反射で彼女の方を見ると、布団がずり落ちて満尋の目の前に、女の白い体が暗闇にぼんやりと浮かび上がった。少女は寝ぼけ眼で目を擦っているというのに、その妖艶さに体中の血が一気に駆け巡る。目を逸らしつつ無言で彼女の小袖を差し出すと、「きゅっ」と小さな声をあげて、彼女は満尋の手から衣を奪い取った。

満尋が背中を向けている後ろで、衣擦れの音が室内に響く。聞かないようにと念じていても、拾ってしまうのは男の性か。固く目を閉じて何か別のことを考えようと必死になっていると、「もう宜しいです」と声がかけられた。

振り向けば、少女は昨日部屋に入ったときと同じ表情をしていた。俯いて、唇を固く結んで震えている。いかにも男慣れしていない娘の有様に、満尋の方も困惑した。

「あ、その。……身体は大丈夫か？」

布団から出てこちらへ近づこうとする彼女を手で制し、「寝てていい」と声をかける。娘はそれに目を丸くして、「はい……」と蚊の鳴く様な声で答えると、また下を向いた。沈黙が小さな部屋を支配する。だんだん居心地が悪くなってくると、「すみません」と少女が消え入りそうな声で話し出した。

「お姉さま方から、女の身を案じてくれる殿方はいらっしやらないと聞いておりました。ですから、あのようなお言葉をかけて頂けるとは思ってもいなかったのです」

少女は恥ずかしそうに目を伏せる。それにしても、何故このように清純そうな娘がこの店にいるのだろうか。下で男たちに甘えていた女たちとは似ても似つかない。それとも、あと数年もすれば、彼女も集真藍のように婀娜な女になるのだろうか。

この大人しい娘はようらく璦珞と言うらしい。本名かどうかは分からない。遊郭の遊女のように源氏名かもしれない。自分も名乗ると、「満尋様」と呼ばれた。なんともくすぐったいものだ。すると、璦珞は「あ」と声をあげて何かを探し始めた。もしかして、と割れた鏡を差し出すと、ほっと綻んだ安堵した表情を見せてそれを受け取った。手鏡にしては危ないものを使っていると思っていると、璦珞はそれを紫色の袋に大切そうに仕舞った。

「これは母から譲り受けたものなのです。お守り代わりに持ち歩いています」

「……そうか。割れているみたいだけど、元からか？」

「ええ、母も初めから割れていたと申しておりました。でも、時々研ぎに出して綺麗に磨いて貰っていたようです」

璦珞はそれを袂に仕舞うと、膝について胡坐をかく満尋の隣にやってきた。ぎこちなく満尋の腕に手を回すと、薄闇でも分かるくらい真っ赤になった。女性経験の乏しい満尋にもこれは分かる。多分、誘っているのだろう。きつと、遊女としてお勤めを全うしようとしているのだ。しかし、触れている所為で、満尋の腕から璦珞の震えがはっきりと伝わってくる。全くその気にならない訳ではないが、こうも怯えられては敵わない。やんわりと手を離させると、彼女は泣き出しそうな顔をした。その顔が誰かに似ていて、満尋は刹那硬直する。すぐに気を取り直して、

「俺が初めて取った客なんだろ？ 無理しなくていいから……。時間が決まっているなら、それまで何か話して過ごしてもいいし……」

と、なるだけ優しい声音で話すと、璵瑤は安心したようにはにかなかった。

満尋と璵瑤は空が白み始めるまでぼつぼつと話をして過ごした。璵瑤はここに来る前は、各国を旅する歩き巫女として生計を立てていたそうだ。歩き巫女の中には遊女を兼ねた者もいたようだが、璵瑤の一行にはそのような側面は無かったらしい。そんな彼女が何故この店にいるのかは聞かなかったが、今各国が不安定な情勢の中、社会から弾かれてしまう者もいるのだろう。

朝日が昇り始めた頃に璵瑤と別れ、下の飯屋に降りる。すでに店主の男は店の支度を始めていた。満尋が声をかけると、もう金は払ってあるから支払いはいいい、と言う。朝餉を食べていくよう誘われたが、それは遠慮させてもらい明鵠寺へ戻った。

部屋へ戻ると、十壺がうんざりした顔で迎えてくれた。頭を押さえて、小声で話してくれと頼まれる。どうやら、二日酔いが酷いらしい。昨日戻ってきたのは、潰れた十壺を運んだ八弥丸と与市だけで、他は皆店に残ったのだそうだ。まだ戻ってきていないというから、店でゆっくりしているのだろう。

「どうでした？ 楽しんできたんでしょう？」

十壺の恨めしげな視線に苦笑する。寝こけていたのだからしょうがない。次があるなら、酒は飲まないことを勧めたい。

「顔洗ってくる」

満尋は詮索から逃れるために、新しい手拭いを持って井戸へ向かった。早朝の清しい空気が、昨夜の気だるい香りを払ってくれる。それでも少し、身体も心も緩んでいるから、宇木衛門が暇なら厳しい稽古でもつけてもらおう。いつもよりも静かな明鵠寺で、満尋はそう思った。

笑う三日月 1

はっと飛び起きれば辺りはまだ薄暗く、日も出ていない早朝なのだ判断する。満尋は汗ばむ夜着を脱ぎ捨てて、紺の小袖に腕を通した。相変わらず、寝覚めの悪い朝が続いている。ぐっすり眠れたのは、三日ほど前訪れた『春宵一刻堂』で過ごした夜くらいではなからうか。いや、あれも良く眠れた、とはいえない。満尋はがりがりと頭を搔くと、手拭いを持って井戸へ向かった。二度寝する時間はないので、少し早いが身支度を済ましてしまおう。

井戸の水を汲み上げて桶に水を張ると、ばしゃばしゃと顔を洗う。冷たい井戸水が満尋の体と心を一度リセットしてくれるのに一役買っていた。それから枝の先を叩いて、毛のようにしたものを歯ブラシ代わりに、歯を磨く。歯磨き粉には塩を使う。塩には浄化作用や抗菌作用があると言われているが、こんな所でも役立っている。

無言でごしごしと歯を磨いていると、手拭いを肩にかけた勘吉がやって来た。

「……はよ」

「ん……」

勘吉も水を汲んで顔を洗うと、そのまま満尋の隣で歯を磨き始めた。その間、まったく会話が無い。二人とも顔を合わせることも無く、黙々と手だけを動かす。普段、勘吉や二之助がじゃれついているだけに、この沈黙は中々に不気味であった。

満尋が口を漱いでさっぱりすると、まだ柳の枝を突っ込んだままの勘吉が口を開いた。満尋の方を見ることなく、視線はずっと桶に張った水へ向いている。

「……お前、魘されてたぞ」

ぺっと勘吉は地面に唾を吐き出すと、口を漱ぐ。満尋は隣に居る勘吉の顔を覗き見た。無表情だ。彼は最近こんな顔をするが多くなった。人一倍働いていた彼の表情筋が、全て死んでしまったか

のようだ。

「……それは、お前も起きてたってことだよな」
そう言い返せば、勘吉は疲れたように笑った。

「俺も眠れなくてな」

勘吉はぐつと伸びをすると、空を見上げたままポツリと呟く様に言った。

「こんなんで揺らいじまうなんてな。まだまだ覚悟が足らなかった。……そういうことなんだろうな」

覚悟か。満尋はその呟きを拾うと、そつと目を閉じた。確かに足りなかったかもしれない。与市も宇木衛門も、きつとこのことを言っていたのだろう。あの時は、大丈夫だと思っていた。それよりも置いていかれて、放り出されることの方がよっぽど怖かった。発見ばかりである。こんなにも自分の精神は弱く、未熟だったのだ。

「そうだな……」

「……さてと、戻ろうぜ。寝ぼすけの十壺でも起こさねえとな」

勘吉は寝ぼすけと言うが、まだ起きる時間ではないことに気付いているのだろうか。そう言えば、「どうせ、あいつも起きてるよ。

布団から出ないだけだ」と歩き出した。勘吉の言葉に満尋は頷くと、桶に残った水を草木に遣り井戸を後にする。皆まだ寝ているのか、長屋の廊下は二人の足音しかない。黒光りする縁の床板をできるだけ静かに歩いて部屋へ戻れば、勘吉の言うとおりの十壺が長い髪を梳いていた。

「お帰りなさい。二人とも早いんですねえ」

「お早う。……布団片付けておいてくれたのか」

出しゃばりなだった満尋の布団が、綺麗に片付けられているのを見て礼を言うと、どういたしましてと、十壺は微笑んだ。

「では、あたしも顔を洗ってきましようかねえ」

丁寧な動作で箱に櫛を仕舞うと、十壺は入れ違いに部屋を出て行った。そういえば、十壺がゆっくりと髪を梳くのを見るのは、久しぶりのような気がする。彼の毎朝の日課であったのに、なんだか懐

かしいような景色に思えるのは何故だろう。満尋が彼の後姿を目で追うと、同じく十壺を目で追っていた勘吉と視線がぶつかった。どうやら、勘吉も満尋と同じ気持ちで見ていたらしい。

「二之助と新左衛門もさあ、昨日は随分と元気そうにしていたな」
「ああ。六郎も、もう普段通りにしていいと言っていた」

ずっと体調を崩していた二人も、昨日は随分と顔色も良く、何度も嘔吐を繰り返すことはなくなっていた。昨日、二之助の部屋から出てきた六郎に、二人の様子を尋ねてみれば、

「でーじよぶだ。心配しねーでも、明日っからふつーの飯食えんよ。薬も、もう飲まねえでへーきだ」

と、言っていたから安心だ。二人ともずっと部屋で粥ばかり食べていたから、濃い味に飢えていると話していた。

「お？　じゃあ、後で朝餉に誘ってみるか！」

勘吉はそう言うのと、板敷きの床の上に仰向けに寝転がった。欠伸をかみ殺しているから、まだ眠いのだろう。

「布団があつたらまた寝ただろ、お前」

「あ？」

満尋が腰を下ろして壁に寄りかかると、勘吉は天井を見たまま口を開いた。

「お前さあ、ここを出たりは……しねえよなあ」

一人で話し出した勘吉は、満尋に話しかけたにも拘らず、納得したのか一人頷いている。意味が分からずに、「は？」と聞き返せば、「なんでもねえよ」と満尋に背を向けた。手持ち無沙汰になった満尋は、自分の荷物を置いてある場所から本を引っ張り出して、それを読み始めることにした。京太郎から借りたものだが、早く読みきって返さねばなるまい。まだ薄暗いが、明かりを灯すほどではないだろうと、そのまま本を開く。どこまで読んでいたか、とばらばら頁を捲っていると勘吉がごろりと寝返りを打った。

「この間お前が上に消えてからさあ——」

勘吉が言うこの間とはいつのことか、と満尋は頭を巡らせると、

『春宵一刻堂』の時かと合点が行った。あの時、自分だけ店の集真あつ藍さいに連れられて二階に行ったはずだ。その後の席の話をしているのだろう。満尋は頁を捲る手を止めて勘吉を見た。勘吉はまたごろりと寝返りを打って満尋に背を向ける。

「あの時、先輩の一人が言ってたんだよな。最初の仕事で結構止めていくヤツが多いってよ。だから、おめーらも気張れよ、みたいなこと言われた」

満尋は「そうか」とだけ言うと、そっと戸の方へ意識を向けた。そういえば、彼もその話は聞いていないはずだ。満尋は戸に向かって呼びかけた。

「入ったらどうだ。十壺」

すらり、と部屋の戸が開いて、バツの悪そうな十壺が顔を出した。勘吉は半分だけ身体を起こすと、「早いな」と目を丸くした。十壺はそれに苦笑して、「忘れ物です」と答えた。

「すみません。盗み聞きのもりは無かったんですけどね」

「別にいいさ。秘密事って話でもないしな。……お前はあの場で耳にしていると思ってたが」

「酔い潰れていたな……」と、勘吉は苦笑いをする。満尋も釣られて口元を歪めると、十壺は眉を顰めた。彼はそのまま勘吉を跨いで自分の荷物を漁ると、忘れ物を取り出してまた彼を跨いで戻る。

「おい」と零した勘吉を綺麗に無視して、

「そろそろ皆起きてきましたよ。あんまりゴロゴロしていると、逆に遅れてしまいますよ」

と、言って部屋を後にした。それを聞いて勘吉はしぶしぶ起き上がり、満尋も結局数頁も読めなかった本を置く。話が中途になってしまったが、それはまた時間のある時でいいだろう。なんとなく、朝の慌しい時間の中で語り合う様な内容では無い気がした。

勘吉は隣の二之助に突撃をかけると言って部屋を出て行った。二之助と同室の主膳が怒らなければ良いが、と思っていると、ややあって主膳が声を荒げるのが満尋の耳に聞こえてきた。少しずつ、満

尋の日常が戻り始めていた。

笑う三日月 2

秋の空にチチョーチチョーと囀る鳥の鳴き声が響き渡る。その変わった鳴き声に、あれはなんだ、と尋ねれば、小雀コガラが鳴いているのだと返事が返ってきた。いつも番つがいで行動し、夜も共に眠るのだとか。「あのように、一羽きりで鳴いているのを聞くと、なんとも物悲しくなります」と、十壺は小雀がいるであろう木の枝を仰ぎ見た。

満尋と勘吉、十壺は明鵠寺の門前の掃除をしていた。二、三日仕事を休みにする、と言われたが、一週間ばかり経った今でも満尋たちに仕事が行われることは無い。そのため、やる事といえば当番の家事や、自主練くらいしかないのである。しかし、満尋はそれも仕方がないと思っていた。挟河さかわや帖はけもと許へ出ていた者たちが帰ってきてから、？衆は何かと忙しい。その為満尋たち新人にまで手が回らないのだ。もう子どもではないし、各自自分たちでやってくれ、といった感じだ。それもこれも、まだ自分たちが賊退治の仕事を引き摺っている所為だと、満尋は自分自身に落胆するのであった。

掃き集めた落ち葉を一所に纏めると、こんもりと大きな山になった。明鵠寺は山の中にあるため、落ち葉の量がとにかく多い。毎日誰かしら掃いているのにこれだけ溜まるのだから、暫く放って置いたらここはすぐに埋まってしまうのではないかと疑うほどだ。今はまだ九月に入ったばかりだが、おそらくここは陰暦なので、現代では十月くらいにあたる筈だ。まだまだ、落ち葉のシーズンは続きそうである。

このぐらいでいいだろう、と三人は鋤すきで適当な所に穴を掘った。そこに落ち葉を埋めるためである。汗だくになりながら一メートルくらいの深さまで掘ると、掃いた落ち葉をどんどん落としていく。後は燃やすだけだ。

満尋は腰に下げた袋から火打石を取り出して、鋤先の鋼の部分でカチカチと打ち鳴らす。火花が火口ほぐちに燃え移ったら、付け木を押し

付けて火が出るのを待った。これも初めのうちは中々点けられなかったが、今では手馴れたものだ。この世界の当たり前が、徐々に自分の中に浸透しているのを満尋は感じていた。それに気づいた時は、戸惑いもあったが、生死に関わるのだと自分を納得させた。そして今は、それほど戸惑いは無い。むしろ、出来る事が増えて嬉しいくらいだ。

満尋が火をつけている間に、二人は消火用の水を汲んできたようだ。ようやく付け木に燃え移った火を落ち葉の中へ放り投げると、じわじわと炎が大きくなり濛濛と煙をあげた。炎で落ち葉が変形していくのを黙って見てみると、不意に勘吉が「今朝の話だけどさ……」と口を開いた。

「俺は残るよ。ここ以外、行く所が無いからな」

満尋は言い難そうな勘吉に先手を打つ。実際、ここを出てもまともに働かせて貰えるかどうかは分からない。皆が皆、宇木衛門のように、身元不明の世間知らずを内に入れたりはしないのだ。そう考えると、本当に？衆の頭は器のかい男だと満尋は思う。

「正直、人を殺すことには抵抗がある。……俺のいた所では、どんな理由であれ人を殺せば大罪で、もう普通の生活に戻れることは無かったから……」

そう言って満尋ははっとする。現代のことを、こうして二人に話すのは初めてではないだろうか。勘吉には一度だけ、学校や子どもの頃の遊びについて話したことはあるが、改めて自分から話題にあげるのは多分初めてである。今までは、どこの国から来たんだ、と問われるのが怖くて、できるだけ避けていた話であったが、二人になら異世界から来た、と打ち明けてもいいような気がした。

「へえ、どんな理由でもね。んじゃ、戦の時はどうすんだ。それはまた別の話か？」

勘吉が珍しそうに聞いてくる。十壺も興味津々だと目が言っていた。

「いや。戦は無かった」

すると、二人は豆鉄砲を食らった鳩のような顔をした。きっと驚くだろうとは思ったが、予想以上の反応で満尋は小さく噴出す。

「それは、また、はあ。……このご時世に、まあ。平らかな国なんですねえ」

「戦が無いって、あるのか本当にそんなところ。もったいねえ。なんでそんな国飛び出して出てきちゃったんだよ、お前は」

本当に何故だろうか。それは満尋にも分からない。なんて答えようか、と言葉に詰まっていると、勘吉が青ざめた表情で満尋から一歩下がった。

「まさか……お前。国で何事かをやらかして、追放されたのか？ 流刑か!？」

「それは無い」

これだけはハッキリと言い切ることができる。自分は何も、異世界に飛ばされるようなことはしていない。普通に、本当に普通に生きてきたはずだ。警察に捕まるようなことは一度も無いし、人道から外れるようなこともやっていない。この世界に来てもう二ヶ月近いが、未だに何故自分なのだと満尋自身思っているのだ。

「……気がついたら、神隠しに遭ってた。だな」

自分の身に何があったかを的確に表すなら神隠しだろう。拉致でもない、追放でもない。何か、人智の及ばぬ超常現象に、満尋は勾か引どわかされたのだ。「神隠しねえ」と勘吉は吐き出した。しかし、二人はそれを別の解釈で捉えたらしい。人の手によるものを、満尋が比喻で神隠しに当てはめたと思ったようだ。「それじゃあ、帰り難いよな」と、見当違いな返事をよこす。

「それでも本当にいいのですか？ 人を手に掛けるのは罪なのでしよう？」

「いいんだ。たぶん、もう帰れることはないだろうし。それに一人殺すも二人殺すも同じっていうか……。いや、同じじゃないけど、もうやってしまった事は変わらないだろ」

今帰れたとしても、今まで通りに友達や家族と笑い合えるかは分

からない。現代は平和で、とても甘くて優しい世界だ。そして、どこか空想的な世界でもあると今なら思える。友人たちがこぞって言う、「死ねよ」や「殺すぞ」といったジョークを、もう一緒に笑うことは出来ない。満尋は確信していた。

「そうですか。しかし、最初の頃のあなたを見ると、大分暮らし向きの異なる国のようなですから、苦勞は絶えないでしょう。あたしも同室の好^{よしみ}として力を貸しますよ」

「おう！」

「……ありがとう」

十壺の優しい言葉と、勘吉の力強い賛同に満尋ははにかんだ。それならば、満尋も二人の為に、どんな些細な事にも力を貸そうと思った。助けられてばかりではいけない。同室の好だ。

「と、いう事はだ。お前も残るんだな？ 十壺」

にやり、と勘吉が笑えば、十壺は艶やかな笑みを浮かべた。

「ええ、勿論。行く所が無いのはあたしも同じです」

そう答えた十壺には、？衆として生きていく確固たる自信と決意に溢れていた。行く所がない、というのは、彼にとってマイナスではないらしい。それはただ彼を取り巻く状況の一つであって、選択の理由ではないと、十壺の表情が強く主張していた。

そこには、女性的で柔らかな印象の少年はいない。十壺から感じられるのは、覚悟を決めた男の姿であった。

笑う三日月 3

景気良く燃える落ち葉を見ながら、十壺は「あたしの名前ですけれど……」と徐に口にした。それが今までの話とどう繋がるかと、満尋は首を傾げる。勘吉に至っては「は？」と声に出していた。

「名前の通りであたし、十一男なんですよねえ」

これには満尋も「はあ!？」と驚きの声をあげた。ナンとは子どもの数の男なんだろうか。三男、四男くらいまでなら普通に聞いたことがあるが、十一とは。しかも、姉妹を除いているのだから、一体十壺は何人兄弟なのだ。しかし、核家族化が進んだ現代では吃驚する数字でも、ここでは有り触れた家族構成なのかもしれない。満尋が目を見張っていると、勘吉も、

「お前んち、でかい家だったんだな」

と、感心していた。やはり、ここでも大家族に代わりは無いらしい。ちなみに、勘吉は六人兄弟の次男だそう。特に珍しくも無い人数だそうだが、それでも多いと感じてしまうのは、平成生まれではしやうがないのだろうか。横道に逸れると理解しつつも、興味が勝つて何人兄弟なのか聞いてみたら、男十一人、女四人の十五人兄弟だった。当然一人の母親からそんな人数が生まれるわけもなく、半分は愛人が生んだ腹違いの兄弟らしい。

「それで、父が死んだ時に長兄と一悶着ありましてね」

算術が得意で、教養もある十壺は、確か商家の生まれだったはずだ。満尋はなんとなくその一悶着というのが想像できてしまった。

「跡取り問題か？」

十壺は「ええ」と笑顔で肯定した。

「あたしは目掛けの子ですから」

十壺はなんでもない様に笑うが、かなり複雑な家庭事情なのは窺い知れる。本妻の子と妾の子が同等に扱われるとは思えない。きつと子ども時代も苦労しただろう。

それにしても、店の跡取りというのは、普通長男が継ぐのではないのだろうか。十一番目、加えて妾の子である十壺まで回ってきそうにないと思うのだが。

「商いの才が無い者に、店は継げません。あたしの家はそれなりに大きな店を持っていましたし、兄はその辺りがどうも……」

満尋の疑問を感じ取ったのか、十壺ははっきりとそう答えた。兄の出来栄えについては流石に茶を濁したが、良くは無いであろう。大きな店の切り盛りというのは、人と人との駆け引きでもあるのだ。商いとは心理戦である。仕入先や客に足元を見られるようでは、やっていけない。それだけではない。市井のニーズを逸早く感じ取り、流行として発信する能力も必要である。後手後手では売れるものも売れないのだ。

「才能ありきなので、本来実の子には継がせないんですけど、あたしに白羽の矢が立ったものですから、それならば自分もと、兄が名乗りをあげたのですよ」

厳しい世界である。息子に必ずしも才能が受け継がれているとは限らないから、商家は養子をとってその子に継がせるか、有能な男を娘の婿にさせるとというのが一般的らしい。満尋が初め思ったように、生まれた順番で長男に継がせるというのは、彼らにとって馬鹿馬鹿しい話なのだろう。十壺の父親も入り婿だというから、実際に十壺のように、実子に声が掛かるというのは極めて稀なケースらしい。

「お前、認められてたんだろ？　なんで継がないでここにいんだよ」勘吉が最もな質問をすると、

「嫌ですよ。あちらさんの兄たちから、妬み嫉みを一身に受けるだなんて。そもそもあたしは継ぐ気なんて、さらさらありませんでしたからね」

と、しれっと言い放つ。その潔さに満尋は思わず苦笑してしまった。二ヶ月共同生活をして分かったが、十壺は意外と損得で動く男だ。大店の当主という地位を手に入れるのと、兄弟から嫉妬の目を向け

られるのを天秤に掛けたのだろう。極めて商人らしい考え方だが、結局彼はここに居るのだ。当主になる得よりも嫉妬で被る損の方が、彼の中では比重が大きかったらしい。では、今実家はどうなっているのだ、と尋ねれば、十壺は「さあ？」と関心がないのか、どうでもよさ気に返事をした。

「たぶん今まで通り、姉か妹の婿に継がせるのではないでしょう。もう家を出た後のことなので、分かりませんが」

それでも、本当に未練はないのだろうか。彼は？衆として血生臭く生きるよりも、店にいて算盤を弾いたり、商談をしたりという方が似合っていると満尋は思う。しかし、彼の心は固く決まっているらしい。きっぱりと、戻るつもりはなく、ここで立派な傭兵になるのだと言った。

「そうか。じゃあ、十壺。改めて……、よろしく」

満尋はそう言っただけで自分の右手を差し出した。握手のつもりだったのだが、十壺は意味が分からなかったのか、彼の右手と顔とを見比べている。そこで、ああ、握手の習慣が無いのか、と思い至った満尋は、十壺の手を取って自分の手を握らせた。

「握手だ。挨拶の時はこうする」

「あく、しゅ、ですか。なるほど。ええ、よろしくお願いします」

二人固く手を握れば、新しい関係が築かれたような気がした。友達でもない、ルームメイトでもない。命を預けあう仲間、たとえば格好良過ぎるだろうか。しかし、これから先何度となく、満尋たちは危険に晒されるだろう。だったら、格好良過ぎてもそれでいい。必要なのだから。

「おいおい、俺だけ仲間外れか？ 混ぜてくれよー」

二人の握手を面白そうに見ていた勘吉が、自分もと両手を差し出して来る。子どもですか、と十壺がその手をピシリと払い落とすと、「いてー」と大げさに手のひらを振って見せた。

「分かってるよ。最後は俺だろ？ 俺だけ話さないなんて、なんか格好悪いもんな」

勘吉はずっと持ち続けていた鋤の取ってに寄りかかる。

「俺もな、？衆の先輩に拾われたんだよ。満尋と同じだな」

勘吉はにかつとした笑みを浮かべると、そのままずっと無表情になった。視線の先には、灰になった落ち葉の残骸がある。勘吉は桶の中の水を、思い切りその穴の中へぶちまけた。じゅわつと音を立てて、穴から白い蒸気が立ち上った。

チチヨーチチヨーと小雀こがらの声がまた響き渡る。十壺の言うように、一人が寂しい、と鳴いているのだろうか。

笑う三日月 3 (後書き)

※目掛け

めかけ。【妾】の字はもともと【目掛け】の当て字だそうですので、満尋以外では【目掛け】と表記します。

笑う三日月 4

「俺の生まれた里は？呉の南の端っこにあってよ。馬の産地だった」
そう話す勘吉はどこか遠くを見ている。きつと故郷を思い出しているのだろう。とても穏やかな顔をしていた。

里は山に囲まれた温暖な気候に恵まれ、そこでは馬も人も伸び伸びと暮らしていた、と勘吉は言った。特に名馬が多く生まれると、国内外で有名な里だったそうだ。平地では何頭もの馬たちが駆け回り、多くの国から使者がやってきては、献上する馬の下見に来ていたそうだ。

「昔『小夜嵐』^{こやあらし} っていう青毛の駿馬がいて、その子孫たちが里の宝だったんだ」

青毛というのは真っ黒な毛を持つ馬のことだ。厩を担当していた男が、青毛は中々生まれないと話していたのを聞いたことがある。実際？衆の厩には、黒鹿毛はいても青毛の馬はいなかったはずだ。珍しい毛色で足も速いとくれば、それは人気だっただろう。

「俺はその小夜嵐の子の孫の……とにかく、子孫の馬を連れて里を離れたんだ。そいつを？呉の偉いお方に献上するためにな。離れていたのは、十日ばかりだったか？ まあ、そんな長い間じゃなかった。けどよ、その短い間だったぜ……」

？呉の城下に向かう途中。勘吉は立ち寄った茶屋でとある噂を耳にした。団子を頼み、丁度一心地着いた時分だった。なんでも、ある里に殿様が兵を出すように指示をしたらしい。話をしているのは、笠を被り、山越えをしてきたばかりだという男と店の主人だった。笠の男は墨染めの衣に白い脚半、手甲をつけた姿で行脚僧と見える。その僧がさらに、何故兵が出されたのかという話を始めた。

その里の乙名が、反馬の国の領主から制札を受け取った、というものらしい。その制札の内容に関しては、乱防狼藉事、田畠取荒事、諸事百姓に対し申し懸け停止という有り触れたものであったらしい

が、それが？呉の領主に知られてしまったから大事である、と。

「制札って確か、戦争中、敵国にお願いして貰うやつだよな？」

以前読んだ歴史小説では、確かそんな風に書かれていたと記憶を頼りに言えば、「まあ、そうだな」と勘吉は笑った。満尋の国がこの常識とかけ離れていると信じた二人は、もう以前のように彼の質問に驚いたり、笑ったりはしない。

「敵国とは限らないですけどね。まあ、お願いするのは結局同じですから変わりませんけれど」

十壺がそう言うように、自国の領主でも他国の領主でもどちらでも良いのだろう。村や里の安全を保障してくれとお願いするのだから。しかし、敵国にそれを貰うとなるとそれは裏取引のようなものだ。田畑や村を荒らさない代わりに、支援を要求されることもあるだろう。それが自国の領主の耳に入れば、そちらから攻められる可能性があるのだ。

「？呉の領主に知られちゃって、正直自業自得だとその時は思ったな。実際反馬とは戦はしていないわけだから、先手を討とうとしている反馬に取り入って、そいつらだけ抜け駆けしようってことだろ？それで俺は興味も削がれて、その茶屋を後にしようとしたんだ」

結局それは叶わなかったけどな、と勘吉は寂しそうに呟いた。

僧の話はさらに続いた。その里は米、金などを反馬に渡しているだけでなく、駿馬も次々と貢物として納めている、と。勘吉はそれを聞いて嫌な予感がした。慌てて僧にその里はどここの里だと聞いてみる。只事ではない様子の勘吉にも、その僧は狼狽することも無く言ったそうだ。南の端の名馬の里だ、と。

「それで、俺はすぐに里へ引き返すつもりだった。俺はそんな、制札貰ったなんて聞いてないからな。それこそ、牽いてる馬に乗って里の奴らに知らせねえと、そう思った」

しかし、その僧が青ざめた勘吉に待ったを掛けた。勘吉から事情を聞けば、そんならこのまま領主の下へ行き、それは間違いだと言った方が早い。そう諭したのだ。そして、勘吉は城下への道を急

いた。

「でも、結局間に合わなかった。俺が城下に着いた頃には、里の制圧は滞りなく終わったとかの給いやがった。里に帰れば誰も居なくてさ。馬小屋も全部空、皆血溜まりの中に倒れてたよ。」

全員供養した後は、何をする気にもなれなくて、あちこちをぶらぶらと風みたいに彷徨ってた。時々どうしようもない怒りが湧いてきても、国に一人啖呵切る度胸なんて無くてな。そんな時、？衆に声を掛けてもらったんだ」

勘吉はざくざくと灰になった落ち葉の上に土を被せていく。口調は明るいが、一心不乱に鋤を動かす手に、勘吉はまだ戦っているのだと満尋は感じた。満尋も勘吉の隣で穴に土を投げていく。里の者が皆、というなら、勘吉の家族や以前懐かしそうに話していた幼馴染も、きつと亡くなったのだろう。家族や友人に会えないのは満尋も同じであるが、果たしてそれは勘吉と同じ悲しみであろうかという、それは違うような気がした。

「この間さ、俺たち殺しただろ？ 人を」

手を動かしながら、勘吉は徐に話し出す。満尋はその中身に苦い顔をした。日常会話でぽろっと出てくるような話題ではない。しかし、足元を見ている勘吉には満尋のその表情は見えなかったようだ。構わずに続ける。

「あの時さ、思ったんだよ。俺もやってることは春日部の兵たちと変わんねえ。同じもんに堕ちちまうのかって、ずっと思ってる」

「同じではありません。あいつらは悪党でした。良民を虐殺した彼らとは違う」

強く言い切る十壺に勘吉は、ははは、と笑う。悪党であればいいのか、と満尋は自問してみたが、無駄なことだと答えが出る前に考えることを止めた。どんな大層な理由であれ、やらかした言い訳にしか聞こえないからだ。勘吉はどう思ったのか分からないが、そうだ、と同意することはしなかった。

「……よく分からないけど、同じになるもんかってずっと思っ

ばいいんじゃないか？」

これからも、ずっとこの間のような仕事は回ってくる。悪党だから殺しても良かった、と自分を納得させることだけはしたくなかった。？衆にいる限り、どんなに重くても、どんな命も背負っていい、と満尋は思っている。きっと、また夢で魘されるかもしれないが、それも覚悟の上だ。

満尋の言葉に勘吉はしばし瞠目した。それから、「お前ってほんと、変」と満尋の頭をぐしゃぐしゃと撫ぜた。十壺もその様子を見て笑っている。微笑ましく見えるのかもしれないが、かなり力がかけられているのに気付いて欲しい。背が縮みそうだ。

「よし！ 切りの無い掃き掃除も終わったことだし、やることは一つだな！」

満尋の頭を撫ぜるのに満足したのか、勘吉は鋤を肩に担いだ。勘吉の言うとおり、足元の穴はすっかり塞がった。ちよつと色が違うことを除けば、元通りである。

「やること？ なんですか、それ？」

「夕餉の仕度は俺たちじゃないし、風呂焚きか？」

もうやる事も無いとのんびりしようと思っていたが、まだ何かあっただろうか。心当たりの無い二人に、勘吉は太陽のような笑みを浮かべた。

「ばあーか。頭んどこに仕事を貰いに行くんだよ」

勘吉はそう言って、泥だらけのまま宇木衛門の方丈庵へと走り出した。満尋は十壺と顔を見合わせると、笑いあった後すぐに勘吉の後を追う。

その後、廊下が砂だらけだ、と京太郎からきつい説教を食らったのはまた別の話である。

十日夜月に想う 1

満尋が伊月と再び『影映り』で再会できたのは、満月まで後五、六日という頃であった。それまでは、夜間に仕事が入ったり、夜の鍛錬に付き合わされたり、と中々自分の時間を取れず、ようやく今夜、池の前に立つことができたのだ。

最後に声を聞いてから、約二週間近く過ぎてている。満尋は少し緊張した面持ちで『月夜里^{やました}』の伊月に呼びかけた。特別約束をしていた訳では無いので、伊月の都合次第では会えないかもしれない。しかし、池の水面は無風の中不自然に揺らめき、『影映り』が上手くいったことを示していた。

水面に映った彼女は、しばらく辺りをキョロキョロと見回した後、満尋と目が合って花が咲いたように笑う。満尋はその顔に安堵すると、「久しぶり」と声を掛けた。

「久しぶり。元気だった？」

「ああ。そっちは？」

「もっちゃん。元気一杯だよ」

そう笑顔で話す伊月には、一切の翳りも無く、本当に元気そうだ。満尋の記憶に残る伊月とピタリ一致して、嬉しい気持ちで心が満たされる。満尋も顔を綻ばせていると、「よかった」と呟く声が耳に届いた。伊月は聞かせるつもりで口にしたのではないのだろう。もしかしたら、自分でも口にした覚えは無いのかもしれない。だからこそ、ずっと抱えていた荷物を下ろした様な、ほっと安心した、という響きがその一言に込められていた。満尋は、何に対しての「よかった」なのか分からずに首をひねる。何か、『影映り』ができなかった間に憂い事でもあったのだろうか、と思いを巡らしてみるのが、これだと思ふものは出てこなかった。「何がよかったんだ？」と伊月に尋ねえみれば、彼女は「へ？」と気の抜けた返事を返す。やはり、伊月は声に出したつもりは無かったらしい。

「さつき。こっちを見て、よかった、って呟いただろ」

「え？ あ、私口に出してた？ ……大した事じゃないよ。ただ、満尋が笑ってるから……よかったなって、思ってた……」

尻すぼみになっていく伊月の言葉に、満尋は呆氣に取られた。伊月の答えでは、謎が謎を呼ぶというか、深まるというか、とにかくなんの疑問の解決にはならない。

（俺が、笑ってるから？ よかった？ なんで……？）

伊月は自分の言った事に少し照れくさくなったのか、少し頬を赤らめて口を尖らせた。

「だって、今だから言っちゃうけど、前はすごい顔色してたよ」

その言葉で満尋はようやく合点がいった。思い当たることがかなりある。苦笑して「それは悪かったな」と返した。

最後に伊月と顔を合わせたのは、賊退治の夜だった。あの日は、初めて見た人間の死体に気分も悪く、山の中を歩き回った肉体以上に精神の方が疲れていた。鏡を持っていないので、自分の顔色なんて分からないが、？衆の面々から氣遣われるくらいだったのだから、相当悪かったはずだ。さらに、声だけだった前回に至っては、はっきり言って何を喋ったか覚えていないくらい放心状態だった。満尋は片手で眼鏡の上から顔を覆うと、伊月に分からないように溜息をついた。まったく自分の弱い所ばかり見せている。指の隙間から伊月を垣間見れば、満尋の言葉を待っているのか、小首を傾げてこちらを見ていた。よく、まだ自分と『影映り』をする氣が起きているものだ、と満尋は思う。こんなに男の弱い姿を見て、幻滅はしなかったのだろうか。

「あの時は……ちよっと、仕事で疲れていて……。態度悪かったな。ごめん」

できるだけ、なんでもない風を装えば、不自然に口元が引きつっているのがよく分かる。嘘は吐いていないが、どうも誤魔化そうとしている氣がして、満尋は後ろめたい氣持ちになった。

「そっか。えっと、お仕事ご苦勞様？ 満尋は体使ってるもんね」

「まあな。そんな酷い顔だったか？」

「誰にも言われなかった？ この前なんか、あ、声だけの日ね。事故起こしたって家族に電話してるみたいだったよ？」

伊月はからからと笑っているが、満尋は汗がたたり、と流れるのを感じた。冗談だと分かっているが、笑えない。時々妙に敏い所を見せる伊月は、今回も驚くほどの的を射ていた。笑って返せたらよかったのに、満尋の口からは「え」とか「いや」など、単語にもならない言葉しか出てこなかった。

「それくらい酷いテンションだったってこと！」

伊月がそう締めくくれば、「そうか」とこの話は終わることができた。

一息ついた頃、伊月は徐に満尋に向かって言った。

「満尋、私やっぱり諦めないよ。元の世界へ帰る方法、絶対見つけてみせるから」

唐突なようにも思えるが、満尋は自然な流れでその言葉を受け取った。この命題はおそらく、現代からこの世界にやってきた満尋と伊月が、一生向き合わなくてはならない問題であるからだ。

しかし、こうして満尋に言うとは、何か思う所でもあったのだろうか。伊月の目は決意に満ちている。以前満尋は、元の世界に戻ることに關して期待するな、と彼女に仄めかしたが、改めて伊月は意思を固めたいらしい。満尋の意見を否定した形になるが、それも伊月らしいと満尋は思った。

「……そうか。分かった。そこまで言うなら、やってみろ。俺も、もうあんな悲觀的なことは言わないさ」

どうせ、止めろと言ったところで聞かないだろう。自分で決めることの大切さは、満尋にも良く分かったのだ。人に言われたくらいでは揺らがないのは、満尋も承知だ。きっと家族に言われたって、こうして決めたことは変わらないだろう。だったら、満尋のできることは一つだ。満尋の言葉に、伊月は瞳に込めた光を柔らかくさせた。

「だからね。もし、私が帰る方法見つけたら、その時は一緒に帰ろうね」

伊月はまさに全開の笑顔で満尋に笑いかける。満尋は、

「まあ、頑張れよ」

としか返さなかった。

満尋の中で、元の世界へ帰りたいという気持ちは希薄になりつつある。伊月ほどの情熱は、もう満尋の中には無いのだ。その言葉をもっと早くに聞いていれば、と思いながら、それでも自分は希望を持てたのだろうか疑問にも思う。元々諦めるのが早い自分の性格だ。見込みが無いと分かってしまえば、そこで興味も情熱も全て冷めてしまうのである。まさか、元の世界に帰るといふ人生の一大事でも、自分のその性格が発揮されるとは満尋も思わなかったが。なんのてらいも無く「頑張る」と言う伊月が、満尋にはとても眩しくて、霞んで見えた。

十日夜月に想う 2

久しぶりの『影映り』は丁度一刻と半分ほど、三時間くらいで終わった。いつもよりも随分話し込んでいたことに満尋はぎよつとすると、急いで伊月を帰して冷たい池の水をそつと撫でた。自分は彼女を送ることができないのだ。暗い夜道で何かあっても責任が取れない。そのことを少し齒痒く思いながら、池に何も映らないのを確認すると、満尋は自室へ戻るため踵を返した。

長屋へ戻る帰り道、ふと満尋は人の気配を遠くに感じて立ち止まる。それはほとんど勘に近いようなものだったが、それも少し近づけば確かに、何やら話し声のようなものが満尋の元まで微かに届いていた。鋭敏な満尋だからこそ聞き取れたその声に警戒し、残りも少ない灯明皿の明かりを吹き消すと、そつとその声の元まで忍び寄る。とはいえ、流石に真っ暗な中を歩いていくのは難しく、途中壁や段差に気を取られながら近づいて行つた。一つ長屋の角を曲がつた先には宇木衛門の方丈庵がある。微かに聞こえる人の声は、その方丈からであった。

（なんだ。宇木衛門か……）

満尋はそう結論付けると長屋と方丈を繋ぐ廊下へ上がり、そのまま自分の部屋へ戻ろうとした。きつと、衆徒の誰かと話をしているのであろう。こんな遅くまで仕事の話でもしているのだろうか、と満尋は宇木衛門の多忙さに舌を巻くと、低い宇木衛門の声に混じつて、高い女の声ができるのに足を止めた。え、と振り向くが、渡り廊下からでは当然彼らの姿を見ることはできない。この男だらけの？衆で何故女性の声ができるのであろうか。満尋は無粋と知りつつも、話し声に惹かれるように方丈庵へ足を踏み入れた。

縁をゆつくりと、今までにないくらいの慎重さで歩いていくと、満尋はそつと角から顔を出した。南側に引き戸がある造りなので、流石に部屋の正面を通れば気付かれると思ったからだ。しかし、宇

本衛門の声はさらにその奥。もう一つ角を曲がった、東側の小口から聞こえるようだった。

何度も報告へこの方丈庵に来ている満尋だが、東側がどうなっているのかは彼も知らない。宇木衛門はどうやら、部屋の中ではなく外で話しているようなので、引き戸の前を遠慮なく通り過ぎて、再び角から顔を覗かせた。

縁に腰掛けた宇木衛門は、満尋同様夜着を着流していた。しかし、彼以外女はおろか、衆徒の一人もない。自然をぎゅっと閉じ込めたような小さな日本庭園を、宇木衛門はじっと見詰めていた。

「今日はだんまりですね」

一瞬、風の声かと疑うような囁きが静寂の中を通り過ぎていった。話し相手の女の声である。満尋は息を吞んで宇木衛門の背中を見てみると、ふっと彼が笑ったような気配がした。

「そうでもない。少し、外に気を遣っていたただけだ。放ったらかして怒っているのか？」

宇木衛門がそう揶揄して言えば、「まあ」と、女がころろと笑う。声の感じから相手はまだ若いような気がする。しかし、伊月ほど幼くはないような気がした。

満尋はそのまま振り向かずには後退した。女が何処にいるのか分からないが、間違いなく姉や妹といった雰囲気ではない。普段の宇木衛門からは想像できないような、しっとりとした甘さが言葉に含まれているのだ。自分が聞いていて良い話ではない。

「最近妹が気を尖らせているの。貴方と話していると知れたら、きっとあの子は泣くんでしょうね」

「……妹か。紫、俺の言えた義理じゃないが、大事にしろよ。お前を心配しての諫め言だ」

女の名は紫というらしい。それから二人は一言二言話していたが、ぱしょんと水の跳ねる音で会話が途切れてしまった。

「ちっ。もう終わりか……」

宇木衛門の呟きと共に、ぎし、と板の鳴る音がする。その瞬間、

満尋の中ではっと全てが繋がった。姿の見えない声、水の音、そして宇木衛門が先程零した言葉。

（『影映り』だ……）

ついさっきまで自分もしていたというのに、何故すぐに思いつかなかったのだろうか。自分以外の人間で、まさか『月夜里』と遣り取りをしている者がいるとは、考えもしなかったのだ。なるほど、とすっきり合点がいくと、ずっと満尋の目の前に黒い影が覆いかぶさった。

「で、お前は何をしているんだ？ 満尋？」

すぐ後ろからどすの利いた声が掛けられると、満尋は思わず飛び上がった。口から心臓が出たのではないか。満尋がそう思うほど右の鼓動がばくばくと音を上げている。胸を押さえて振り向けば、声とは裏腹に笑みを浮かべた宇木衛門が真後ろに立っていた。しかし、その笑みは凶悪なほど意地の悪いものだったが。

「ど、して。後ろから……？」

満尋がそう呟けば、「なんでだろうな？」と宇木衛門は口元を歪ませた。未だ煩い心臓をなんとか落ち着かせようと深呼吸すると、彼はさらに笑みを深める。満尋は後ろ、つまり少し前まで自分が覗き見ていた東の小口に顔を出す、なんのからくりがあるわけでもない。ただ、左に折れた縁を見ると、

「……回り込んだだけ、ですね」

と、肩を落とした。くく、と宇木衛門は笑いを噛み締め、

「随分といい趣味を持っているじゃないか。俺とあいつの逢瀬を盗み見するとはな」

と、頭半分低い満尋を見下ろす。満尋はかっと顔に熱が上ったのを感じた。

「ちが……！ すみませんでした」

こっそり物陰から窺っていたのは本当である。言い訳はすまいと、満尋は正直に頭を下げれば、「構わん」とすぐに鷹揚な答えが返ってきた。宇木衛門はほっと安心する満尋を追い越して、縁側に腰を

下ろした。

「どうだ。いい庭だろう」

宇木衛門の言葉に、満尋は静かに彼の後ろへ佇むと、「そうですね」と言葉を返した。月明かりでぼんやりと影を落とす小さな庭は、まるで山奥深くに迷い込んだような、幽玄な美しさを湛えていた。きっと昼間に見れば、また違った顔を見せるのだろう。少し視線を下へ向ければ、三坪ほどの池が縁のすぐ下にある。宇木衛門はこの池を使って『影映り』をしていたのだろう。満尋はぼんやりとその池を眺めていると、宇木衛門が徐に口を開いた。

「あれともう、十年以上の付き合いになる」

あれ、というのは先ほど『影映り』で話をしていた女性のことだろうか。庭を眺めていた宇木衛門は、首だけ満尋の方へ向けると、

「紫。俺の、ただ一人の妻だ」と再び池に視線を落とした。

「笑うか？ 『月夜里』^{やました}の女が妻などと……」

自嘲気に哂う宇木衛門に、満尋はなんと答えてよいかと黙り込んだ。確かに、普通では考えられないことだろう。現実が存在しているわけではないのだから。きつと周りの者ならば、「飯も作れて、体に触れることもできる。現世^{うつしよ}の女のが、ずっと魅力的だ」とでも言うだろう。しかし、満尋は笑うことも否定することもできなかった。

「まあいい。誰がなんと言おうと、俺には紫だけだからな。他の女など知らん」

宇木衛門は一人そう言い放つと、ぴたりと満尋と目を合わせた。

「満尋、知っているか？ 幻^{うつろ}を現にする手立てを」

「え？」

「昔ある旅の坊主が言っていた。『月夜里』を現にできる、と。あれから俺は、それについて書かれた書物も見つけた。面白いだろう？ ただの坊主の法螺話、と足蹴にするには勿体無いと思わないか？」

青い光に照らされて、宇木衛門の瞳が妖しく光る。満尋はその目

に魅入られそうになりながら、彼の言葉を噛み砕こうと必死になった。

「俺は紫が欲しい。お前だってあるだろう、『月夜里』に」

満尋は恐ろしくなって、そのまま後退りすると、「もう寝ます！」と叫んで方丈庵を後にした。自分達が使っている長屋へ入ると、部屋の戸の前でふうと力を抜いた。ずるずると重力に任せて座り込めば、一気に現実へ帰ってきたような心地だ。あの男は一体どこまで知っているというのか。この小さな明鵠寺の中のことなど、頭の宇木衛門には全てお見通しなのだろうか。そんな莫迦な。恐ろしさを感じたのは、あれはただ、場の雰囲気にもまれただけだ、と満尋は立ち上がると、勘吉と十壺が寝ている自分の部屋に入っていた。とりあえず、月夜の晩に、宇木衛門と二人っきりで話すことは避けたいと思いながら。

不知夜月 1

秋も足早に通り過ぎ、季節は冬を迎えていた。この時期を師走と呼ぶだけあって、今月は中々に大忙しである。

冬という季節は全てのものが死に近づく。ここ『月下辺』^{かすかべ}の人間はそう信じて疑わない。木々は葉を落とし、生き物の活動が緩やかになる。そしてなにより、生命の象徴である太陽の恩恵が得られなくなる。白い雪が深々と降り積もる世界に、生の躍動は感じられない。冬とは死なのである。だからこそ、人々はなんとかその死のイメージを振り払おうと、様々な意味を持つ祭事を行うのだ。とはいえ、満尋は観念的でスピリチュアルなものを、特別信じているわけではない。ただ祭りが多いな、くらいにしか思わなかったが。しかし、民衆、特に農民たちは真剣だ。昔からこの時期は、なんとか神様に来てもらい、生命の力を分けてもらおうと考えられているのだ。

満尋は「ほい」と渡された箱を長屋の前まで運んでいく。倉で渡されたそれは、重くはないが、大きくて長い為些か運び難い。なんとか長屋の前まで持っていけば、外で座りこんだ与市と八弥丸、二之助を見つけた。「これで最後だ」と声を掛ければ、八弥丸から「ありがとう」と返ってきた。

先に運んでいた箱の横に新しくどさり、と箱を置くと、中からん、と軽い音が鳴る。

「へえ、すごいな。一から作れるものなんだな」

満尋は八弥丸の手元を覗き込んで感嘆の声をあげる。「まあな」と、少し誇らしげに八弥丸は短刀を動かした。

彼らがしているのは、白鞆作りである。何でも明日どうしても白鞆が必要らしく、新人で去年の物を点検するように言われたのだ。皆はそう言われて「あー、もうそんな時期か」と頷いていたが、満尋にはさっぱり分からない。一人ピンと来ない満尋に、十壺が助け

舟を出して、「お迎へ鞆ですよ」と教えてくれた。

お迎へ鞆、というのは、白鞆を建物の入り口に飾って、神様に來て貰おうという民衆行事らしい。飾るものは鞆に限らず、下駄でもまな板でも何でもいいらしい。大事なのは、その素材だそう。十壺曰く、

「朴火ホオカシキノカミ巳伎大神様をお呼びするんです。だから、朴の木で出来たものでないといけないんですよ」

という事らしい。そこで、？衆では毎年この日は白鞆を飾ることにしているのだそう。神様を呼んで、無病息災に肖るのだとか。

「満尋、お前その今持って來たやつ、見ておいてくれないか」

八弥丸に言われて木の箱を開ければ、中に十数本の鞆が入っている。どれも白木のままだ。ほとんどが綺麗なものだが、内何本かはひび割れていたり、劣化の激しいものがある。それらは、八弥丸と与市行きだ。直せるものは直して、どうしても駄目なものは八弥丸が新しいものを拵えるらしい。八弥丸と与市に視線をやれば、二人は真剣な表情で手元の短刀を動かしていた。木を削り、着々と鞆の形が出来上がっていく。

「満尋、それちゃんと中も見ないと駄目だぜ」

二之助が満尋の持っている白鞆を見て言った。「中？」と聞き返せば、「こうするんだ！」と、一つ鞆を手にとると鯉口の部分に指を入れて、簡単に鞆を二つに割ってしまった。満尋も真似てやってみると、ちよつと力を入れただけで楽々鞆を割ることができた。

「あ、出來た」

「なー？ 簡単だらー？」

二人でぱかぱかと鞆を割ってみたが、どれも中を手入れする必要はなさそうである。二之助は詰まらなそうだったが、満尋は余計な手間が増えただけなのでは、と思っていた。八弥丸によれば、実際に刀を納めていたわけでは無いから、内側はそんなに痛まないらしい。それよりも、湿気で木が傷んでいるものの方が多いのだそう。 「じゃあ、これ開ける必要なかったんじゃないか」

「まあ、そうなるな」

満尋が不満を漏らせば、八弥丸は苦笑した。もっと早くに言って欲しかった。はあ、と溜息を吐けば、与市が「はい」と白っぽい粘液の載った板を差し出した。くん、と鼻を近づければ、馴染み深い臭いがする。

「それ、続飯^{そくい}。くっ付けて」

ああ糊か、と続飯を受け取ると、平たい棒で丁寧に鞆に塗りつける。「足りなかったらそこにあるから」と目で教えてくれた先には、おそらく昨日の残りだろう炊いた米が置かれていた。どうするのかわと思えば、練って水で溶かすらしい。

（小学校で使ってたでんぶん糊を思い出すな）

絵を描くのは嫌いだったが、工作は好きだった。手を動かした分だけ、目の前の物がどんどん形を変えていく。それがなんとも楽しかった。

今後ろから聞こえてくるのは、シャツ、シャツと木を削る音。隣には、四苦八苦しながら鞆を張り合わせる二之助の姿がある。中学校に上がって以来工作なんてしなかったな、と満尋は懐かしい思いに浸りながら、黙々と作業を続けた。

満尋たちが用意した白木の鞆は、その日の内にそれぞれ配られ建物ごとに飾られただけでなく、各部屋一鞆ずつ配られた。皆はそれを自分たちの部屋の入り口に取り付けている。満尋も勘吉、十壺と共に、自分たちの部屋の入り口に白鞆を掛ける作業へ取り掛かった。「？衆でもこういう行事ってちゃんとやるんだな」

一番背の高い勘吉が、鴨居の部分に鞆を飾るのを見て満尋が言った。職業柄、神も仏も無い、というイメージが強かっただけに、満尋にはこのお迎へ鞆は少し以外だったのだ。

「そうか？ 俺は神さんに来てもらって、息災で居させてもらいたいけどな」

勘吉は鴨居から手を離すと、自分が飾りつけた白鞆を見て言った。

それから、どこか気に入らなかったのか、ちょこちょこ手直しを入れる。

「死を祓って頂く為に神様を御呼びするんです。是非、先んじてあたしたちの所に来て頂きたいですね」

十壺がにこりと笑って、ああそうか、と満尋は納得する。元々の行事は、冬になると死に近づく、という概念から来ているのだ。荒事の多い？衆では、大怪我や殉死する確立がとにかく高い。皆、死に近い所に居るのだ。だからこそ、率先してこうした行事は行うに違いない。

「そうだな」

祈ってみようか、神様に。別の世界からやって来た満尋に、等しく加護が与えられるかは分からないけれど。

「よし、こんなもんだろ」

満足がいったのか、勘吉が漸く手を離れた。鴨居には五色の下緒が結ばれた白鞆が飾られていた。削り出したばかりの鞆は、今日八弥丸が拵えたやつだ。まだまだ色もさっぱりとして、初々しい。

「祖母さんが言ってたな。神さんは新しいものが好きなんだってさ。やったなー。俺たちの部屋にきつと一番に来るぜ」

「おや。それは良いですね」

「ああ、そうだな」

皆と無事に過ごせますように。

満尋はそう願いを込めて、白鞆を見詰めた。随分落ちるのが早くなった日が差して、ほんのりと橙に染まっている。一つ遣り遂げたような、感慨深い気持ちになっていると、「お迎へは明日ですよ」と、十壺が笑った。

不知夜月 2

日が沈んでからも賑やかな本堂を後にして、満尋はぼんやりと水面を眺めていた。『影映り』にいつも使うあの荒れた池である。氷の張った水面は、満尋の不安げな貌を鏡のように映し出していた。

前日に皆で準備した甲斐あって、お迎へ鞆の行事は恙無く終わった。今日一日は物忌みとして皆一切の外出を禁止させられたが、その分いつもとは違った一日を過ごすことができた。炊事係が気合を入れて作った夕餉は少しだけ豪華で、食材の乏しい冬とは思えないほどであった。夕刻、明鵜寺の本堂で、頭の宇木衛門が『お迎へ』ホオカシキノカミする朴火巳伎大神へ感謝の言葉を奉じると、あとはどんちゃん騒ぎの大宴会である。満尋にとって、このような宴会は二回目だが、前回と違うのは宇木衛門や六郎といった、？衆の重役が揃っていることだろうか。無礼講ではあるが、やはり彼らが中心となっているのは一目瞭然だ。満尋は控えめに下座で酒を飲みながら、同期とも呼べる友人らと話に花を咲かせていた。

そんな満尋が席を立ったのは、宴も酣たけなわといった頃合である。酒器を置いてふと外を見やると、朝から深深と降っていた雪が止んでいる。まるで別世界のような静寂に意識が吸い込まれそうになっていると、隣で飲んでいた十壺が「どうしました？」と声をかけた。どうやら、今回は酔い潰れないよう加減して飲んでいるらしい。

「いや。……ちよつと出てくる」

「みーつーひーろー、ここからだろー？ 白けさせるなよなー」

立ち上がる満尋に、ぐでんと二之助が枝垂れかかった。重くなった方の肩へ顔を向ければ、すぐ側で真っ赤になった少年が満尋を睨みつけていた。素面であつたら絶対に許さない距離である。この酔っ払いめ、と心の中で悪態をつく、満尋は二之助を引き離して十壺へ預けた。

「気分が悪い。吐きそうだ」

そう言えば、尚も満尋に絡もうとしていた腕が引っ込んで十壺へと移った。十壺は一瞬だけ不愉快そうに眉を寄せたが、すぐに苦笑して「厠にでもどこにでも駆け込んできなさい」と二之助を受け取った。満尋は小声で「ありがとう」と呟くと、そのまま一人本堂を後にしたのである。

一步外へ出れば途端に肌に触れる空気が冷たくなって、ぶるりとして体が震えた。大した暖房器具などないのに、酒の入った人間の熱は案外侮れなかった。満尋は袂に両手を入れながら、肩を縮めて長屋の裏へ回る。目指すは、『影映り』をしていた小さな池である。

習慣とは恐ろしいもので、頭よりも体の方がよくよく覚えているようだった。ふと外が気になったのも、きっとこの体が覚えた習慣の所為だろう。今は丁度、伊月と『影映り』をしていた時間だ。

満尋はさくさくと雪を踏みながら池の前までくると、じっと水面を見つめて反応があるのを待った。氷が張っていても『影映り』が出来るのかは分からないが、同じ水であることには変わらないのだし、大丈夫だろう、と満尋は思っている。しかし、いつまで経っても水面に伊月が現れることはなかった。また今日もか、と満尋ははあと溜息を吐く。最近はずっとこの調子だ。ある時からぱたりと伊月が現れない。

一体何が原因か。それはまったく分からない。しかし、九月の半ば頃を最後に、彼女が影を送ってくることは無くなった。もう、二ヶ月も伊月の顔を見ていない。自分が何か気に触るようなことを言っただろうか、と初めの頃は満尋も思い悩んでいた。或いは、『影映り』そのものの力が無くなってしまったのかもしれない、とも。あらゆる可能性を考えてはみても、それは結局満尋の頭の中でしか展開されず、本当のところは何一つ分からなかった。それでも、こうしてここに足を運ぶのは、この冷たい水面の向こうに伊月が居るのではないか、という漠然とした勘が働くからだ。

「伊月。居ないのか？ 返事をしてくれ」

我ながら、なんて切ない呼びかけだろうかとも思う。この二ヶ月、

満尋は毎日のようにこの場所から『月夜里』やましたへ伊月の名前を呼び続けてきた。諦めないのは、同じ神隠しに遭った現代人だという、不思議な繋がりを手放したくないからか。ここで手を離せば、きっともう二度と伊月と会うことは無いだろう。だからだろうか。いや、違う、と満尋は頭かぶりを振った。それもあるかもしれないが、それだけではないはずだ。自信があるのだ。まだ、自分たちは繋がっている。今日もまた、池の僅かな変化を見つけて、満尋はにやりと口元を歪めた。

それは、ついこの間気付いたこと。呼びかける度に、氷の下で躊躇う様に水が揺らめくのを満尋は知っている。

(さて、どう引っ張り出してやろうか……)

漠然とした勘は今、確固たるものへと変わった。伊月はこの向こうに絶対に居る。居ながら満尋の呼びかけに応えないでいるのだ。満尋は顎に手をやり、ふむ、と考え込む。どういうつもりか知らないが、散々自分を悩ませたのだ。少しくらいの意趣返しは、許されて当然だろう。そんな時、一つ思いついたことがあって、実行してみようと満尋はほくそ笑んだ。昔から言われている諺だが、きつと効果はあるだろう。満尋は最後にもう一度だけ伊月に呼びかけると、そっと池を後にした。小さな波紋にくすりと笑みを零して。

伊月が満尋の呼びかけに応えていないのではないか、と思い始めてから、満尋はさっそく思いつきを行動に移した。といっても、やっていることは今までと変わらない。毎夜同じ時間に伊月の名前を呼び続けるだけだ。しかし、今日は賭けに出てみようと思っていた。これで何も反応が無ければ、本当に最後の『影映り』になってしまいう可能性は充分にある。それでも、このままの状態が続くよりは、と満尋は早めに池へ向かった。

物置から借りてきた木槌で池の氷を叩き割る。意外としっかり凍っていたようで、薄いと思っていた氷は、それなりの厚さがあった。金槌の方が良かったかな、と思いながら、満尋はがんと木槌を

打ち下ろしていく。やがて、ひび割れた所から水が染み出し、直径二十センチメートルほどの穴を開けることができた。

約束の時間まではもう少し。小望月がゆっくりと中天へ昇るのを見ながら、満尋はそっと己の胸を押さえた。

それは今日の昼間のことである。昼餉を済ませ、腹ごなしに少しふらふらと出歩いていると、視界に鮮やかな紅いものが映りこんできた。それは、一面真っ白になった明鵠寺の中で、一際異彩を放っていた。

「今年も見事に咲いたな」

さく、と雪を鳴らしながら、声の主が満尋のすぐ隣に並ぶ。満尋は少し肩を跳ねさせたが、何事も無かったように「綺麗ですね」と返した。

宇木衛門と二人きりで話した夜からは大分日が経っているが、未だに満尋はこの男と対峙すると、緊張しないではいられない。宇木衛門もそれに気付いているようだったが、特に何かを言うことはなかった。

きらきらと光る雪の上には、花が丸ごと落ちた落椿が。首が落ちるようだと忌諱されることもある花だが、満尋は純粹に美しいと思う。一点の汚れも無い白の中に、静かに落ちていく強烈な赤は、いつそそれだけで芸術だった。

しばらくの間、二人は黙ってこの椿の木を鑑賞していたが、不意に宇木衛門が口を開いた。

「何か、打開策でも見つけたのか」

その問い掛けが何を指して言ったものなのか分からなくて、満尋は首をひねる。すると、宇木衛門は、ふっと表情を緩めた。

「最近何か悩んでいただろう。それが、ここ何日かは晴れ晴れとしていたからな。何か吹っ切れたのかと思ったただけだ」

「あ……ええ。まあ」

本当にこの男の観察眼には恐れ入る。満尋は曖昧に返事を返すと、気まずげに視線を逸らした。きっとそれが『月夜里』関連であるこ

とも感づいているのだろう。そういえば、宇木衛門は『月夜里』を現実のものにしたいのだと言っていた。一体それがどういったものなのかは満尋には分からないが、きっとここで一番『影映り』に詳しいのは彼だろう。

満尋はおずおずと尋ねた。

「あの、『月夜里』の人と逢えなくなった事がありますか？」
宇木衛門は「ん？」と、僅かに考える素振りをする。

「そうだな。月の満ち欠けで会えない日もあるが、それくらいお前も知っているだろう？」

「ええ。そうではなく。……あ、んー、その。もうふた月くらい『影映り』に応えてくれない、というか。居そうな気はするんですけど……」

満尋がそう言うと、宇木衛門は哀れんだ顔をして見せた。

「なんだ、満尋。お前拒まれているのか」

確かにそうなのだが、なんとなく「はい」とは言い辛い。無意識に満尋が顔を顰めたのを見て、宇木衛門は「すまん、すまん」と笑った。

「俺は『月夜里』に行った事は無いから知らんが、向こうには色々事情があるらしい。それに、お前は会うつもりでいるんだろう？」

「はい」

「なら、気にすることは無い。会って直接聞けば良いだけの話だからな。……そうだ、一つ良い事を教えてやる」

そう言った宇木衛門の顔は、少年のように輝いていた。

不知夜月 3

満尋は懷に入っているものを、潰さないようにそっと着物の上から押さえた。願わくは、これが不要なものになりませんように。満尋はそう心で祈ると、穴の開いた池の水面を見つめた。

いつもならば、とつくに伊月に呼びかけている時間である。特に、ここ何日かはきっかり同じ時間に『影映り』をしているから、向こうもそれは承知だろう。しかし、今日は、今日だけは、伊月に呼びかけたりしない。じっと待つのだ。相手の反応を。

満尋が思いついたのは、『押しても駄目なら引いてみな作戦』である。物事が上手くいかない時はやり方を変えてみる、ということだ。最も、満尋が良く聞くのは、恋の駆け引きとしてだが。恋の駆け引きはともかく、これは結構有効なのではないか、と満尋は考えていた。これで少し動揺でもしてくれば、また『影映り』ができるチャンスに繋がる。急に自分の呼びかけが無くなって精々焦ってくれ、と意地悪なことを思う一方で、どうかこれで終わりにしないでくれと、満尋は不安な気持ちを抑えていた。

冷たい空気を震わせて、時を告げる鐘が鳴り響く。満尋がこの池に来てから一刻が過ぎた。流石に、もう駄目か、と満尋は思った。布を敷いているとはいえ、冷たい雪の上だ。そろそろ尻の方も限界である。落胆の気持ちを全て溜息に込めて、恨めしく池を睨みつけた。とりあえず、二時間待ち続けてみたが、今まで通り水面は沈黙している。きっと伊月は、自分とは話したくは無いのだろう。これでもう、伊月とも、そして現代とも本当にお別れだ。「失敗か」と、表情を歪ませ腰を上げたその時だった。

それまでは、まったく変化の無かった水面が、俄かに慌しく揺らぎ始める。

聞こえてきたのは、激しく狼狽した伊月の声だった。

「ごめんね、ごめんね」

ただただ、只管謝って満尋の名前を呼び続ける。仕舞いには子どものように泣き出す始末である。満尋は、ははっと笑ってその場へたり込んだ。おかしい。もらい泣きだろうか。満尋は目に熱いものが込み上げて来るのを感じた。泣き声に混じって聞こえてくるのは、謝罪と後悔と、懇望。やっぱり、そこに居たじゃないか。満尋は目頭を押さえて、すん、と鼻を吸ると、気丈な声音で呼びかけた。「まさか泣かれるとは思わなかったな」

水鏡には、涙で目を真っ赤に腫らした彼女が映っていた。

ぐしゃぐしゃに泣いた伊月が落ち着くのを待って、満尋は話しかけた。「酷い顔だ」なんて捻くれた言葉しか出てこなかったが、本当は、泣くほど自分との『影映り』を大事に思ってくれていた事が嬉しくてしょうがない。勝手に二ヶ月も音信不通状態になって、こちらを困らせてくれたのだからと、少し意地悪なことを口にすれば、伊月は反省しているのか、再び零れた涙を拭いながら、「もうしない」と約束した。

それから満尋が『押して駄目なら引いてみな作戦』の種明かしをすれば、伊月は真っ赤になったり青くなったりと忙しかった。おそらく、満尋にずっと泣きながら呼びかけていたのが恥ずかしくなったのだろう。久しぶりに見る伊月はちっとも変わっておらず、一人百面相をする彼女の姿がひどく懐かしかった。

「それで、二ヶ月も『影映り』に答えなかった理由はなんだ？」
からかい半分の意趣返しも済んだし、そろそろ本題へ入ってもいいだろう。満尋が一番聞きたかったことを尋ねれば、伊月は少し言い難そうにもじもじと俯いた。

「あの、ね。『月下辺^{かすかべ}』ではどうか知らないけど、こっちでは、あんまり『影映り』って良く思われてなくて……」

眉を寄せ、悲しげにぼつりぼつりと伊月は言葉を零していく。

「『月下辺』の人と仲良くしている人を、影憑きって差別したりも、

あつて……。だから、その、ごめん」

「……そうか」

「この間、『影映り』をした時に、友達に満尋と話しているのを見られちゃつて……。その子に止めるように言われたんだ。この先、辛くなるだけだからって」

伊月にも伊月の事情があつたという訳か。確かに、と二ヶ月前の最後の『影映り』を思い出して、伊月の様子がおかしかった事を思い出す。慌てた様子の伊月は、突然何も言わずにぶつりと一方的に『影映り』を終らせたのだ。

「こっちは影憑きなんて呼ばれることは無いけどな。この間も宇木衛門が……っと、ヤベ」

「え？ 浮世絵？」

うっかり宇木衛門の恋人が『月夜里』やましたにいることを滑らして、急いで口を噤む。幸い、伊月にははつきり聞こえなかつたらしい。すぐに話を戻せば、彼女の意識はそちらに向いた。

しかし、『月夜里』ではそのように『影映り』を捕らえていたとは、露程思わなかつた。こちらの人たちは、『影映り』で『月下辺』の世界を見ることは、一種の娯楽のようなものだ。勘吉や十壺も興味津々で、中々『月下辺』の人たちに会えないのを残念がっている節があつた。満月の日には、月見代わりに『影映り』を楽しむ『月夜里』と『月下辺』では、『影映り』に対する人々の気持ちに差異がありすぎる。それが今回、伊月が二ヶ月も『影映り』を絶つた理由に繋がるのだろう。今度からは、そのことも考慮してこちらも気をつけよう、と満尋は心に留めた。特に何かしてあげられる訳ではないが、知っているのと知らないのでは違ってくるはずだ。それに、もし伊月以外の人が話してもいいというのなら、会ってもいい出来る限りのフォローはするつもりだ。だから、

「もう、二度と御免だぞ。次は無いからな」

と強く念を押せば、「はい」と静かな声が返ってきた。これでまた、いつも通りに二人で喋ることが出来る。

「そうだ」

満尋は忘れないうちに、と懷に手を突っ込むと、紅い花を取り出した。昼間宇木衛門と一緒に見た椿である。そして、もう一つ。こちらは鮮やかな紅葉の葉だ。満尋は少し形の崩れた椿を見て刹那躊躇ったが、すぐにそれを池の中へと落とした。水面に映った伊月が怪訝な顔でこちらを見ている。満尋が、上手くいけ、と念じる前に、その椿はゆっくりと池の中へ沈んでいった。そして、すぐに「うわあ！」と感嘆の声が上がる。どうやら上手くいったようだ。

『影映り』をしている時に水面に物を落とせば、向こうへそれを渡すことが出来る。宇木衛門が嬉々として教えてくれたのがこの事だった。彼によれば、無生物で小さなものなら、大体のものは送れるらしい。この『影移り』は満月の日だけだと思っていた満尋には、寝耳に水の話であった。そして、図らずしも、満尋と伊月はそれを一度だけ過去に行っていた。それが、紅葉の葉である。

二ヶ月前の最後に話した日。伊月は山へ行って紅葉を拾ってきたと満尋に話して聞かせてきた。その時に彼女が持っていたのが、今満尋の手にある紅葉である。最後、慌てた所為で落としたのだろう。それは水面を渡って満尋の許へやって来た。だから、この椿はささやかなお返しのつもりだった。花を贈るのは正直照れくさいし、柄ではないと満尋自身思う。しかし、小物などは持っていないし、本や食べ物のように、濡れてはまずい物が無事に送れるかは分からないかった。だから結局、花に落ち着いたのだった。

「嬉しい。凄く嬉しい……。ありがとう」

何度も何度もありがとうを述べる伊月に、満尋はほっと胸を撫で下ろした。そして、照れ隠しにくるくると紅葉で手慰む。「……枯れたら捨てろよ」と、突き放すように言えば、「また、そう言っている……」と嬉しそうに伊月が笑った。くすくす笑っているところを見れば、大方伊月も似合わないと思ったのだろう。こいつ、と睨め付ければ、さらに笑い声は大きくなった。

不知夜月 4

翌日、朝餉の席で顔を合わせた宇木衛門は、全てを察したようだ。言葉は交わさなかったが、「上手くいった様だな」と目が言っている。満尋は軽く会釈をしてそれに応えると、同期の仲間たちの所へ向かった。

先に食べていた孫太夫と八弥丸の側に盆を下ろすと、二人は「お、早いな」と少し腰をずらして場所をあけてくれた。

「珍しいな。あの二人は一緒ではないのか？」

良く味が滲みた大根の煮付けを味わっていると、孫太夫が不思議そうに尋ねてきた。満尋はそれをごくんと飲み込むと、

「さあ？ 部屋には居なかったな」

と、ご飯に箸を伸ばした。別に部屋が一緒だからといって、いつも三人一緒に居るわけではない。おそらく勘吉は既に居るだろう。名馬の里出身というだけあって、やはり馬と接している時が一番生き生きしている。朝も良く馬番の手伝いに行っているようだ。十壺はよく分からないが、一人でふらっと散歩に行ったりするので、きつと今朝も何処かをぶらついているのだろう。

「それはそうと、今日は望月だ。不寝番は……新左衛門と与市だったか？」

八弥丸がそう尋ねれば、孫太夫が「ああ」と応えた。二人ともどことなく口元が引きつっている。そして、それは話を聞いていた満尋も同じであった。

「あいつら……できるか？」

誰ともなく口にして、不安げな表情で顔を見合わせる。満尋は、誰がこの二人を組み合わせたのか、と肩を落とした。

満月の日は『影映り』の力が最も強くなる日である。そこで、？衆では念のため、不寝番組んで真夜中の非常時に備えていた。今のところ満尋が来てから、この日に何か起きたことは無かったが、人

が怪我をする事も少なくはないらしい。それは『影移り』の方の影響に因るのだが、どこで何が起きるか分からないのだから、気をつけようにも運次第である。そこで、迅速な対応の為、今晚は寝ずの番をする者を置くのだが、

「新左衛門はすぐに寝そうだしな……」

と、八弥丸が溜息を吐いた。与市はともかく、新左衛門が一晩起きていられるかどうかが問題である。パートナーがしっかり者の孫太夫や八弥丸、気遣いの出来る十壺や主膳ならば少しは安心なのだが。満尋の中で、与市は何を考えているか分からない不思議君である。天真爛漫な新左衛門と会話が成立するのか、満尋には今一想像できなかった。そして結局は、心配になったこの三人が、時々様子を見に行くということにまとまったのである。

満月の夜は『影映り』の力が最も強くなる。しかし、満尋はまだ満月の日に『影映り』をしたことは一度もなかった。いや、伊月と初めて会ったのは満月の晩だったが、それも僅かな時間だ。実際に普段とどれだけ違うのか、ということは分からなかった。だから、満尋は今夜が少しだけ楽しみなのだ。昨晚は二ヶ月振りに伊月と会い、話をした。今夜が『影映り』の力が一番強いというのなら、さらに近づくことが出来るのだろうか。

『影映り』をしに行くついでに、満尋は不寝番をしている新左衛門と与市のもとに立ち寄った。案の定新左衛門は眠そうにしていたが、与市がぱつちりと大きな目を開けているので大丈夫だろう。「寝るんじゃないぞ」と新左衛門に一声かけると、「まかせろ……」と今にも落ちそうな声が返ってきた。おいおい大丈夫か、と満尋が苦笑すると、与市が「僕は寝ない」と微動だにせぬまま答える。夜間なので、今日は愛用の銃ではなく、彼の背丈よりも長い直槍すやりを持っていた。その様子に、新左衛門が一人寝落ちしたところで問題はないだろうと、満尋はその場を後にした。

満尋がもう何度も通った池への道は、凍ってジャリジャリとした

固めの雪で覆われていた。昨日自分で付けた足跡は、明け方に降った雪によって綺麗に消されている。そこにまた新たに足跡を付けながら進んで行くと、いつもの池が見えてきた。満月の夜にしては暗いなと空を見上げると、どうやら雲が出始めたようだった。月に叢雲といったところか。雲の向こうで満月はぼんやりとしている。あまり暗いと互いに顔が見えなくなるなど、満尋は慣れた手つきで灯明皿に火を灯し、それに手を当てて暖を取りながら伊月が映るのを待った。

暫くして、水面が揺らめいて氷をたぶたと浮き沈みさせた。

「いつもより少し早いくらいか」

満尋は背を預けていた木から離れて池に近づくと、いつものように水面を覗き込んだ。しかし、そこに伊月の姿はなく、代わりに橙色の何かがちらついている。

「なんだ……？」

明かりを持った右手を水面に近づけて、それが何かを良く見ようとする、目の前に真っ赤なものが迫ってきて満尋は慌てて後ろに飛びのいた。「うわっ」と声をあげて、池から数歩下がった所に尻餅をつく。目の前には真っ赤な火柱が立ち上っていた。持っていた灯明皿はあろうことか池に放り投げてしまったらしく、さらに悪いことには、その油が水に跳ねて火の粉が当たりに飛び散った。

しばし呆然とその様を見ていた満尋だったが、焦げた臭いにはっとして起き上がる。枯れ木に燃え移った炎に、雪をかけた上着を叩き付けてみたりと消火を試み、なんとか火が消えると、満尋は深呼吸を一つした。見つめた先で衰えることの無い業火がうねりをあげる。水の上を轟々と燃え続ける炎は、なんとも奇妙でファンタスティックだが、この炎は『月夜里』から来たものだ。満尋の内を言いようの無い不安が襲う。向こうで何かあったのだろうか。

満尋が長屋の側まで戻ると、皆が慌しく動き回っているところだった。寝巻きのままの勘吉が満尋を見つけてやってくる。

「お前どこ行ってたんだよ！ 探したんだぜ」

勘吉はそう言うのと、「それよりも」と、すぐに表情を改めて真剣な顔を見せた。満尋もそれに合わせてすぐに意識を切り替える。

「よく分かんねえが、あちこちで小火^{ほや}が起きてる。とりあえず、書庫、武器庫、厩、方丈庵の消火が先だ。十壺は先に書庫に行ったぜ。俺たちも急ぐぞ！」

「ああ」

書庫にはたくさんの書物が保管されている。戦の兵法書が主だが御伽草子なども僅かだが置いてある。倉の中には貴重なものある為、急いで消火に向かわなければならぬだろう。他の場所は大丈夫なのかと聞けば、武器庫には先輩衆徒が向かっているらしい。あそこには刀剣以外に、火薬の類も置いてある。引火すれば大惨事だ。

満尋と勘吉が書庫まで駆け足で向かうと、皆が炎に向かって雪玉を投げているところだった。まだ、書庫そのものには燃え移ってはいないが、このままでは直ぐにでも火が届きそうである。

「何遊んでんだよ！ 水はどうした！」

勘吉が怒声を浴びせると、主膳が困惑した顔をこちらに向けた。

「それができないんですよ。ほとんどの井戸や水場から火が出ているんです。『影移り』の所為なのかなあ」

口調はのんびりとしているが、主膳の額には汗が滲んでいる。勘吉は「くそっ」と悪態を吐いて、皆同様雪を掴んだ。満尋も上着を使って火消しに参加する。二之助と新左衛門は孫太夫の指示で、燃え移りそうな枯れ草や植木を刈り取っていった。

そろそろ火も小さくなってきたかという時、どん、と大きな爆発音が本堂の向こう側から聞こえた。まさか火薬が爆発したんじゃないか、と皆顔を強張らせる。

「先輩たちは……！」

無事だろうか、と満尋が駆け出そうとすると、書庫に向かって二人分の人影がこちらに近づいてきた。

「皆さん、無事そうですね。先ほどの爆発は、大事無いので安心なさい」

「お、ちゃんとお消してくれたんだべな。お疲れさん」

「六郎さん！ 京太郎さん！」

やって来たのは六郎と京太郎の二人であった。六郎は煤けた顔で二之助の頭をぐりぐりと撫ぜると、いつもののにこに顔で皆を見回した。京太郎は涼やかな表情のまま、切れ長な目で辺りの状況把握をしている。その冷静さが、六郎とは正反対で少しおかしかった。

「火も大分治まっていますし、ここはもういいでしょう。どうやらここと繋がっている『月夜里』の何処かが大火のようです。こちらからではどうしようもないので、引き続き皆さんは警戒を怠らずに――」

「六郎！ 京！」

切羽詰った男の声が京太郎の言葉を遮った。京太郎はその愁眉を顰めて後ろを振り向くと、息を切らせた伝内がこちらへ向かって来たところだった。

「んなにすっ飛ばして、どーした？」

「まずいぜ、源助からだ。真田町しんたも同じ状況だよ。ただ、小火騒ぎどころじゃねえらしい。早くしねえと、町全部燃えちまうてよ」

伝内の言葉に京太郎と六郎が顔を見合わせる。満尋たちも思わず「えっ」と声をあげてしまった。町の間人だけでは、もう手が追いつかないらしい。京太郎が「分かりました」と静かに言くと、こちらを振り向いた。

「皆さん、真田町に向かってください。大至急です」

こんなに長い夜はあっただろうか。満尋は焼け残った瓦礫の残骸に腰を下ろして、重たい溜息を吐いた。彼の近くには、勘吉や十壺、二之助もいる。皆疲れきった顔で、満尋と同じように腰掛けたり、地べたに座り込んだりしていた。

「朝になってしまいましたね……」

「ああ。でも、なんとか火は治まった」

「治まったはいいけど、半分も燃えちまったぜ……」

「おれ、もう動けないよ……」

町の大火は？衆の居た明鵠寺とは比べようも無い燃え方だった。町に到着した時点で既に何軒かは全焼し、右往左往する人々で大混乱だった。また、例によって井戸や水辺がほとんど使えない。？衆の者が応援で続々と駆けつけるも、消火は難航を極めたのである。結局消火は諦め、町民の避難と燃え広がらない為に家を壊すことに重点を置き、なんとか火の回りを町の半分までに食い止めたのだ。朝を迎えた今は、焼け跡で小さな火が燐る程度に治まった。それも直に消えるだろう。見上げた空は厚い雲に覆われ灰色。そして焼け焦げた大地も灰色。なんとも虚しい景色だった。

そして、満尋の心をさらに虚しくさせたのは、その日から伊月との『影映り』が完全に途絶えたことである。

不知夜月 4 (後書き)

『水面の月〜The Reverse Of The Girl〜』
第一部 完結です。

ここまで読んでくださりありがとうございました。

第二部開始まで少々お待ちくださいませ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4994w/>

水面の月～The Reverse Of The Girl～

2011年12月17日13時47分発行